

那覇市文化財調査報告書第 36 集

ガジャンビラ丘陵遺跡

— 小禄金城土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告 —

1997年3月

沖縄県 那覇市教育委員会

那覇市文化財調査報告書第36集

ガジャンビラ丘陵遺跡

— 小禄金城土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告 —

1997年3月

沖縄県 那覇市教育委員会

序

この報告書は、小禄金城区画整理事務所の「小禄金城土地区画整理事業」に伴う埋蔵文化財「ガジャンピラ丘陵遺跡」の緊急発掘調査の成果を収録したものです。

発掘調査は、1994年2月に開始し、同年3月に終了しました。

遺跡一帯は、今次大戦で日本軍の高射砲陣地として、さらに戦後は米軍施設の建設等によってその大半が破壊されましたが、幸い洞穴と古墓群は比較的良好な状態で残っておりました。

調査の結果、洞穴内からは土器や大量の貝殻が、古墓群からは多数の蔵骨器等が検出され、沖縄の歴史を解明する上で大変貴重な成果を得ることができました。

また、洞穴については那覇市のみならず沖縄における貴重な遺跡として、関係機関と調整の結果、ガジャンピラ公園内に保存することができました。今後広く一般の方々に、生涯学習の場として活用していただけるものと期待しております。

本報告書が今後多くの方々に有効に活用されることを願うとともに、広く文化財愛護思想の高揚と諸開発計画における保存協議の円滑な推進に寄与することを期待するものであります。

末尾になりましたが、本遺跡の発掘調査および本書刊行にあたり資料整理に従事していただいた方々、並びに洞穴の保存にご尽力いただいた多くの関係者の方々に対して深く感謝申し上げます。

1997年3月

那覇市教育委員会

教育長 嘉手納 是敏

例 言

1. 本報告書は、平成5年度に実施した「ガジャンピラ丘陵遺跡」の緊急発掘調査の成果を収録したものである。
2. 調査は、「小禄金城土地区画整理事業」に伴うもので、那覇市小禄金城区画整理事務所の委託を受けて那覇市教育委員会が実施した。
3. 石器の石質鑑定は、神谷厚昭氏（沖縄県立博物館）人骨の鑑定は、土肥直美氏（琉球大学医学部）による。記して謝意を表す。
4. 第2図は、国土地理院発行の地図を第3図は、那覇市都市計画図を複製し一部加筆した。
5. 図版P.L.1は、国土地理院発行の空中写真を複製し一部加筆した。
6. 第2表は、高宮廣衛「南島考古雑録（1）」『南島考古』No.11 沖縄考古学会 1991年に掲載された第1表を複製引用した。
7. 本報告書作成にあたり、調査組織（第Ⅱ章）の資料整理メンバーに加え下記のメンバーに協力を得た。
分類：浦崎 祐子
実測：城間千栄子・宮良 文子
拓本：富山 園美
復元：びしょっぶ利恵子・高良チカ子・具志みどり
写真：栗山 初美・赤嶺 知子・富山維佐子・喜屋武朋子・津波古清美・知念美智子
砂川 貴子・富島 靖子・徳嶺 明子・金城 礼子・勝連 紋子・福里ひろみ
国吉美奈子・東恩納孝子・上原 章子
8. 挿図と図版の遺物番号は一致するように配置してある。
9. 本報告書の執筆・編集は内間があたった。
10. 出土遺物は那覇市教育委員会文化課で保管している。

報告書抄録

ふりがな	が じ ゃ ん び ら き ゅ う り ょ う い せ き							
書 名	ガ ジ ャ ン ビ ラ 丘 陵 遺 跡							
副 書 名	小禄金城土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告							
巻 次								
シリーズ名	那覇市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第36集							
編 著 者 名	内 間 靖							
編 集 機 関	那覇市教育委員会文化課							
所 在 地	〒900 沖縄県那覇市樋川2-8-8 TEL 098-853-5775							
発 行 年 月 日	西暦1997年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
が じ ゃ ん び ら ガ ジ ャ ン ビ ラ き ゅ う り ょ う い せ き 丘 陵 遺 跡	な ば り し じ ぶ ち 小 禄 那 覇 市 字 小 禄	47201		26度 12分 03秒	127度 40分 03秒	19940207 } 19940325	250	小禄金城土地 区画整理事業 に伴う緊急発 掘
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
ガ ジ ャ ン ビ ラ 丘 陵 遺 跡	洞穴遺跡 古墓	沖縄新石器時代 前IV・V期 (縄文時代後・ 晩期相当期) 沖縄新石器時代 後期 (弥生～平安時 代相当期) 近世	洞穴 掘り込み墓	土器・石器・貝製品・骨製品・ 貝類遺骸 中国産磁器・本土産陶磁器 沖縄産陶器・土器 金属製品(銭貨・指輪・か んざし・煙管)・ガラス製品 人骨				

目 次

序	
例言	
報告書抄録	
第Ⅰ章 調査に至る経緯	2
第Ⅱ章 調査組織	3
第Ⅲ章 遺跡の位置と環境	4
第Ⅳ章 調査経過	8
第Ⅴ章 調査成果	10
第1節 洞穴地区	10
1. 上部及び内部の概要	10
2. 層序	12
A. 洞穴上部の層序	12
B. 洞穴内部の層序	12
3. 出土遺物	15
A. 土器	17
B. 石器	31
C. 貝製品	31
D. 骨製品	34
E. 貝類遺殻	34
第2節 古墓群地区	36
1. 各古墓の概要	36
2. 出土遺物	48
A. 中国産磁器	48
B. 沖縄産陶器	50
C. 蔵骨器	58
D. 転用蔵骨器	71
E. 金属製品	75
F. ガラス製品	77
第3節 出土人骨	78
第Ⅵ章 まとめ	79

挿 図 目 次

第1図	沖縄県那覇市の位置 ……………1	第25図	中国産磁器：青磁碗 青花碗・青花香炉……49
第2図	那覇市及び周辺の主要な遺跡 ……………5	第26図	沖縄産陶器・施釉：小碗・碗・皿…53
第3図	ガジャンピラ丘陵遺跡の位置 ……………6	第27図	沖縄産陶器・施釉：鉢・蓋・蓋物…54
第4図	遺跡の地形と立地 ……………7	第28図	沖縄産陶器・施釉：水注・瓶 秉燭・煙管……55
第5図	古墓配置及び 洞穴上部グリッド配置図 ……………9	第29図	沖縄産陶器・無釉：水鉢・搗鉢・煙管…56
第6図	洞穴内部トレンチ配置及び断面図…11	第30図	沖縄産陶器・陶質：土瓶・鉢……57
第7図	洞穴上部層序断面図……………13	第31図	蔵骨器：甕形「蓋」第Ⅰ群……………62
第8図	洞穴内部層序断面図……………14	第32図	蔵骨器：甕形「蓋」第Ⅱ群……………63
第9図	土器：第Ⅰ群A類……………21	第33図	蔵骨器：甕形「身」第Ⅰ群……………64
第10図	土器：第Ⅰ群B類……………22	第34図	蔵骨器：甕形「身」第Ⅰ群……………65
第11図	土器：第Ⅰ群C類……………23	第35図	蔵骨器：甕形「身」第Ⅱ群……………66
第12図	土器：第Ⅰ群D類……………24	第36図	蔵骨器：甕形「身」第Ⅱ群……………67
第13図	土器：第Ⅰ群D類……………25	第37図	蔵骨器：箱形「蓋」……………68
第14図	土器：第Ⅰ群胴部・底部……………26	第38図	蔵骨器：箱形「身」……………69
第15図	土器：第Ⅱ群A類・B類・胴部……29	第39図	蔵骨器：箱形「身」……………70
第16図	土器：第Ⅱ群底部……………30	第40図	転用蔵骨器：土器壺……………72
第17図	石器：石斧・敲石・不明……………32	第41図	転用蔵骨器：四耳壺・三耳壺・甕…73
第18図	貝製品、骨製品……………33	第42図	蔵骨器窯印……………74
第19図	1号墓……………37	第43図	金属製品：銭貨……………76
第20図	2号墓……………39	第44図	金属製品：指輪・かんざし・煙管 ガラス製品：用途不明……………77
第21図	3号墓……………40	第45図	洞穴内（左側斜面・Aトレンチ） 層序別出土遺物図……………82
第22図	4号墓……………42		
第23図	5号墓・6号墓……………44		
第24図	7号墓……………45		

挿 表 目 次

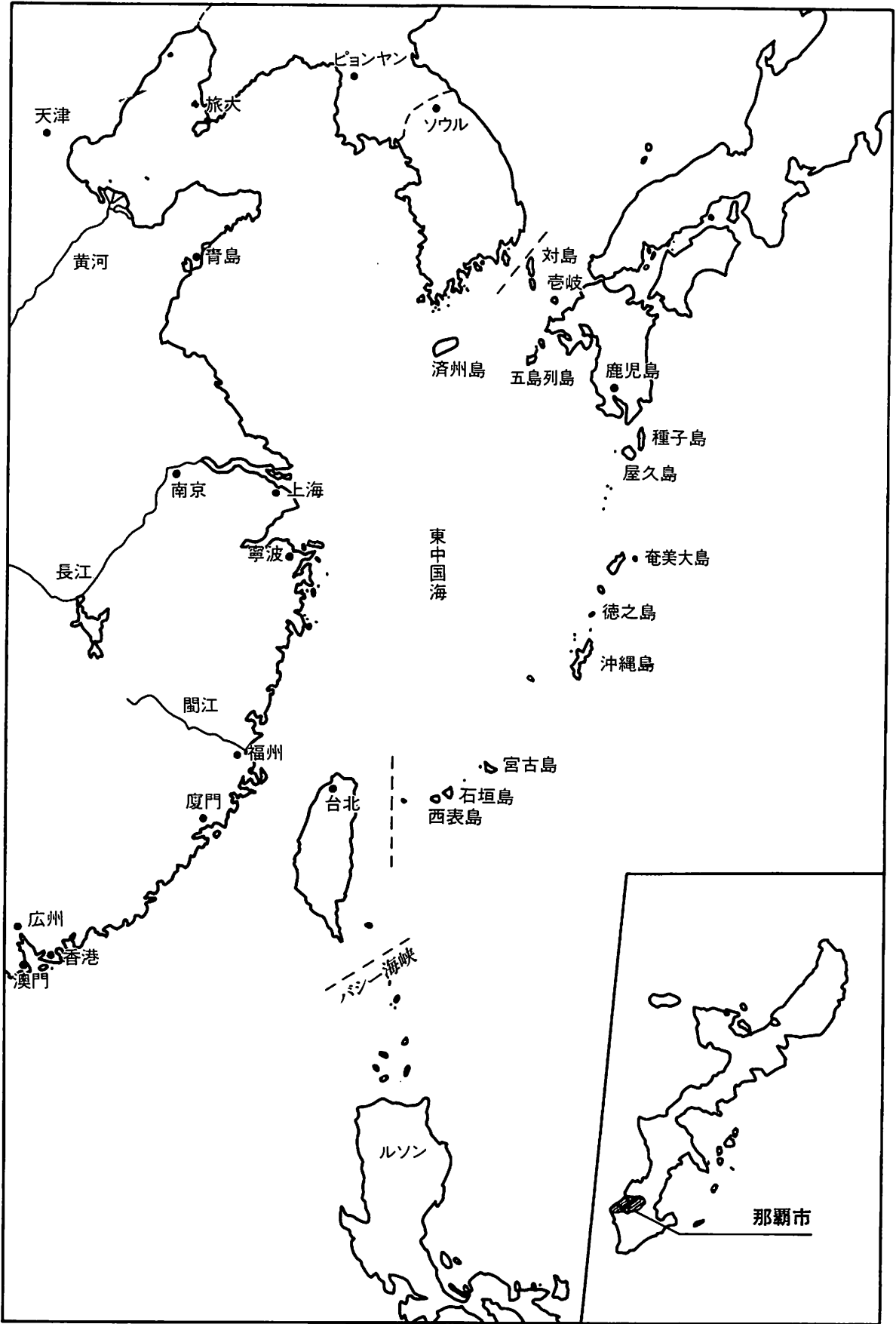
第1表	洞穴地区遺物集計一覧(陶磁器)……15	第7表	第Ⅱ群土器(口縁部)観察一覧……27
第2表	沖縄諸島の暫定編年……………16	第8表	第Ⅱ群土器(胴部)観察一覧……28
第3表	洞穴地区遺物集計一覧(土器)……17	第9表	第Ⅱ群土器(底部)観察一覧……28
第4表	第Ⅰ群土器(口縁部)観察一覧……18	第10表	石器観察一覧……………31
第5表	第Ⅰ群土器(胴部)観察一覧……20	第11表	貝製品計測一覧……………31
第6表	第Ⅰ群土器(底部)観察一覧……20	第12表	骨製品計測一覧……………34

第13表	貝類遺殻(二枚貝)集計一覽……………34
第14表	貝類遺殻(巻貝)集計一覽……………35
第15表	古墓觀察一覽……………46
第16表	古墓群地区遺物集計一覽(陶磁器)…48
第17表	中国産磁器觀察一覽……………48
第18表	沖繩産陶器(施釉)觀察一覽……………51
第19表	沖繩産陶器(無釉)觀察一覽……………52
第20表	沖繩産陶器(陶質)觀察一覽……………57
第21表	蔵骨器：甕形「蓋」觀察一覽……………59

第22表	蔵骨器：箱形「蓋」觀察一覽……………60
第23表	蔵骨器：甕形「身」觀察一覽……………60
第24表	蔵骨器：箱形「身」觀察一覽……………61
第25表	転用蔵骨器觀察一覽……………71
第26表	金属製品：錢貨觀察一覽……………75
第27表	金属製品：指輪觀察一覽……………75
第28表	出土人骨構成一覽……………78
第29表	出土人骨鑑定一覽……………78

図 版 目 次

PL. 1	遺跡周辺の空中写真	PL. 23	中国産磁器：青磁碗 青花碗・青花香炉
PL. 2	遺跡遠景・近景	PL. 24	沖繩産陶器・施釉：小碗・碗・皿
PL. 3	洞穴地区の状況	PL. 25	沖繩産陶器・施釉：鉢・蓋・蓋物
PL. 4	洞穴地区上部の層序	PL. 26	沖繩産陶器・施釉：水注・瓶 乗燭・煙管
PL. 5	洞穴内部の状況	PL. 27	沖繩産陶器・無釉：水鉢・搗鉢・煙管
PL. 6	洞穴内部の層序	PL. 28	沖繩産陶器・陶質：土瓶・鉢
PL. 7	古墓群地区の状況	PL. 29	蔵骨器：甕形「蓋」第Ⅰ群
PL. 8	各古墓の状況（1号墓）	PL. 30	蔵骨器：甕形「蓋」第Ⅱ群
PL. 9	各古墓の状況（2・3・4号墓）	PL. 31	蔵骨器：甕形「身」第Ⅰ群
PL. 10	各古墓の状況（4号墓）	PL. 32	蔵骨器：甕形「身」第Ⅰ群
PL. 11	各古墓の状況（7号墓）	PL. 33	蔵骨器：甕形「身」第Ⅱ群
PL. 12	各古墓の状況（5・6・7号墓）	PL. 34	蔵骨器：甕形「身」第Ⅱ群
PL. 13	土器：第Ⅰ群A類	PL. 35	蔵骨器：箱形「蓋」
PL. 14	土器：第Ⅰ群B類	PL. 36	蔵骨器：箱形「身」
PL. 15	土器：第Ⅰ群C類	PL. 37	蔵骨器：箱形「身」
PL. 16	土器：第Ⅰ群D類	PL. 38	転用蔵骨器：土器壺
PL. 17	土器：第Ⅰ群D類	PL. 39	転用蔵骨器：四耳壺・三耳壺・甕
PL. 18	土器：第Ⅰ群胴部・底部	PL. 40	金属製品：錢貨
PL. 19	土器：第Ⅱ群A類・B類・胴部	PL. 41	金属製品：指輪・かんざし・煙管
PL. 20	土器：第Ⅱ群底部		ガラス製品：用途不明
PL. 21	石器：石斧・敲石・不明		
PL. 22	貝製品、骨製品		



第1図 沖縄県那覇市の位置

第1章 調査に至る経緯

本遺跡の所在する小祿金城土地区画整理地区は、これまで米軍用地（米軍住宅）として使用されてきた広大な土地が1980（昭和55）年返還されたことにより、同地の有効な跡地利用を図るため1982（昭和57）年の都市計画決定を経て1983（昭和58）年より造成工事が開始された地区である。

造成工事が漸次進められている中、1990（平成2）年に工事範囲内に洞穴が所在していることから、これが埋蔵文化財に該当するか那覇市長親泊康晴より照会を受け、同年7月試掘調査を実施した。その結果、洞穴内より土器片が数点検出されたため埋蔵文化財として事前に発掘調査を実施する必要がある旨を回答した。

また、1991（平成3）年には洞穴の北西部に所在する古墓についての照会を受け、同年10月に現地踏査を実施した結果6基の古墓が確認され、今後保存のための調整が必要である旨を回答した。

以上の結果を踏まえ、1992（平成4）年10月当該地域の発掘調査について事業主管である那覇市建設部小祿金城区画整理事務所と協議を行ったが、当時は那覇新都心地区を中心にその他多数の開発に伴う調査を実施していたことから、現状の体制で発掘調査を実施することは困難であるとして協議は一時滞っていた。その後数度の協議を重ねる中で、区画整理地区においては当該事業の認可期間が1993（平成5）年度で完了の計画であり、さらに地権者から早期整備の強い要望がある等、事業の進捗を遅らせることができないとして早期に発掘調査を実施してほしい旨の要請があった。

その結果、那覇市教育委員会としては現状の体制を維持しながら各開発に伴う発掘調査のスケジュール調整をし、当該地域の発掘調査を実施することとした。調査は1994（平成6）年2月7日から3月25日まで実施した。

当初、当該地域に所在する洞穴は「住吉遺物散布地」^(註1)内の洞穴で登録されたものとして調査を実施していた。しかし、その後所在位置を詳細に検討した結果、同洞穴は1974（昭和49）年沖縄県教育委員会による第一回米軍基地内調査の際に発見されたものであることが判明した。さらに、1981（昭和56）年那覇市教育委員会で行った市内遺跡詳細分布調査においてもその所在が確認されており、同調査報告書である「那覇市の遺跡」^(註3)に「ガジャンピラ丘陵遺跡（洞穴も含む）」としてすでに登録されたものであることが確認できた。また、那覇市教育委員会では1982（昭和57）年に国道331号線改築工事に伴う発掘調査で「ガジャンピラ丘陵遺跡」^(註4)の調査を実施した（第3図・赤点線）が、その際に幸い工事範囲外として現状のまま保存されていた洞穴が今回調査対象となったものと位置的に一致することも確認できた。

以上の結果から、今回調査した洞穴は「ガジャンピラ丘陵遺跡」に含まれることが明確となった。また、洞穴北西部に位置する古墓は同じ遺跡の中に複合する古墓群として扱い、今回調査の対象となった当該地全体（同図・赤実線）を「ガジャンピラ丘陵遺跡」として調査・報告することとした。

第II章 調査組織

発掘調査および報告書作成は次の組織により実施された。

調査責任者	那覇市教育委員会	教育長	嘉手納 是 敏
”	”	文化課 課 長	高江洲 隆 (平成5～7年度)
”	”	”	金 武 正 紀
調査総括	”	主 幹	金 武 正 紀 (平成5～7年度)
調査事務	”	主幹兼係長	古 塚 達 朗
”	”	係 長	新 城 和 範 (平成5年度)
”	”	”	仲 間 健 幸 (平成6年度)
”	”	”	佐久川 馨
”	”	主任主事	手登根 朗 (平成5年度)
”	”	”	我那覇 生 男
”	”	主 事	當 銘 優 子
調 査 員	”	主任主事	島 弘
”	”	主 事	内 間 靖
”	”	”	玉 城 安 明
”	”	”	仲宗根 啓
発掘作業員	赤 嶺 行 助	運 天 政 善	運 天 文 子 運 天 秀 子
”	金 城 文	砂 辺 潤 也	富 永 富 士 比 嘉 貞 夫
”	真志喜 朝 寛	宮 平 良 子	宮 良 知 子 屋比久 和 子
世 話 人	島 袋 幸 江		
資料整理	(洗 浄 ・ 注 記)	城 間 久美子	崎 浜 貴 子
	(接合・分類・集計)	城 間 久美子	城 間 真利子 崎 浜 貴 子
		宮 城 友 美	宮 城 かの子 下 地 初 枝
		吉 嶺 末 子	国 吉 由紀枝 阿 部 直 子
	(実 測)	城 間 久美子	崎 浜 貴 子 宮 城 友 美
		宮 城 かの子	下 地 初 枝 吉 嶺 末 子
		国 吉 由紀枝	阿 部 直 子
	(復 元)	城 間 久美子	崎 浜 貴 子 宮 城 友 美
	(拓 本)	下 地 初 枝	国 吉 由紀枝
	(ト レ ー ス)	宮 城 かの子	吉 嶺 末 子 城 間 久美子
	(写 真)	城 間 久美子	

第三章 遺跡の位置と環境

本遺跡は沖縄県那覇市字小禄に所在する。同地域は那覇市の中心からほぼ南西方向にあり、西の国道331号線と東の県道221号線に挟まれた108.8haの広大な面積を有する小禄金城土地区画整理地内に位置している。

本遺跡一帯は那覇軍港の南西に形成された、ほぼ北西から南東方向にかけて馬の背状に延びる丘陵となっている。丘陵頂部に立つと、北東に市街地から天久台地、東に首里から識名台地一帯が一望され、西方海上には慶良間諸島が眺望できる。今回調査した洞穴および古墓群は丘陵の南西側斜面、標高約30～40mの範囲に占地している。同一帯は島尻層群と呼ばれる青灰色のシルト質泥岩を基盤に、その上部に琉球石灰岩がのった地質をなしている。洞穴は同石灰岩中に形成されており、古墓群も斜面に露頭した岩盤を巧みに利用して造られている。

当該地区を含む小禄地域は、1954（昭和29）年那覇市に合併するまで12カ所の字で編成された小禄村として集落を形成していた。^(註5) その間、戦時中は日本軍の海軍司令部や海軍飛行場等多くの陣地が構築され、さらに那覇港を控えていたことから米軍の激しい攻撃によりほぼ全域が焦土と化した。終戦後の1946（昭和21）年には本遺跡を含む広い範囲が米軍に接収され、1980（昭和55）年に返還されるまで約35年の長期に亘って米軍住宅地として使用されていた。

戦前まで本遺跡一帯は比較的起伏のある地形であったと推察されるが、戦後は米軍に接収され宅地造成の影響により本来の形状が変わりはじめた。さらに返還後は第I章で述べたように、1983（昭和58）年から区画整理による大規模な造成工事が行われ、特に丘陵より南側は殆ど平坦に近い状態となり旧地形と比較して大きく変貌している。一方、丘陵はその頂上部がほぼ全面に亘って削平されているが、斜面部は宅地や採石等により掘削されているものの洞穴・拝所・古墓・井泉等があり往時の景観が僅かに残されている。

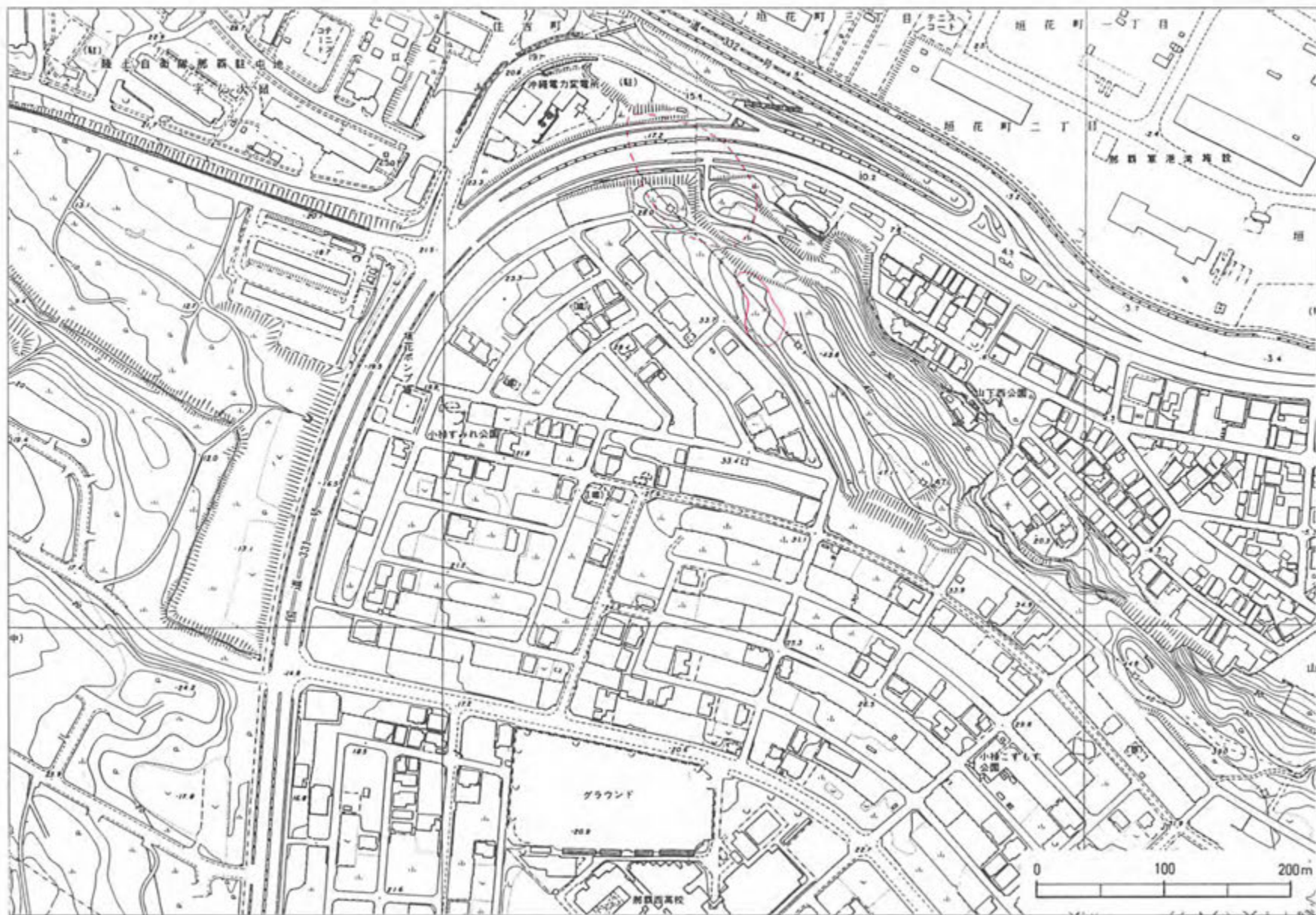
本遺跡の周辺には、丘陵北西端に今回調査した洞穴と一連の遺跡であったガジャンピラ丘陵遺跡（1982年に調査され現在は国道331号線が通り消滅）が、これより東方の北側斜面には住吉遺物散布地（洞穴も含む）、丘陵南東端にはトゥムイ古墓群が所在する。^(註6) 同古墓群北東に密集する住宅地のやや小高い丘の中腹には、32,000年前の洪積世人類として全国的に知られる山下洞人が発見された山下町第一洞穴（県指定史跡）^(註7) が所在している。また、本遺跡の丘陵より県道221号線を隔て南東に延びる丘陵上にはカニマン御嶽遺物散布地^(註8) が所在している。このように周辺には旧石器から中・近世まで多様な遺跡が分布している。（第2図）

丘陵の眼下には国場川下流に形成された入江（漫湖）から外洋に河口（那覇港）が開き、同河口の北西端から西側にかけては東中国海に向け標高約4mの海岸低地が広がる。また、沖合いには珊瑚礁が発達している。このような地勢は、本遺跡から多数の貝や魚骨等が検出されていることと合わせて、遺跡の沿岸部一帯が古代から優れた漁場として往時の人々に自然の恵みをもたらした環境であったと推察される。

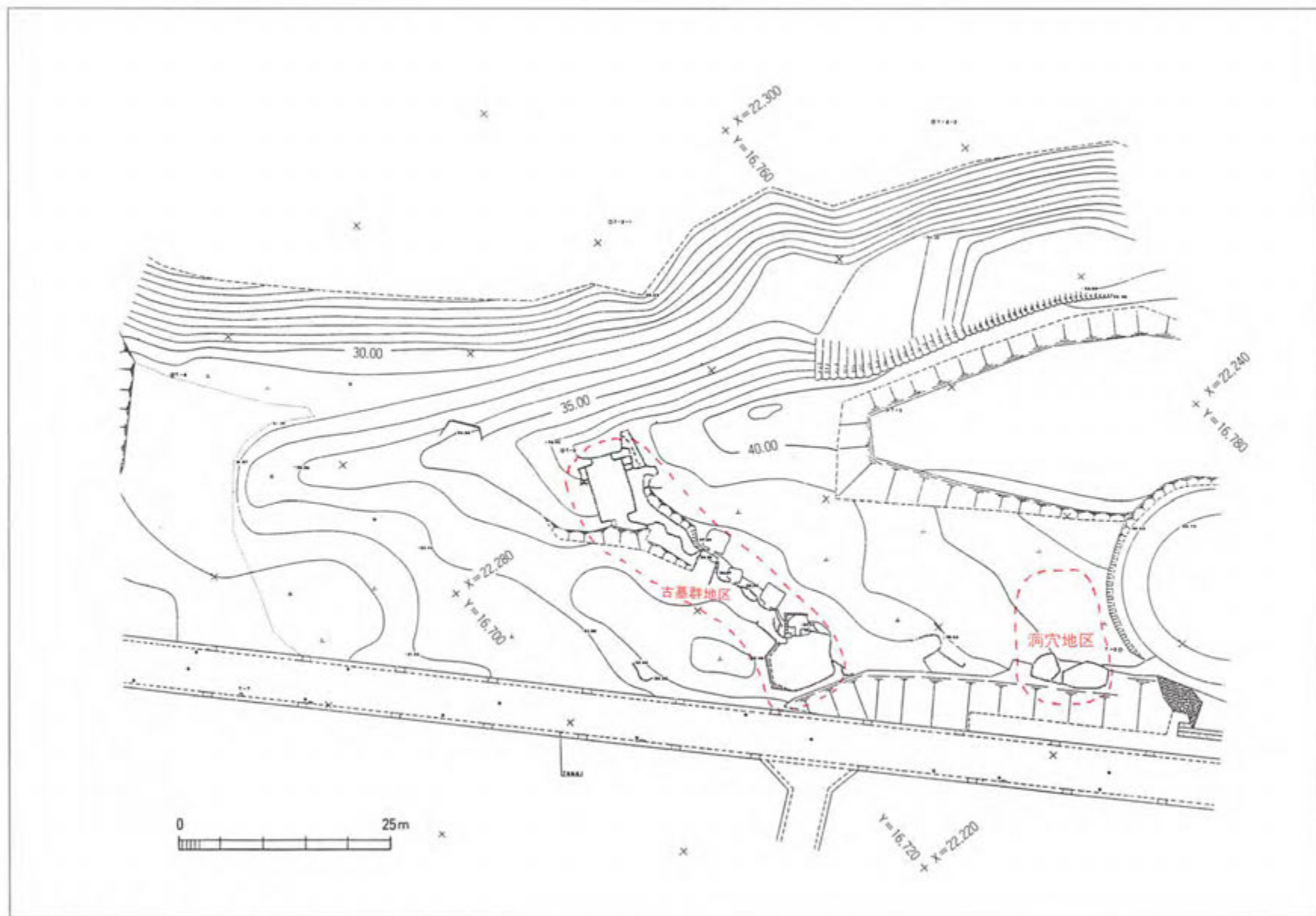
番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	ギリチ原遺跡	24	安瀬原原遺跡
2	崎城川遺跡	25	吉原西森遺物敷石地
3	天久グスク	26	首尾城遺跡
4	ハナグスク	27	玉置岡穴遺跡
5	三重グスク	28	崎山御跡遺跡
6	舞物グスク	29	魚下原遺跡
7	原良原森グスク	30	石田グスク
8	ガジャンビラ丘陵遺跡	31	鎌名シーマ御跡遺跡
9	住吉遺物敷石地	32	鎌名原遺跡
10	山下町第一洞穴	33	名島地原遺物敷石地
11	トゥムイ古墓群	34	曹尼城グスク
12	カニマン御跡遺跡	35	崎野カニマン御跡遺跡
13	院崎原遺跡	36	相原原グスクナチ遺跡
14	民川原遺跡	37	長原グスク
15	安瀬原原遺跡	38	津嘉山クギー遺跡
16	安瀬原原西遺跡	39	安平田遺跡
17	安瀬原東原遺跡	40	内巻グスク
18	船月原遺跡	41	宮平ノロ原内遺跡
19	ヒヤジョウモ遺跡	42	宮平遺跡
20	筑前古墓群(南地区)	43	宇地グスク
21	筑前古墓群(北地区)	44	於岐グスク
22	ナーチャーモ古墓群	45	内間遺跡
23	安瀬原古墓群		



第2図 那覇市及び周辺の主要な遺跡



第3図 ガジャンピラ丘陵遺跡の位置 (赤実線：今回の調査範囲 赤点線：1982年の調査範囲)



第4図 遺跡の地形と立地

第Ⅳ章 調査経過

本遺跡は洞穴（上部含む）地区と古墓群地区の大きく二つの地区に分けられる。（第4図）

調査は1994（平成6）年2月7日から3月25日までの期間、作業員12名と現場世話人1名、計13名の体制で実施した。

調査は、古墓群の範囲および明確な基数を把握するためバックホーを用いて斜面部の埋土の除去から開始した。当初、発掘調査前の踏査では6基確認されていたが、最終的に1基増え7基の墓が確認された。確認された墓は南東より1号墓とし北西端の亀甲墓を7号墓として順次番号を付けた。

踏査で確認された6基の墓（1～4・6・7号墓）は、墓の形状ないし墓口等が部分的に地表に露出していることからその所在が明らかであったものの、殆どの部分が米軍による造成工事で埋められていた。5号墓は完全に埋められ、しかも墓室の凹みが辛うじて確認できただけでの状態であった。

（第5図）

各墓の埋土をバックホーを用いて除去した後、作業員により7号墓の墓庭部から発掘を開始し1号墓・2号墓と順次調査を進めた。調査の結果4号墓が最も保存状態が良く、墓室の床面にはサンゴ片が敷かれている点で注目された。蔵骨器については、7号墓の墓室天井が崩落して内部の状況が不明である以外、残る6基の墓室には安置されていなかった。しかし、4号墓の墓庭より人骨が納められた多数の蔵骨器が、墓室から出され放置された状態で出土している。

調査中1号墓の墓口下層より、去った大戦で日本軍が使用していたらしい砲弾（75mm）が3個出土したため、警察へ連絡後自衛隊によって撤去してもらう一幕があった。後の聞き取り調査でわかったことであるが、本遺跡の丘陵頂部に戦時中日本軍の高射砲陣地があったらしく、古墓群の一部が同陣地として使用されていたとのことであった。

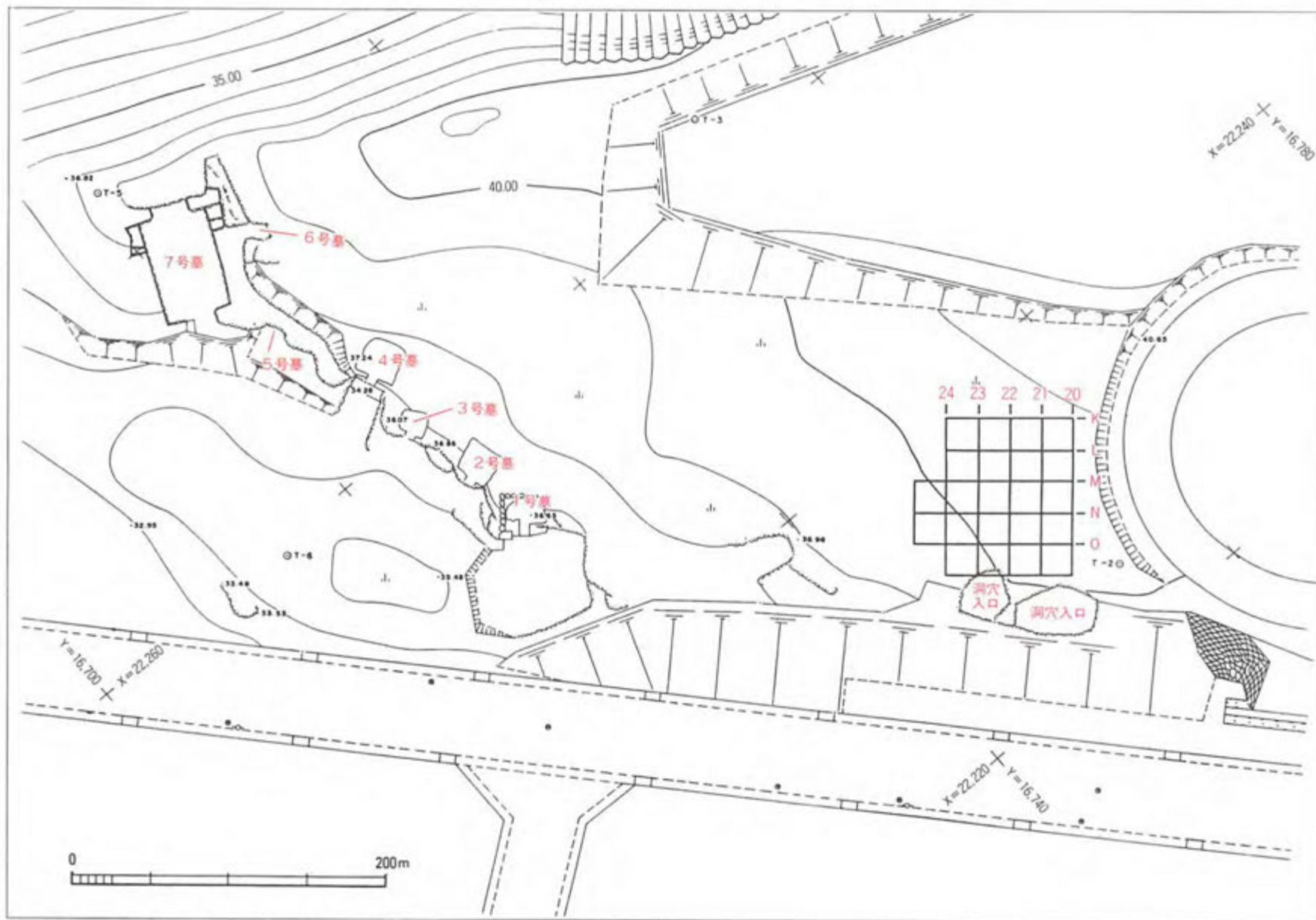
洞穴地区は、洞穴のほぼ上部に位置する平場部分と洞穴内部の二カ所を発掘調査した。

上部は多数の大型の石が散乱していたため、これらをバックホーで除去することから始めた。その後作業員で草刈りおよび表面の清掃を行い、グリッド設定の準備をした。

グリッド設定は、洞穴の入口に対してほぼ並行するライン（南東～北西）と同直行するライン（北東～南西）を基本に、2m×2mを1グリッドとして22ポイント設けた。グリッドのライン番号は南東から北西へ20・21・22・・・、北東から南西へK・L・M・・・とし、各グリッドの番号は東隅の杭を読むこととした。（第5図）

調査は、Mライン（20～23）・22ライン（K～N）・24ライン（M～N）に土層観察用の畦を設け、K-20・22グリッドから洞穴入口方向へ徐々に発掘を行った。造成によりほぼ全面が削り取られているため20cm程度掘り下げると石灰岩の岩盤が露出する状況であったが、部分的に凹地や洞穴に繋がる割れ目に包含層が確認された。

洞穴内部の調査は入口の大きさが人一人屈んでやっと入れる程度であったことと、入口周辺の岩盤に亀裂が生じ危険な状態であったため、バックホーで岩盤の除去と同時に入口の拡張から開始した。また、作業を開始する前に内部へ殺虫剤を散布しムカデ等の害虫駆除を行い、その後照明2個を



第5図 古墓配置及び洞穴上部グリッド配置図

設置して散乱するごみの清掃とトレンチ設定の準備を行った。

調査は内部中央の平坦部にはトレンチを設け、入口に向かって左側の斜面部では堆積土を半裁後残り半分を層序ごとに掘り下げた。

平坦部では、ほぼ中央に土層観察のため幅1 m・長さ4 mの試掘トレンチを設定し最下層（岩盤）まで掘り下げた。観察の結果を踏まえ、試掘トレンチに並行して入口側よりA、最奥部にB、両者間にCの各トレンチを設定して包含層の掘り下げを行った。（第6図）包含層は約30～40cm程度と比較的浅いものの、洞穴内の暗く狭い空間での作業とあってかなりの時間と労力を要した。作業と並行して、平板測量・土層断面実測・写真撮影を行った。

洞穴および古墓群両地区が完掘後、スカイマスター（高所作業車）を用いて遺跡全体の写真撮影を行い、発掘調査を終了した。

なお、古墓群の遺構実測と遺跡全体の現況図（コンター図）は、写真測量および平板測量による作成を業者に委託した。

第V章 調査成果

第1節 洞穴地区

本地区の調査は前章で述べたように、洞穴のほぼ上部と内部に分けて行った。

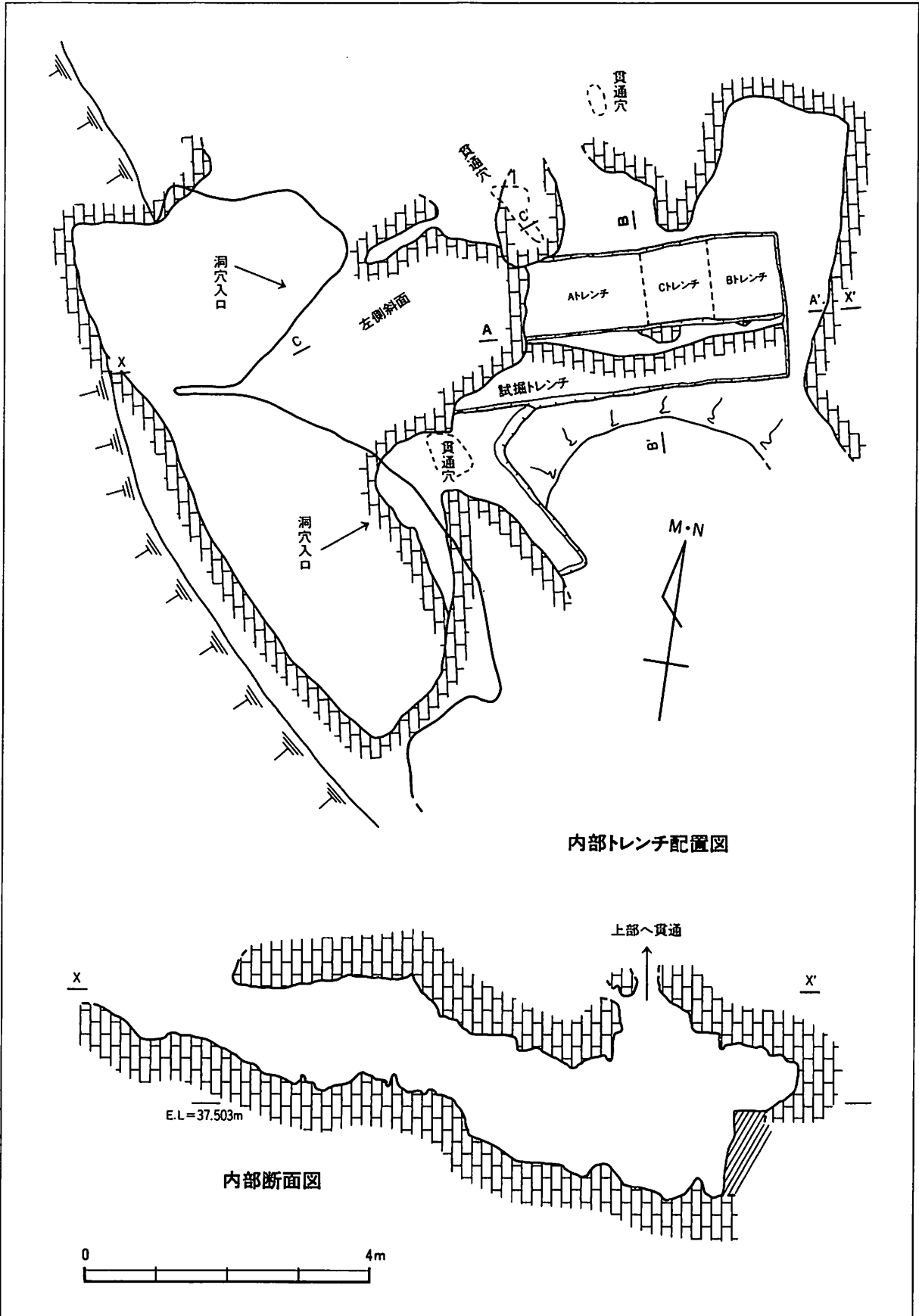
以下、両部の概要について記す。

1. 上部及び内部の概要

上部は東から西にかけて僅かに傾斜しているが、基本的に全体が平坦な面の広がる地形を呈し、グリッドを設定し調査した一帯は標高約40m付近に位置する。一帯は米軍に接収される前後に造成されており、岩盤の凹地や割れ目の一部にやや厚く包含層が堆積しているものの殆どは表土層から岩盤まで20cm程度と浅く、場所によっては岩盤が露出している部分もあった。住居跡やピット等の遺構は検出されていない。層序は地山層を含めて基本的に4枚確認された。

内部は入口から中へ向かって左側（北側）で斜面部になった堆積土と、中央の平坦部をそれぞれ掘り下げた。洞穴の入口は南西方向に開口し、本来人が一人やっと入れるほどの広さであったが調査の都合上大きく広げた。内部は東へ約9 m、北へ約2 mとほぼL字状の奥行きを呈し、幅は2～5 m前後とかなり入り組んでいる。高さは地表面より天井まで最も高いところで約2 m、低いところで約70 cmを測り、天井及び入口付近下面には多数の鍾乳石が発達して全体的に大人が屈んでやっと入れる状況であった。

入口左側の堆積土は北東から南西に傾斜した状態で堆積しており、同土の直上に位置する天井には上部より内部に穴が貫通し、堆積土はこの穴を通して流れ込んだものと確認できた。最も厚いとこ



第6図 洞穴内部トレンチ配置及び断面図

ろで1 mを越えていたが、斜面状の堆積であるため最上部と最下部では厚さにかなりの差があった。層序は3枚確認されている。

内部下面の堆積土は中央部から最奥部まで殆ど平坦な面として広がる状況を呈していた。中央部の南半分に幅1 mの試掘トレンチを東奥壁前まで設定し、最下層の岩盤が露出するまで掘り下げた。その結果、岩盤が露出する深さは奥に行くに従い増し、それに伴い堆積土の厚さも入口側で40cmであるのに対し最奥部で1.2 mを測った。層序は基本的に6枚確認できたが、包含層は堆積土の上部1/3のみでそれ以下は無遺物層が厚く堆積していた。また、内部において人の生活・居住していた痕跡は確認できなかった。

以下、上部と内部の層序を各層別に記す。

2. 層序

A. 洞穴上部の層序 (第7図)

土層観察用としてMライン (20~23)・22ライン (K~N)・24ライン (M~N) の3カ所に畦を設定した。確認された層序は基本的に第I層 (表土層)・第II・III層 (遺物包含層)・第IV層 (地山) の4枚である。

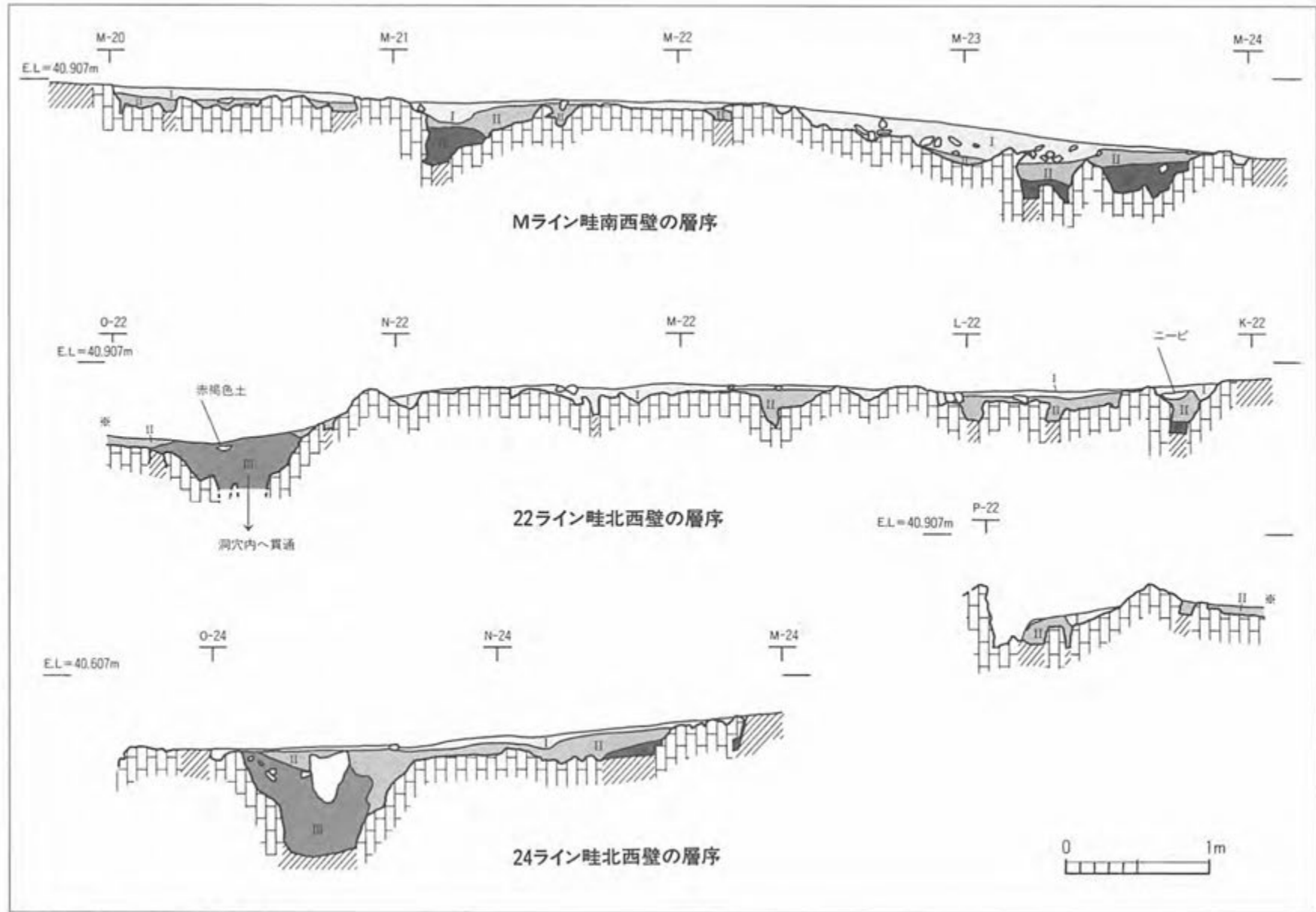
- 第I層：黒色土 調査範囲のほぼ全面に見られる表土攪乱層である。締まりの悪いパサパサした土質で、近・現代の遺物に混じって土器の細片も少量含む。
- 第II層：褐色土 岩盤及び地山直上に堆積する包含層である。土器を多く含むが同層の上部は攪乱を受けており、近・現代の遺物を伴う。
- 第III層：黒褐色土 N-21~24グリッドの岩盤割れ目に見られる土器・貝を含む包含層である。N-21~22グリッド内では同層がすでに表面に露出し、上部がやや攪乱を受け近・現代の遺物が含まれていた。
- 第IV層：赤褐色土 岩盤直上に堆積する無遺物層。琉球石灰岩風化土 (島尻マージ土) のいわゆる地山である。

B. 洞穴内部の層序 (第8図)

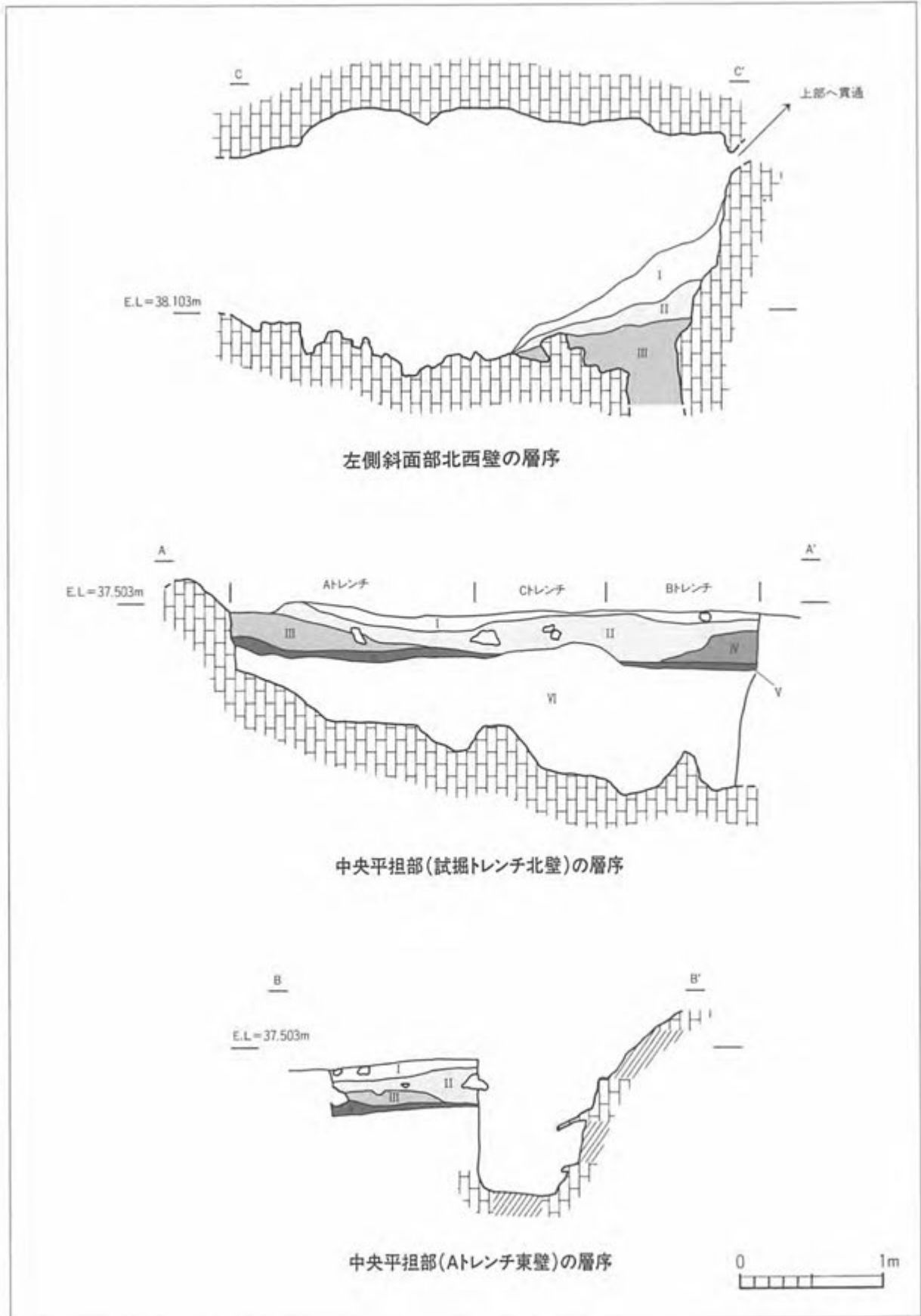
内部は入口左側の斜面部と中央の平坦部で、それぞれ土層観察を行い層序の確認をした。前者は北西側の堆積部分を残し半裁を行った。半裁時に多数の土器・貝が検出されている。その結果3枚の遺物包含層が確認され、すべての層より土器・貝が検出されている。後者は試掘トレンチの北壁面を観察、これを踏まえ同トレンチに並行してA・B・Cのトレンチを設定し掘り下げた。観察の結果、基本的に第I・II・III層 (遺物包含層)・第IV・V・VI層 (無遺物層) の6枚確認された。この内I~III層は斜面部で確認された各層と対応している。

a. 左側斜面部の層

- 第I層：黒色土 炭化物を含む比較的パサパサした土質である。多数の土器・貝と共に沖縄産陶器が検出されている。



第7図 洞穴上部層序断面図



第8図 洞穴内部層序断面図

第Ⅱ層：茶褐色土 礫の混じりが多くやや締まりのある土質である。土器・貝を包含する。

第Ⅲ層：淡黒色土 炭化物混じりで3層中締まりの良いやや粘りのある土質である。土器・貝を多数包含する。

b. 中央平坦部の層

第Ⅰ層：黒色土 平坦部のほぼ全面に浅く堆積する。炭化物を含む。土器・貝と共に沖縄産陶器を検出。

第Ⅱ層：茶褐色土 大小の礫を多数含む。土器・貝を多数包含する。

第Ⅲ層：淡黒色土 炭化物を含み粘りのある土質である。A・Cトレンチにかけて堆積する。上部2層に比べ遺物の包含量は少ない。

第Ⅳ層：茶褐色土 Bトレンチの東隅に斜面状に堆積する無遺物層である。

第Ⅴ層：黄色土 VI層直上に薄く堆積するサラサラした土質の無遺物層である。

第Ⅵ層：黄褐色土 きめが細かく締まりのある土質の無遺物層である。

3. 出土遺物

本地区出土の遺物は人工遺物と自然遺物に分けられる。人工遺物では土器・石器・貝製品・骨製品・陶磁器等が、自然遺物には貝類遺殻・獣骨等が得られている。

土器・石器・貝製品・骨製品の詳細については、次項で記述する。貝類遺殻については洞穴内で出土したものを一覧表(第13・14表)にまとめた。獣骨については紙面の都合上今回は省略した。なお、陶磁器については出土地点別にその数を一覧表(第1表)に示し、これらの内代表的なものは、第2節で古墓群地区の出土陶磁器とともに挿図と観察一覧にまとめて掲載した。

第1表 洞穴地区遺物集計一覧(陶磁器)

出土地点・層序	種類	中国産陶磁器			本土産陶磁器	沖縄産陶磁器					不明	合計	
		青磁	褐釉	青花		施釉	無釉	陶質	円盤状	窯道具			
洞穴内	AトレンチI層					1							1
	BトレンチI層								2				2
	CトレンチI層							1					1
	左側斜面					3	5		4				12
	左側斜面I層								1				1
	入口部清掃				2				2	1			5
洞穴上部	K-20I層				3		1						6
	K-21I層					1	1						2
	K-21II層				1	2	4		2				9
	K-22I層				2	2	1						5
	K-22II層			1	1								2
	K-23I層						1						1
	K-23II層						1						1
	L-22II層				3	5	6	9			3		26
	L-23I層				16	9	5	3					33
	M-22I層			1	18	18	12	8	4		4		65
	M-22II層			1	10	29	6	13		1	1		61
	M-23I層	1		1	12	12	5	6	1		4		42
	M-23II層			1	3	18	11	1					34
	M-24I層						1						1
	M-25II層				6	1		5			2		14
	N-20I層				7	6		4					17
	N-20II層				2	1					3		6
	N-21I層						1	1					2
	N-21II層				2	5	1	4					12
	N-22I層		1		7	17	11	24	1		2		63
	N-22II層					2		1					3
	N-23I層				3	2		1					6
	N-24I層				2								2
	N-24II層						1						1
	O-20I層				1	1		4			1		7
	前庭部清掃				6		1						7
	表探			3	31	4							38
	合計	1	1	8	138	141	75	96	7	1	20		488

第2表 沖縄諸島の暫定編年

本土	沖縄	土器型式	沖縄諸島発見の九州系土器	その他の編年資料	現行編年
縄文時代	早期	前期 I 野国第4群 ヤブチ式土器 東原式土器	} 爪形文土器	ヤブチ式 6670±140 Y. B. P. 東原式 6450±140 Y. B. P.	早期
	前期	II 条痕文土器 室川下層式土器 曾畑式土器 神野 A 式土器 神野 B 式土器		条痕文土器 曾畑式土器	
	中期	III 面縄前庭 I 式土器 ← 面縄前庭 II 式土器 ← 面縄前庭 III 式土器 ← 面縄前庭 IV 式土器 ← 面縄前庭 V 式土器 ←	旧具志川 A 式 旧具志川 B 式 旧具志川 C 式 旧神野 C 式 旧面縄前庭式		中期
	後期	IV 神野 D 式土器 神野 E 式土器 伊波式土器 萩堂式土器 大山式土器 室川式土器		伊波式 (熱田原) 3370±80 Y. B. P. 伊波式 (室川) 3600±90 Y. B. P.	前期
	晚期	V 室川上層式土器 宇佐浜式土器 仲原式土器		入佐式並行器 黒川式土器	中期
弥生時代	前期	後期 I 真栄里貝塚	板付 II 式土器 亀ノ甲類似土器		後期
	中期	II 具志原式土器	山ノ口式土器		
	後期	III アカジャンガー式	免田式土器	アカジャンガー式は 中津野式並行か?	
古墳時代 } 平安時代	IV	フェンサ下層式土器		類須恵器	期

◎「フェンサ下層式は城時代初期」とする見解もある。

(1991. 4. 5日改訂)

A. 土器

本地区において出土した土器は大きさ1cm未満の小片を含めると1000点を越える。この内、洞穴上部および内部において出土した大きさ1cm以上の破片総数は744点である。(第3表)

器種は口縁部片の形状から推定して殆どが深鉢形と甕形であるが、数点壺形が見られる。

分類の概念^(註9)としては沖縄新石器時代前Ⅳ～Ⅴ期(第2表)に相当するものを第Ⅰ群、沖縄新石器時代後期(同表)に相当するものを第Ⅱ群として大別し、さらに各群の中で細分した。

以下、各群の分類概念を記述し、掲載した資料個々の詳細は観察一覧を参照されたい。

第3表 洞穴地区遺物集計一覧(土器)

出土地点・層序	器種部位	Ⅰ群						Ⅱ群						合計										
		深鉢形			壺形			鉢形			甕形				小計									
		口	胴	底	口	胴	底	口	胴	底	口	胴	底											
洞穴上部	K-21 Ⅱ層													0								1	1	
	K-22 Ⅱ層	1																					1	1
	K-23 Ⅱ層		3																				3	5
	M-22 Ⅱ層	1										1	1										2	5
	M-24 Ⅱ層			5																			5	1
	N-21 Ⅱ層			4																			4	9
	N-21 Ⅲ層			1																			1	5
	N-22 Ⅱ層			3																			3	1
	N-22 Ⅲ層			5																			5	7
	N-23 Ⅱ層	3	7	1																			11	7
	N-23 Ⅲ層			3																			3	59
	N-24 Ⅱ層			1																			1	12
	N-24 Ⅲ層	2	11																				13	2
	O-21 Ⅱ層			9																			9	32
	O-22 Ⅱ層			3																			3	1
洞穴内	AトレンチⅠ層	3	19																				22	20
	AトレンチⅡ層	6	21			1																	28	9
	AトレンチⅢ層	1	27																				28	28
	BトレンチⅠ層																						0	3
	BトレンチⅡ層	4	34	1																			39	47
	CトレンチⅠ層	1	35																				36	40
	CトレンチⅡ層			12																			12	12
	CトレンチⅢ層			2																			2	2
	左側斜面Ⅰ層	5	11																				16	50
	左側斜面Ⅱ層			12	1																		13	30
	左側斜面Ⅲ層	7	28	1																			36	55
	左側斜面 試掘	17	70	3	1																		91	168
	試掘トレンチ			4																			4	9
	入口部 清掃	3	12																				15	66
	小計	54	342	7	2	0	0																405	
	合計		403		2																		405	744

第Ⅰ群土器

沖縄新石器時代前Ⅳ～Ⅴ期(縄文時代後期～晩期)に相当する土器のグループである。文様・器形等、本遺跡において最もバラエティーに富んでいる。口縁部を肥厚させるものも多く、胎土には石灰質砂粒の混入が見られる。口縁部が残る資料はその形態により四つに、底部は三つに分類した。

A類(第9図: PL.13)

口縁部が肥厚するものである。肥厚部の断面形態は歯ブラシ状で、中央が若干凹むものである。有文と無文がある。有文は口縁肥厚部と同直下および口唇部に施文され、単筒状工具による横捺刻文を主体に、列点文や押し引き文がみられる。

B類 (第10図：P L. 14)

口縁部の断面形態が方形に肥厚するものである。有文と無文がある。有文は口縁部および同直下に押し引き文、横捺刻文、連点文等を施したものがみられる。

C類 (第11図：P L. 15)

口縁部の断面形態が丸みを帯びて肥厚するものである。有文と無文がある。有文は押し引き文、横捺刻文、点刻文、連点文等の他斜位沈線を施すものも認められる。施文部位は口唇部・口縁部・肩部と様々である。

D類 (第12・13図：P L. 16・17)

口縁部の断面形態が三角形に肥厚するものである。有文と無文に分けられる。有文は押し引きの連点文を主体とし、他に横捺刻文、列点文、縦位に沈線と凸帯を施したものがみられる。無文の中には口縁肥厚部に瘤状の突起が貼付されたものがみられる。

胴部 (第14図1：P L. 18)

口縁部が欠失しているため上記四つのいずれのものか不明。器壁が厚く焼成は良好である。第I群の資料中唯一図上復元が可能なものである。

底部 (第14図2～8：P L. 18)

底部資料は僅かに7点しか得られていない。形態に着目して三つに分類した。

- a：立ち上がり部が僅かに屈曲気味で、胴部へストレートに開いていくもの。(2～5)
- b：立ち上がり部が丸みを帯び、胴部へ膨らみを持ちながら開いていくもの。(6・7)
- c：立ち上がり部が丸みを帯び、胴部へストレートに開いていくもの。(8)

第4表 第I群土器 (口縁部) 観察一覧

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層序	器種	分類	口径 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	焼成	色調	混入物
第9図1 PL13-1	左斜面 Ⅲ層	深鉢	IA		口縁部が肥厚。	口唇と口縁部下に単線の横捺刻文。	やや軟質	茶褐色	石灰質砂粒 石英
" 2 " 2	" "	" "	" "	25.0	口縁部と胴部上位が肥厚。	口唇、口縁部下に単線の肥厚上下位に単線の列点文。	やや硬質	淡褐色	石灰質砂粒
" 3 " 3	" "	" "	" "	16.4	口縁部やや外反。口縁部と胴部上位が肥厚。	口唇、口縁部に単線の押し引き文。口縁部はやや乱れたステップ状の施文。内面がポーラス状。	やや軟質	淡褐色	石灰質砂粒
" 4 " 4	Aトレンチ Ⅲ層	" "	" "		下部が肥厚する。	肥厚上部に単線の横捺刻文。同下部にも同様の痕跡。	軟質	暗褐色	石灰質砂粒
" 5 " 5	" "	" "	" "	24.2	口縁部が肥厚。やや内湾気味。	口唇、口縁部中央に単線の横捺刻文。胴部上位に単線で縦位の横捺刻文が2条。内面に指圧痕。	やや硬質	茶褐色	石灰質砂粒 石英
" 6 " 6	左斜面	" "	" "	11.4	口縁部が外反し肥厚する。口唇やや丸味を帯びる。	内外面ザラザラした手触り。	やや軟質	"	石英
" 7 " 7	左斜面 I層	" "	" "		口縁部が外反し肥厚する。口唇が舌状。器壁が薄い。	"	"	"	"
" 8 " 8	上部24LINE 畦土器貝溜	" "	" "		口縁部が外反し肥厚する。口唇やや丸味を帯びる。	"	"	やや硬質	"
第10図1 PL14-1	左斜面	" "	IB	21.7	ほぼ直口で外傾してラッパ状に開く。口縁部が方形に肥厚。	口縁部及び同下位に押し引き文。内面がポーラス状。	やや硬質	"	石灰質砂粒

挿図番号 図版番号	出土地点 出土順序	器種	分類	口径 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	焼成	色調	混入物
第10図2 PL14-2	左斜面 Ⅲ層	深鉢	IB		ほぼ直立した器形。口縁部が方形状に肥厚。	口唇及び口縁端部に列点文。口縁直下に浅い横沈線。	やや硬質	暗褐色	石灰質砂粒
" 3	左斜面	"	"	15.0	胴部がやや張り、口縁部が内湾する。口縁部が方形状に肥厚。	口唇、口縁端部及び同直下に単線の横擦刻文。	"	外・茶褐色 内・暗褐色	"
" 4	左斜面 I層	"	"	26.8	ほぼ直立した器形。	口唇及び口縁部直下に又状工具による連点文。内面の一部がポーラス状。	やや軟質	外・暗褐色 内・茶褐色	"
" 5	左斜面 Ⅲ層	"	"		ほぼ直立した器形で口唇がやや内傾する。	内外面が丁寧に調整され滑らかな手触り。	やや硬質	淡褐色	"
" 6	Aトレンチ Ⅱ層	壺	"	9.0	口縁部が僅かに外傾。肩部がナデ肩で胴下半部が脹る下膨れ状の器形。	内外面に指圧痕。器表面は全体にいびつ。	"	暗褐色	"
第11図1 PL15-1	左斜面	深鉢	IC		ほぼ直立し口縁部が丸味を帯びて肥厚。口唇がやや内傾。	口唇及び口縁部直下に単線の横擦刻文。後者の刻文は左方向より工具を差し込んで施文される。	"	"	石灰質砂粒 (多量)
" 2	"	"	"	12.0	口縁部が外反し胴部の脹る器形。口縁が丸味を帯びて肥厚。	口縁部直下に押し引き文と右上がりの斜沈線。内面がザラザラした手触り。	やや軟質	茶褐色	石英
" 3	"	"	"	13.6	頸部が屈曲し口縁部外反。胴部下半部が脹る。口唇がやや内傾。	口縁端部・口縁直下と胴部上位に又状工具による点刻文。後者の間に同工具で縦位の点刻文(縦位区画文)内面に一部縦・斜位の調整跡が認められ表面は滑らかな手触り。	やや硬質	外・淡褐色 内・茶褐色	石灰質砂粒
" 4	左斜面	壺	"	11.4	頸部が大きく屈曲し口縁部外反。胴部下が脹る。	又状工具による2対の連点文と同間を埋めるように棒状工具による一本の連点文を口縁から肩部に垂下。前者に直交して又状工具による横位4対の連点文を口縁部に施す。内面にハケ目調整痕。	"	外・茶褐色 内・淡褐色 黒色	"
" 5	Aトレンチ I層	"	"	11.2	口縁部外反し丸く肥厚する。	器面全体がポーラス状。	軟質	茶褐色	"
" 6	左斜面	深鉢	"	11.4	口縁部ほぼ直に立ち上がり丸く肥厚する。	口唇から内面にかけて丁寧に器面調整。外面に石灰質砂粒が目立つ。	やや硬質	外・黒褐色 内・淡褐色	"
" 7	左斜面	"	"		口縁部やや内湾し丸く大きく肥厚する。器壁が薄い。	器面全体がザラザラした手触り。	"	淡褐色	石英
" 8	Aトレンチ I層	"	"	25.4	胴下半部が外傾し上半部で直に立ち上がり口縁部で僅かに外反する。口縁丸く肥厚。	内面丁寧に調整され滑らかな手触り。若干指圧痕があり。器壁が厚い。	"	外・黒褐色 内・淡褐色	石灰質砂粒
" 9	Aトレンチ Ⅱ層	"	"		胴部が僅かに張り口縁肥厚部で微妙に外反。	器面全体が丁寧に調整され滑らかな手触り。	"	外・黒褐色 内・淡褐色	石英
第12図1 PL16-1	表採	深鉢	ID	17.0	口縁部がラッパ状に外傾して開く。	口唇と口縁上位に単線の横擦刻文。器面全体がポーラス状。	やや軟質	外・茶褐色 内・暗褐色	石灰質砂粒
" 2	左斜面	"	"		口縁部が直に立ち上がる。口唇が外傾する。	口唇に絞杉文。口縁肥厚直下に3本の連点文。内面の器面調整が丁寧。	やや硬質	淡褐色	石英
" 3	"	"	"	19.6	口縁部が外反する。口唇が外傾する。	口唇部に1対口縁部に3対又状工具による連点文。口唇の文様は中央で断絶(ナデ消しか?)	"	茶褐色	石灰質砂粒
" 4	左斜面 Ⅲ層	"	"		胴部がやや張り外反する口縁部へ立ち上がる。口唇は外傾。	又状工具による押し引き手法の連点文で文様を施す。文様は凹線状口唇に1対。口縁はステップ状に連点文を施す。胴部には2対の連点文を縦位に施す。	硬質	外・黒褐色 (ス?) 内・茶褐色	黒色粒
" 5	左斜面	"	"		やや内傾ぎみに立ち上がる口唇は外傾。	口唇と口縁肥厚直下に施文。前者は横擦刻文?後者は押し引きによる連点文?器面全体がポーラス状。	軟質 (かなり もろい)	茶褐色	石灰質砂粒 (微量)
" 6	左斜面 Ⅲ層	"	"	29.4	胴部がやや外傾気味に立ち上がり口縁部で僅かに外反する。口唇が外傾。	口唇に単線工具の列点文。内面はやや手触りがザラザラ、器壁が厚い。	やや軟質	外・暗褐色 (ス?) 内・茶褐色	石灰質砂粒 石英(多量)

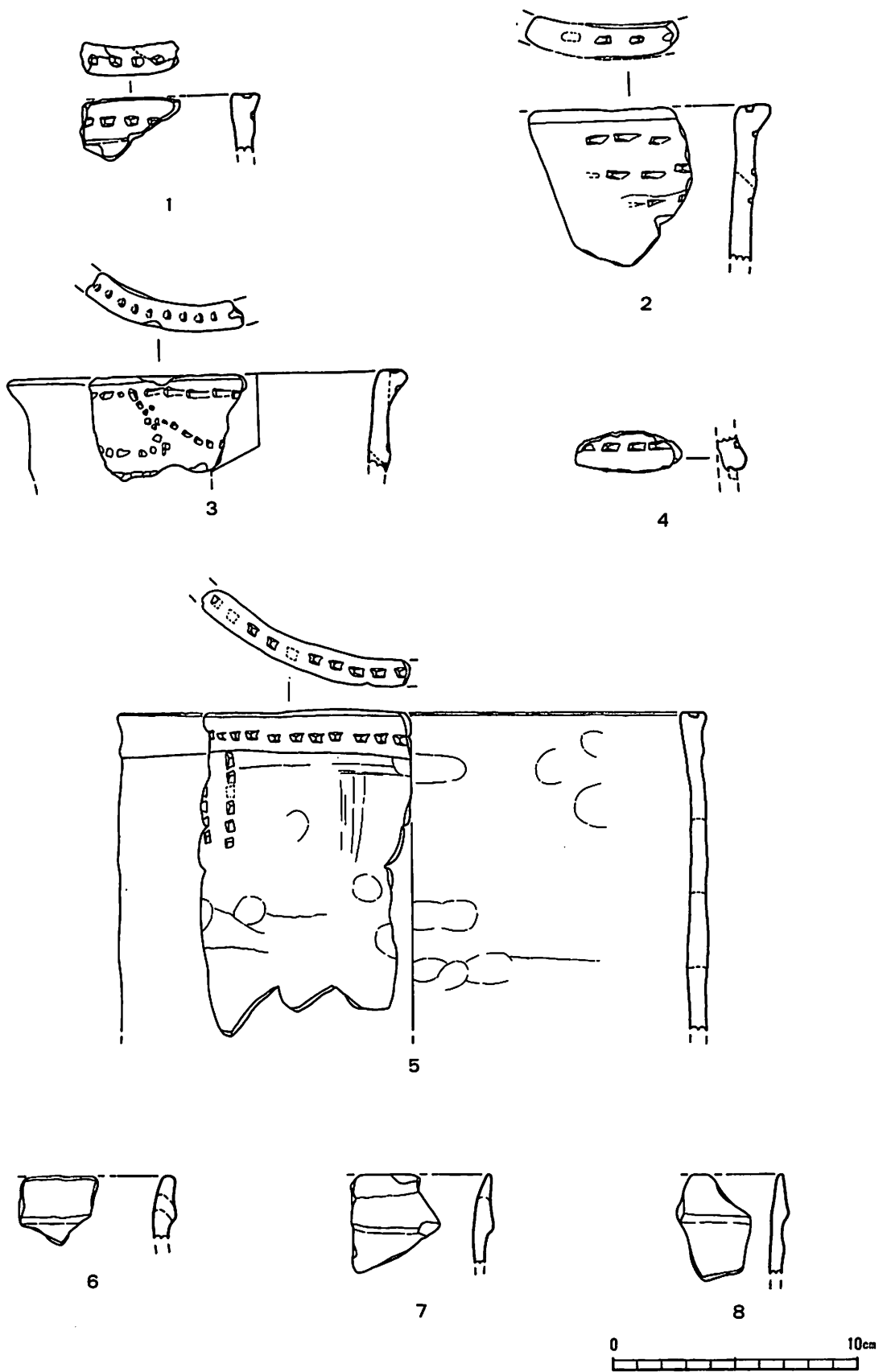
挿図番号 図版番号	出土地点 出土層序	器種	分類	口径 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	焼成	色調	混入物
第12図7 PL16-7	Aトレンチ II層	壺	ID	14.0	ナデ肩の肩から頸部へ屈曲して立上がり口縁部が大きく外反する。口唇は微妙に凹み外傾する。	頸部にミズばれ状の凸帯を縦位に1条貼付、両脇に約1.5cmの間隔をあけ細沈線を2条づつ前者に平行して施す。内外面ともに丁寧に器面調整され特に内面は手触りが滑らか。	硬質	外・淡褐色 内・暗茶褐色	石英 黒色粒 (微量)
第13図1 PL17-1	Aトレンチ II層	深鉢	"	24.4	胴部がやや膨らみを持ち口縁部が内湾する。口唇僅かに外傾。器壁が厚い。	外面下位に篋による縦位の器面調整痕。内面に篋による横位の器面調整痕と指圧痕。	やや硬質	茶褐色	石灰質砂粒
" 2 " 2	"	"	"		口縁部が外反。口唇僅かに外傾	口唇から内面にかけて器面がポーラス状。	"	"	"
" 3 " 3	上部M-22畦 II層	"	"	10.2	口縁部下位が若干窄まり上位で外反する。口縁肥厚部に瘤状突起を作る。	器面全体がザラザラした手触り。	やや軟質	暗褐色	石英
" 4 " 4	Bトレンチ II層	"	"	13.2	口縁部が外反。口縁肥厚部に縦長の瘤状突起を作る。	器面全体がザラザラした手触り。	"	外・茶褐色 内・黒色	"
" 5 " 5	上部K-22 II層	"	"		口縁部が直口。器壁が薄い。	口縁肥厚直下に指圧痕。器面全体がザラザラした手触り。	"	暗褐色	"
" 6 " 6	入口消掃	"	"		口縁下位でやや窄まり、上位が外反。	口縁肥厚部に指圧痕。器面全体がザラザラした手触り。	"	"	"
" 7 " 7	Bトレンチ II層	"	"		器壁が厚い。	器面全体がザラザラした手触り。	"	"	"
" 8 " 8	左斜面	"	"		口縁部が直口。	器面全体が若干ザラザラした手触り。	"	茶褐色	"
" 9 " 9	左斜面 I層	"	"		口縁部が外反。	器面全体がザラザラした手触り。	"	暗褐色	"
" 10 " 10	Bトレンチ II層	"	"		"	"	"	外・茶褐色 内・淡褐色	"
" 11 " 11	Cトレンチ I層	"	"		"	"	"	暗褐色	"
" 12 " 12	入口消掃	"	"		口縁左側が山形になり気味?	"	"	淡褐色	"
" 13 " 13	上部N-23 II層	"	"		口縁部が外反。	"	"	暗褐色	"
" 14 " 14	Aトレンチ I層	"	"		肥厚が若干丸に近い。	"	"	茶褐色	"

第5表 第I群土器(胴部)観察一覧

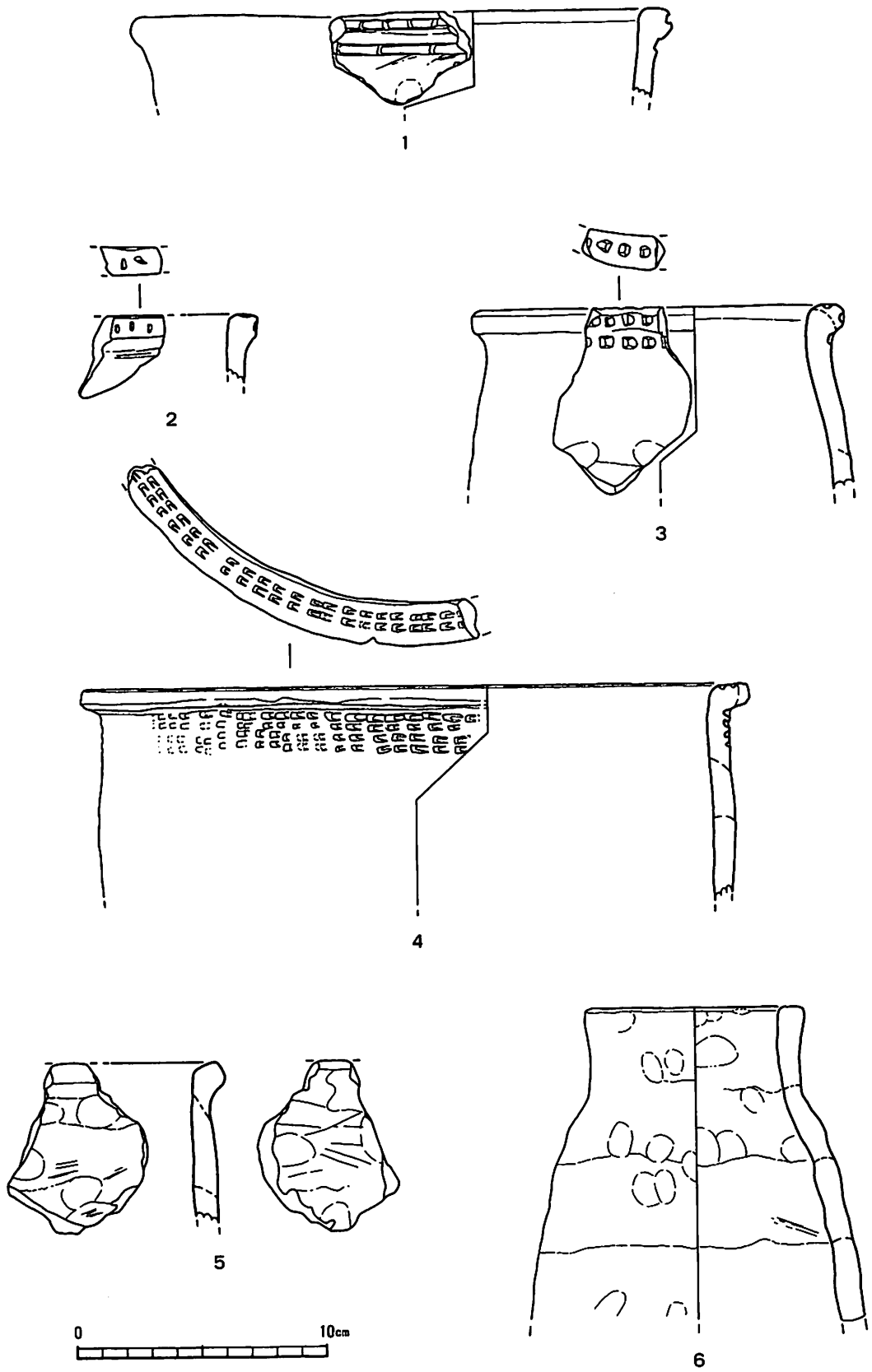
挿図番号 図版番号	出土地点 出土層序	器種	胴径最大 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	焼成	色調	混入物
第14図1 PL18-1	左斜面	深鉢	18.7	下半部の外傾が大きく上部に移行するに従い僅かに丸味を帯びて立ち上がる。	内面で混入物の露出が著しくザラザラな手触り。外面ややいびつ。	やや軟質	外・淡褐色 内・茶褐色 黒色(ス?)	硬質砂粒

第6表 第I群土器(底部)観察一覧

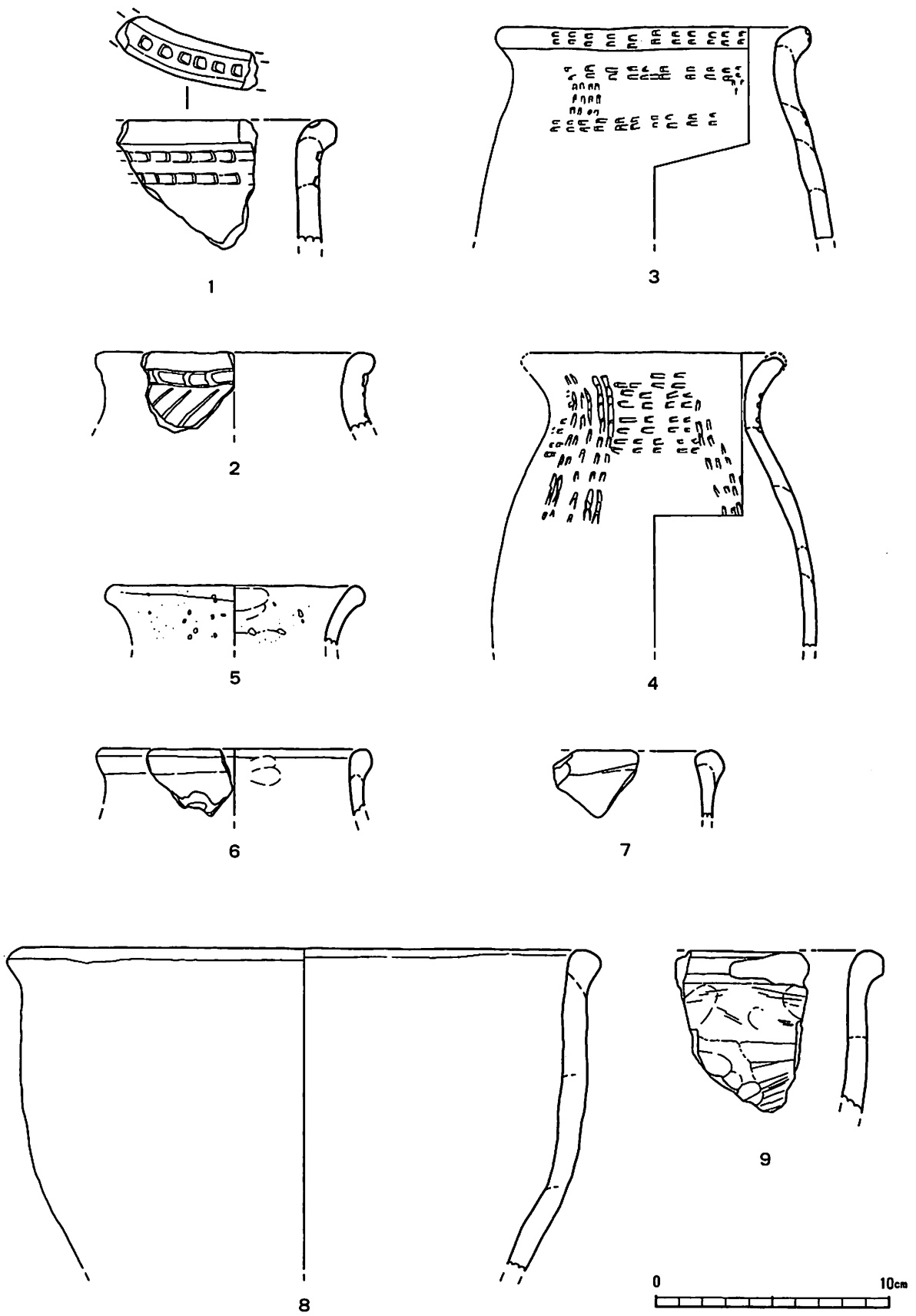
挿図番号 図版番号	出土地点 出土層序	分類	底径		形態の特徴	手法の特徴	焼成	色調	混入物
			(cm)	(cm)					
第14図2 PL18-2	左斜面	a	1.8	1.2	底径の小さい平底。	内面はザラザラ、外面は滑らかな手触り。	やや軟質	黒褐色	石英
" 3 " 3	左斜面 II層	"	2.6		大きく外傾する。	外面は器面調整が比較的丁寧に滑らか。	"	暗茶褐色	石灰質砂粒 石英
" 4 " 4	左斜面	"	3.7	2.1	"	外面全体にハケ目の器面調整痕。	やや硬質	外・淡褐色 内・茶褐色	"
" 5 " 5	"	"	2.0	1.4	底径が小さくやや丸味を帯びる平底。	内外面共にポーラス状の器面であるが手触りは滑らか。	やや軟質	外・淡褐色 内・茶褐色	石灰質砂粒
" 6 " 6	Bトレンチ II層	b	1.8	1.3	底径がかなり小さく丸く膨らみを帯びて立ち上がる。	全体に器面がザラザラした手触り。	"	茶褐色	石英
" 7 " 7	左斜面 III層	"	3.7	0.6	外底面が凹面。外底面の形状がやや楕円。	"	"	外・淡褐色 内・茶褐色	"
" 8 " 8	上部N-23 II層	c			底部から胴部への立ち上がり際で若干外へ張り、胴部へストレートに立ち上がる。	内底面にハケ目状の器面調整痕。	"	暗褐色	石灰質砂粒 (微量)



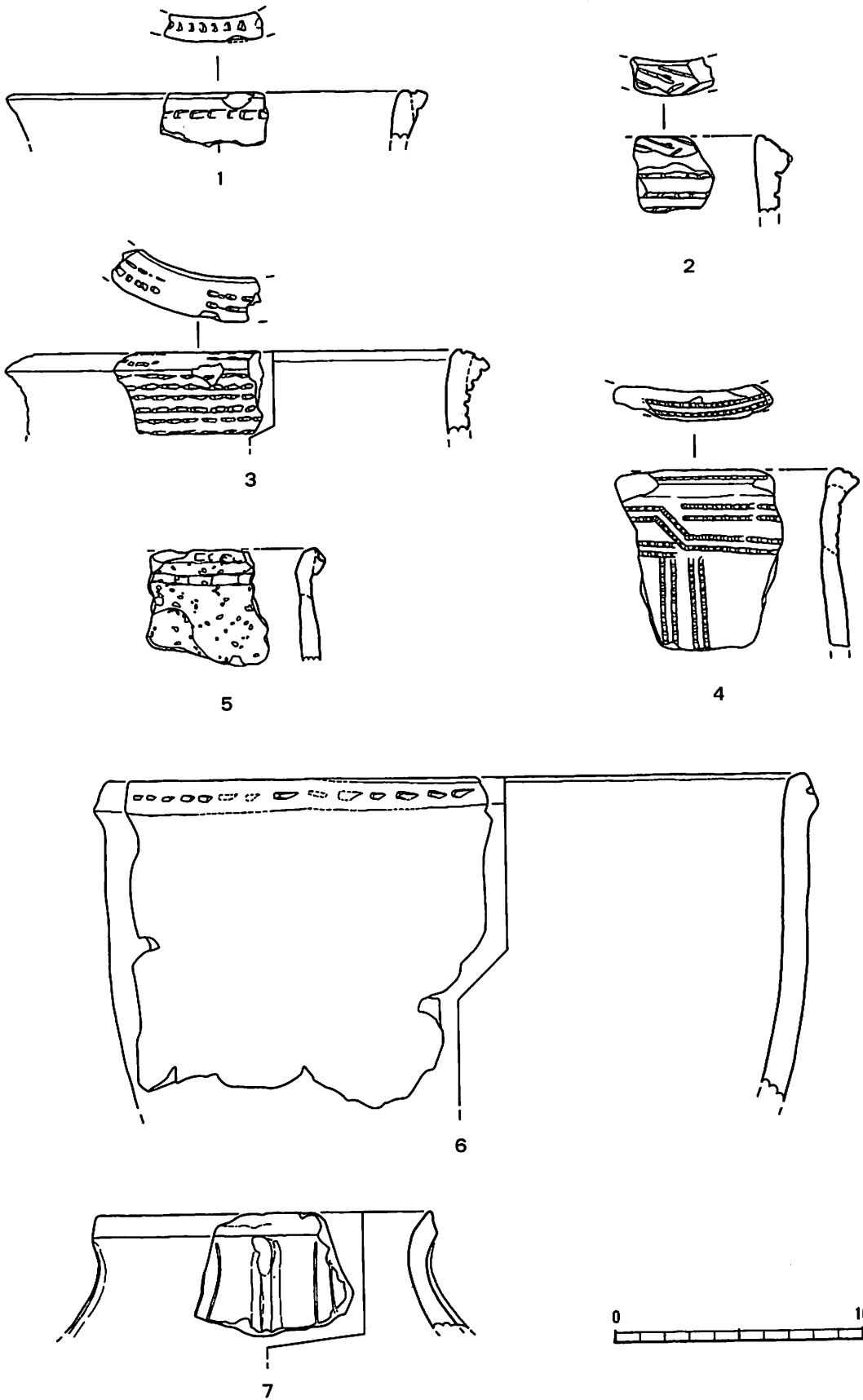
第9圖(PL. 13) 土器：第I群A類



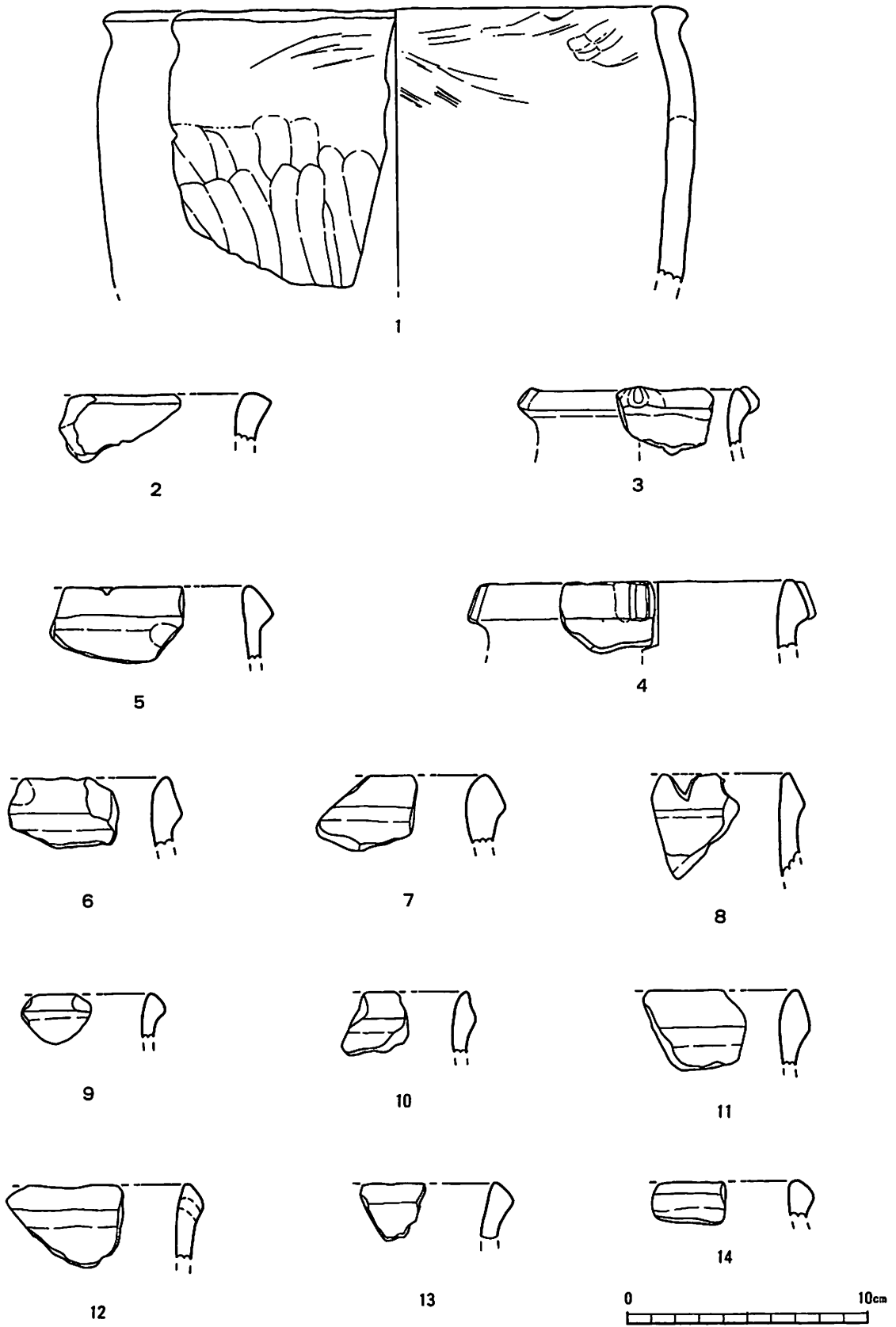
第10図(PL. 14) 土器：第I群B類



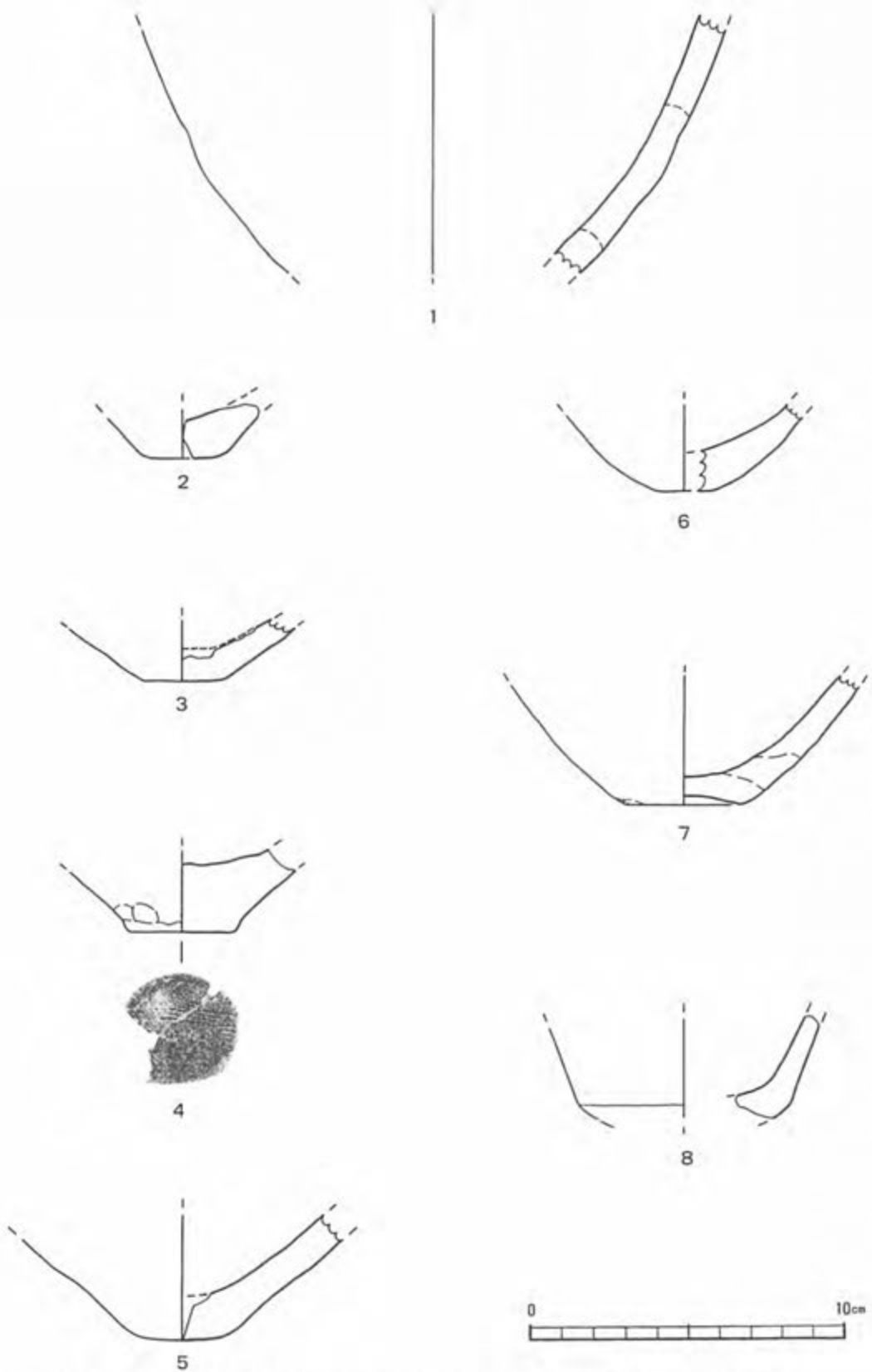
第11図(PL. 15) 土器：第I群C類



第12圖(PL. 16) 土器：第I群D類



第13図(PL. 17) 土器：第I群D類



第14圖(PL. 18) 土器：第I群胴部(1)・底部(第1種2~5, 第2種6・7, 第3種8)

第Ⅱ群土器

沖縄新石器時代後期(弥生時代～平安時代)に相当する土器のグループである。無文土器を主体とするが、数点微隆帯を貼り付けた有文土器が見られる。資料は口縁部の形態で大きく二つに分類し、さらに口唇部の断面形態で細分した。底部は形態で四つに分類した。

A類 (第15図1～10: P L. 19)

口縁部の外反するものである。口唇部の断面形態で三つに細分した。

第1種: 口唇部が平坦になるもの。(1～3)

第2種: 口唇部が丸みを帯びるもの。(4～9)

第3種: 口唇部が舌状になるもの。(10)

B類 (第15図11～13: P L. 19)

口縁部が直口するものである。口唇部の断面形態はすべて舌状である。

胴部 (第15図14～18: P L. 19)

14は縦位と横位の微隆帯を貼り付けており質的にはA類第2種の4に、文様的にはB類の13に類似している。15・16共に微隆帯を貼り付けたもので、後者は壺の胴部から頸部にかけての資料である。18は胴部を「く」の字状に屈曲させた鉢である。

底部 (第16図: P L. 20)

底部資料は17点得られている。この内比較的残りの良い資料12点を形態に着目して四つに分類した。

第1種: 乳房状尖底のもの。(1・2)

第2種: くびれ平底で、内底面が弧状になるもの。(3～5)

第3種: くびれ平底で、内底面が平坦になるもの。(6～9)

第4種: 底面からほぼ直に立ち上げるもの。(10～12)

第7表 第Ⅱ群土器(口縁部)観察一覧

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層序	器種	分類	口径 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	焼成	色調	混入物
第15図1 PL19-1	左斜面 Ⅱ層	甕	ⅡA-1		口縁部ラッパ状に開いて外反。口唇がやや波を打つ。	全体に丁寧な器面調整。	やや硬質	外・淡黒色 (スズ?) 内・淡褐色	赤色粒
“ 2	左斜面 Ⅰ層	“	“	21.2	口縁部下位が直に立上がり上位で外反する。	口唇に2個1組のリボン状突起を作る。口縁部全体に薄く土を指頭でナデ付け若干肥厚させる。全体的に成形が雑。	やや軟質	橙 色	赤色・黒色粒
“ 3	左斜面	“	“	19.2	口縁下位が大きくくびれ外反する。	外面に指圧痕、内面に篋状工具による調整痕。	硬 質	外・茶褐色 黒色	石灰質砂粒 赤色・黒色
“ 4	入口清掃	“	ⅡA-2		口縁下位で内湾し上位で外反する。	口縁部の外面下位に横位の凸帯を貼り付ける。	やや硬質	外・黒色 内・茶褐色	石灰質砂粒
“ 5	左斜面	“	“		口縁部ラッパ状に開いて外反。	全体に丁寧な器面調整。	やや軟質	外・淡褐色 内・淡褐色	赤色粒
“ 6	Aトレンチ Ⅰ層	“	“	12.6	胴部上位やや内湾し口縁部で外反する。口縁部下位がやや肥厚する。口唇が波状。	器面全体がサラサラして粉末が手に付く。胴部内面に細かい篋状工具による横位の器面調整痕。外面に指圧痕。	軟 質	外・淡褐色 黒色 内・淡褐色	石灰質砂粒 (微量)
“ 7	左斜面 Ⅰ層	“	“	20.0	口縁部ラッパ状に開いて外反。	内面に横位の擦痕。	“	外・黒色 内・暗褐色	赤色粒 雲母(微量)

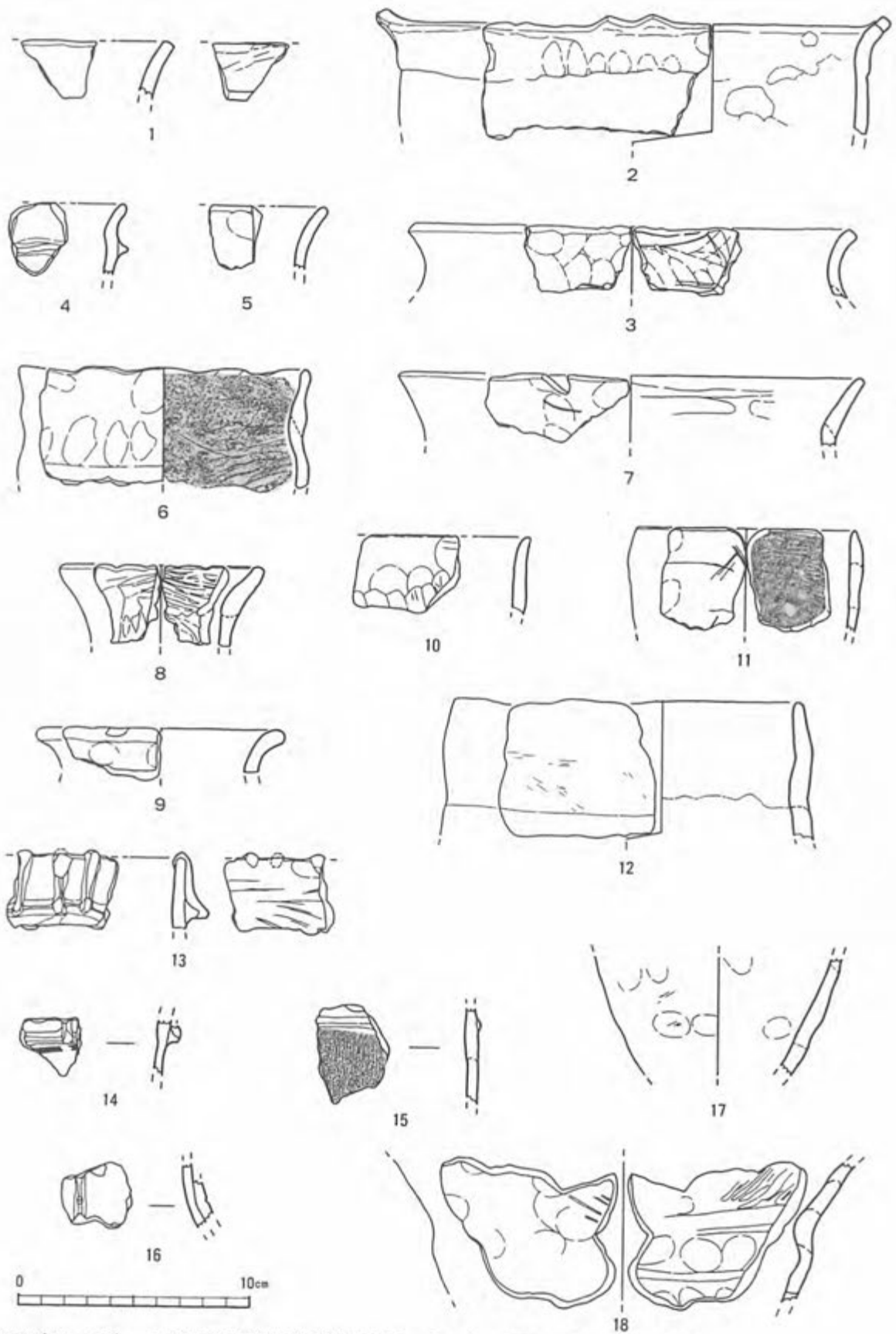
挿図番号 図版番号	出土地点 出土層序	器種	分類	口径 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	焼成	色調	混入物
第15図8 PL19-8	左斜面 I層	壺	IIA-2	8.8	頸部が窄み、口縁部が外反。口縁部下位がやや肥厚。口唇がやや波状。	内面に斜位のハケ目状の器面調整痕。	やや硬質	外・茶褐色 黒色(ス?) 内・淡褐色	赤色粒 石灰質砂粒 (微量)
" 9	"	"	"	10.6	口縁部ラッパ状に開いて外反。口唇が僅かに肥厚。	器面全体がサラサラして粉末が手に付く。	軟質	橙褐色	石英(微量)
" 10	入口清掃	甕	IIA-3		口縁下位がほぼ直に立上がり上位で外反。	外面に指圧痕。内面に横位の擦痕。	硬質	外・淡黒色 内・暗褐色	黒色粒 雲母(微量)
" 11	左斜面	"	"	9.6	ほぼストレートに立上がり口縁上位が肥厚する。	内面に横位のハケ目状の器面調整痕。	"	外・茶褐色 黒色(ス?) 内・茶褐色 黒色(ス?)	赤色粒
" 12	左斜面	"	II B	15.0	口縁部下位で外傾し上位でほぼ立ち上がる。	全体に器面調整が丁寧で滑らかな手触り。口唇がやや波状。	"	暗褐色	赤色・黒色粒
" 13	入口清掃	"	"		口縁部が直に立ち上がる。	口縁部に横位の凸帯を1条廻し同凸帯上に重ねて縦位の凸帯(鞍状)を3本口唇部まで貼り付ける。内面に篋状工具による横位の器面調整痕。	"	"	赤色粒

第8表 第II群土器(胴部) 観察一覧

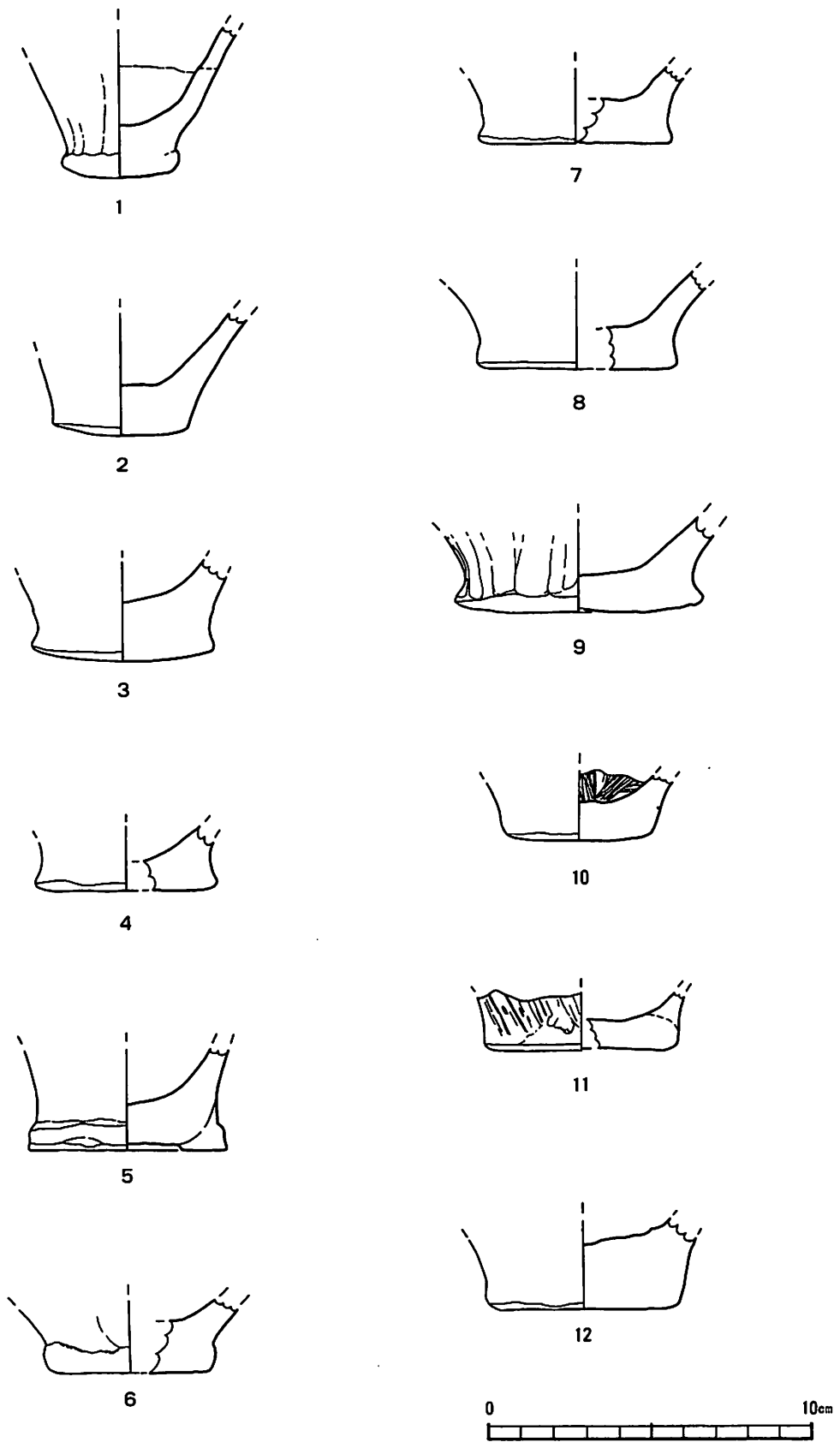
挿図番号 図版番号	出土地点 出土層序	器種	胴径最大 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	焼成	色調	混入物
第15図14 PL19-14	入口部清掃	甕		やや外傾気味。	横位と縦位に各1条の凸帯を貼り付ける。器面の状況胎土は4に類似。	やや硬質	外・黒色 内・茶褐色	石灰質砂粒
" 15	上部K-23 II層	"		直に立ち上がる。	上位に横位の微隆凸帯を貼り付ける。外面に縦位のハケ目状の細かい器面調整痕。内面の輪積み痕。	"	黒褐色	赤色粒
" 16	上部24LINE 畦土器貝溜	壺?		内傾して立ち上がる。	縦位の凸帯を貼付け同上が篋状工具によって刺突される。	やや軟質	暗褐色	"
" 17	Aトレンチ I層	甕	11.1		外面がサラサラして粉末が手に付く。	軟質	外・淡褐色 内・黒色(ス)	赤色粒 雲母(微量)
" 18	左斜面 III層	鉢	19.7	「く」の字状に屈曲して大きく外傾する。	全体がサラサラして粉末が手に付く。内面に横位・斜位の雑な調整痕・指圧痕。	"	橙褐色	黒色 雲母(微量)

第9表 第II群土器(底部) 観察一覧

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層序	分類	底径(cm)		形態の特徴	手法の特徴	焼成	色調	混入物
			底径	底面厚					
第16図1 PL20-1	入口清掃	1	3.6 1.6		底面が丸味を持つ胴部の立上りが急。	胴部と底部の境に指圧痕。内面に縦位の擦痕。胴部に粘土の積み痕。	軟質	淡褐色	石灰質砂粒 赤色粒
" 2	"	"	4.3 1.5		底面が僅かに丸味を持つ。胴部へ開き気味に立ち上がる。	器面全体ナデ消し。	"	橙褐色	黒色粒
" 3	"	2	5.6 1.8		底面が僅かに丸味を持つ。底面器壁が厚い。	胴部と底部の境に指圧痕。比較的丁寧なナデ消し。	やや硬質	淡褐色	赤色・黒色粒
" 4	試掘トレンチ	"	5.6 0.9		底面が平坦。底面器壁が薄い。	器面全体ナデ消し。	軟質	外・橙褐色 内・淡黒色	赤色粒
" 5	左斜面	"	6.2 1.4		底面が平坦。胴部への立ち上りが急。	底部縁の張り出しは粘土紐を貼り付けたものか?	やや硬質	外・淡黒色 内・淡褐色	石灰質砂粒 赤色・黒色粒
" 6	上部N-22 畦	3	4.4		底面が平坦。底部張り出しが丸味を帯びる。	器面全体ナデ消し。	軟質	茶褐色	赤色・黒色粒
" 7	左斜面	"	6.0 1.3		底面が平坦。くびれが強い。	内面の器面調整やや雑。	やや硬質	淡褐色	石灰質砂粒 黒色粒
" 8	上部24LINE 畦土器貝溜	"	6.2 1.3		底面が平坦。くびれが強い。胴部へやや反り気味に立ち上がる。	外面ナデ消し。内面アバタ状。	やや軟質	外・淡褐色 内・黒色	石灰質砂粒 赤色・黒色粒
" 9	上部N-22 畦 III層	"	7.8 1.0		底面が平坦。底径が大きい。	胴部と底部の境に指でナデ付けた指圧痕が明瞭。全体に成形がやや雑。	軟質	暗褐色	石灰質砂粒 黒色粒
" 10	試掘グリット	4	4.6 1.2		底面平坦。縁でやや丸味。	全体に成形が丁寧。ナデ消し。内面に一部篋状工具による擦痕。	硬質	淡褐色	赤色・黒色粒
" 11	上部N-23 貝溜	"	6.0 0.9		底面平坦。縁でやや丸味。全体に器壁が薄い。	外面に斜位の擦痕。	やや硬質	黒色	石灰質砂粒
" 12	入口清掃	"	6.0 2.0		底面平坦。器壁が厚い。	器面が全体にアバタ状。	軟質	橙褐色	"



第15図(PL. 19) 土器：第Ⅱ群A類(第1種1~3, 第2種4~9, 第3種10)
B類(11~13)・胴部(14~18)



第16図(PL. 20) 土器：第Ⅱ群底部(第1種1・2, 第2種3~5, 第3種6~9, 第4種10~12)

B. 石器 (第17図：P.L. 21)

石器は10点得られた。石斧5点、敲石4点、不明(砥石?)1点である。石質の鑑定は沖縄県立博物館の神谷厚昭氏に依頼した。なお、2は古墓群地区において得られたものであるが、本図に含めて掲載した。以下各資料の詳細は観察表を参照されたい。

第10表 石器観察一覧

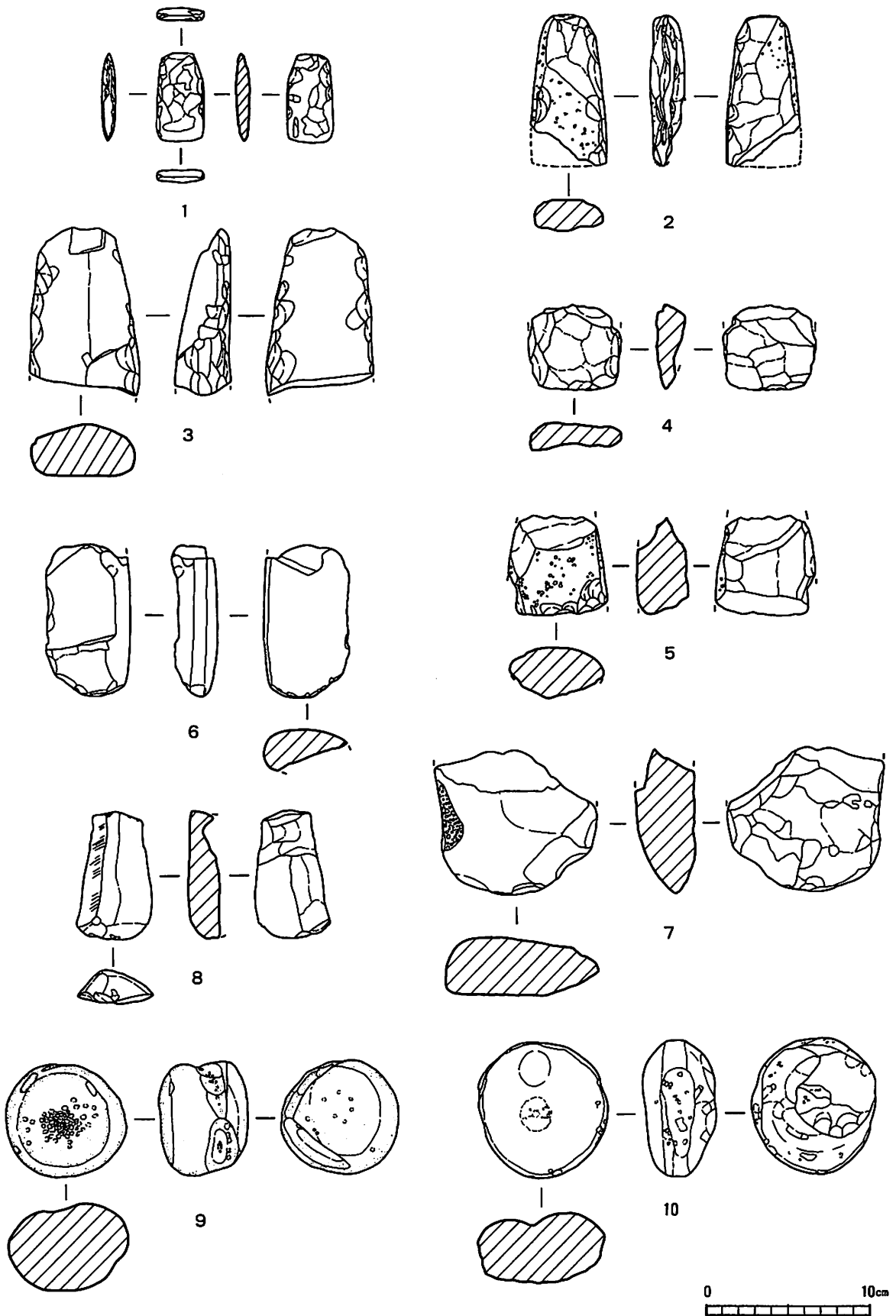
挿図番号 図版番号	出土地点 出土層序	器種	石質	法 量				観 察 事 項
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
第17図1 PL21-1	左 斜 面 I層	石斧(ノミ状)	緑色片岩	5.5	2.8	0.8	23.2	ほぼ完形で短冊形の状態。表裏面共に平坦に仕上げ部分的に滑面が見られる。両側面共に平坦に仕上げ滑面が残る。両端を丁寧に研磨して刃部を作る。刃部は両端ともに両刃。
" 2 " 2	上部N-21 II層	石 斧	"	9.3	4.5	2.1	123.8	基部下位の欠失したバチ形の石斧。全体に研磨を施しているが、特に裏面と右側面一部に丁寧に研磨した面が残る。左側面はやや丸味を帯びる。
" 3 " 3	1号墓 上部清掃	"	"	10.3	6.7	3.4	300.0	基部下位の欠失したバチ形の石斧。表面がザラザラした手触りで赤褐色に変色。横断面で表面側がやや三角形状。裏面は平坦。
" 4 " 4	Aトレンチ III層	"	"	6.0	5.9	3.7	177.6	両端を欠失したバチ形?の石斧。表面から右側面にかけて荒い研磨面を残す。横断面はほぼ楕円形。
" 5 " 5	Bトレンチ II層	"	"	5.3	5.6	1.8	75.1	基部上位を欠失した短冊形?の石斧。残りが非常に悪い。研磨面は全く認められない。刃縁はほぼ直線に近く剥離や潰れが著しい。
" 6 " 6	左 斜 面	敲 石	緑色千枚岩	9.5	5.3	2.5	181.6	基部上位に欠失。表面が大きく剥離。裏面に滑らかな自然面を残し右側面を研磨して縦に2本の稜線が認められる。下端は敲打使用痕が明瞭に残る。横断面は本来楕円形と考えられる。
" 7 " 7	左 斜 面	"	緑色片岩	9.0	9.9	3.8	460.0	表面に滑らかな自然面を残し、裏面は剥離調整による粗面。下端部は鋭角な刃状で先端は剥離か潰れがみられる。
" 8 " 8	清 掃	不 明	緑色千枚岩	7.9	4.8	1.7	88.2	表面右側の平ら面に横位の擦痕が多数みられる砥石か?
" 9 " 9	左 斜 面	敲 石	砂 岩	7.1	7.4	5.4	350.0	球状で表面に深い凹みと、側面に「ハ」の字状に挟り縁の凹みがみられる。後者は使用時の指あてか?
" 10 " 10	左 斜 面	"	"	8.5	7.8	4.5	375.0	表面ほぼ中央に凹み。側面に敲打痕。磨石と敲石を兼用したものか?

C. 貝製品 (第18図1・2：P.L. 22)

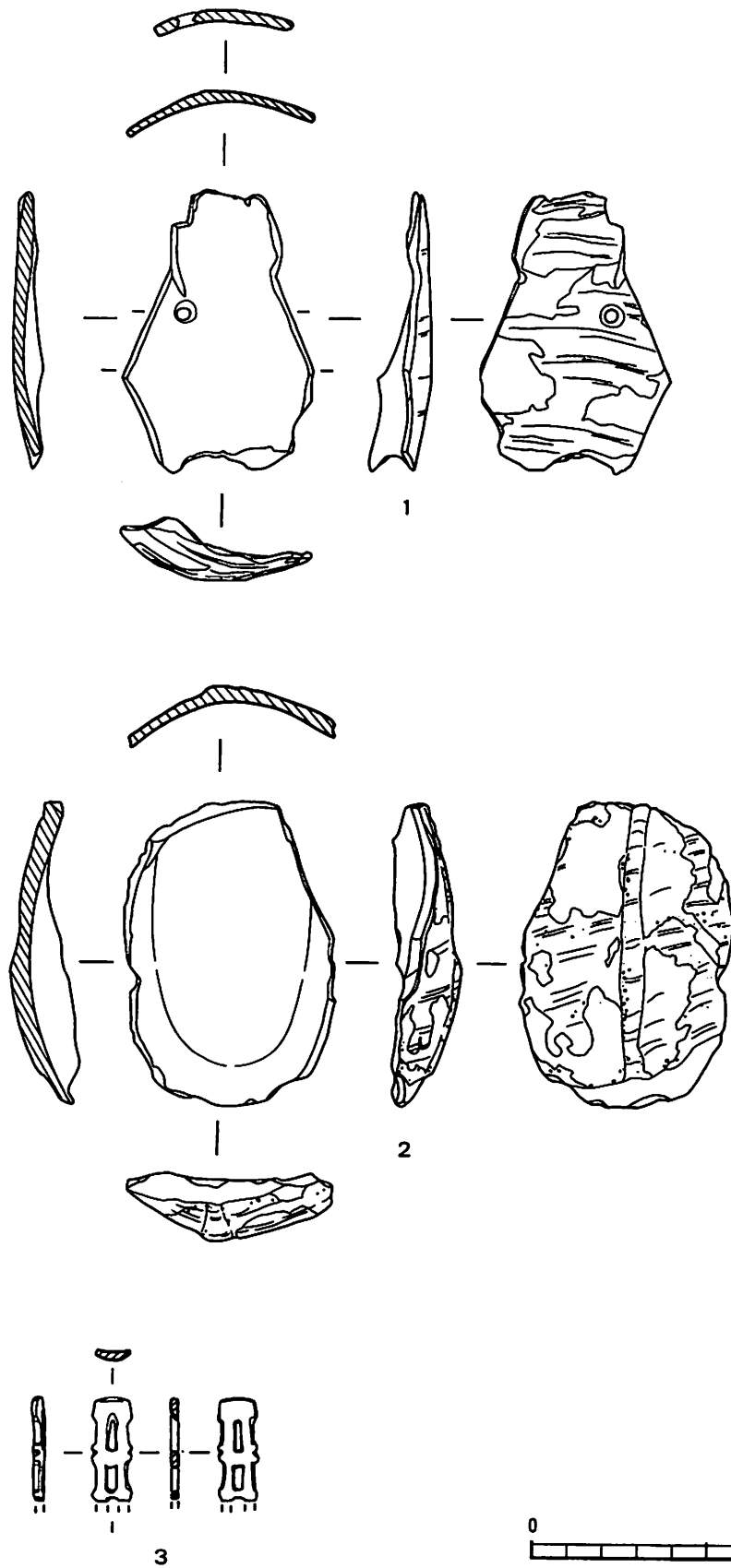
貝製品は2点得られている。2点ともヤコウガイの体側部を利用し加工した匙状製品である。1は下端の破損部を除いて縁辺全体を丁寧に研磨し仕上げている。外面の一部に石灰質が付着しているが、内外面共に真珠層に及ぶまで丁寧に研磨が施される。左側の身部から柄部にかけて「く」の字状に小さく括れが見られる。身部はほぼ菱形、柄部は上端左側に「L」字状の挟りが施されるが、ほぼ方形を呈する。挟り部から下方へ約2.4cmの位置に径5mmの小孔が穿たれる。また、内外面に挟り部と小孔の間で幅約2mmの浅い溝状の削り痕が縦位に見られる。本資料は渡喜仁^(註10)浜原貝塚において出土した資料と柄部片側の形状が類似しており、原形は同資料と同じ或いは近い製品であった可能性が推測され、現資料の形状は二次加工によるものと考えられる。2は身部のみの資料である。全体的に敲打により成形されており、外面下端の表面が一部剥ぎ取られ真珠層が露出している。製作途上で柄部が欠損した未完製品と推測される。

第11表 貝製品計測一覧

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層序	法 量				
		長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	深 さ (cm)	重 量 (g)
第18図1 PL22-1	左 斜 面	7.5	5.4	0.3	—	28.4
" 2 " 2	"	8.7	5.9	0.5	1.1	42.5



第17圖(PL. 21) 石器：石斧(1~5)・敲石(6・7・9・10)・不明(8)



第18図(PL. 22) 貝製品(1・2)、骨製品(3)

D. 骨製品 (第18図3: P L. 22)

一方の端部が欠損し全形が不明の資料である。全体を丁寧に研磨し、左右縁辺に幅広と「V」字状の浅い抉りを交互に入れ、資料中央に長形状の透かし彫りを施した装飾?がされる。渡喜仁浜原貝塚(III)において出土している骨製品の中に大きさはやや異なるが、本資料と縁辺や中央の状況が類似する資料が見られる。

第12表 骨製品計測一覧

押図番号 図版番号	出土地点 出土層序	法 量						重量 (g)
		長さ (cm)	最大幅 (cm)	最小幅 (cm)	厚さ (cm)	透かし彫長さ:上 :下 (cm)	透かし彫幅:上 :下 (cm)	
第18図3 PL22-3	左斜面	3.0	1.2	0.9	0.4	0.9 0.7	0.2 0.3	0.9

E. 貝類遺殻 (第13・14表)

洞穴内部において出土したものを表にまとめた。種類は斧足網(二枚貝)16科40種、腹足網(巻貝)25科101種である。

第13表 貝類遺殻(二枚貝)集計一覧

NO	科名	種名	A1レンテ目		A2レンテ目		A3レンテ目		B1レンテ目		B2レンテ目		C1レンテ目																															
			先	頂	先	頂	先	頂	先	頂	先	頂	先	頂																														
1	ツルギ	ツルギ																																										
2		カリガキ																																										
3		ペニエ																																										
4		クロノエ																																										
5		ハブ																																										
6		リュウ																																										
7		ハイ																																										
8		リュウ																																										
9		クロ																																										
10		カシ																																										
11		シモ																																										
12		ヘリ																																										
13		ウミ																																										
14		イロ																																										
15		ツル																																										
16		ヒメ																																										
17		トマ																																										
18		リュウ																																										
19		カウ																																										
20		シヤ																																										
21		ヒメ																																										
22		ヒメ																																										
23		シヤ																																										
24		イノ																																										
25		ナミ																																										
26		リュウ																																										
27		リュウ																																										
28		リュウ																																										
29		リュウ																																										
30		リュウ																																										
31		リュウ																																										
32		リュウ																																										
33		リュウ																																										
34		リュウ																																										
35		リュウ																																										
36		リュウ																																										
37		リュウ																																										
38		リュウ																																										
39		リュウ																																										
40		リュウ																																										
計			147	129	41	48	21	9	11	11	31	50	3	6	12	5	4	2	57	63	10	15	17	12	19	15	11	7	1	1	2	3	7	10	2	1	4	20	8	12	5	1	1	3

NO	科名	種名	C2レンテ目		C3レンテ目		左側出目		左側出目		左側出目		左側出目																															
			先	頂	先	頂	先	頂	先	頂	先	頂	先	頂																														
1	ツルギ	ツルギ																																										
2		カリガキ																																										
3		ペニエ																																										
4		クロノエ																																										
5		ハブ																																										
6		リュウ																																										
7		ハイ																																										
8		リュウ																																										
9		クロ																																										
10		カシ																																										
11		シモ																																										
12		ヘリ																																										
13		ウミ																																										
14		イロ																																										
15		ツル																																										
16		ヒメ																																										
17		トマ																																										
18		リュウ																																										
19		カウ																																										
20		シヤ																																										
21		ヒメ																																										
22		ヒメ																																										
23		シヤ																																										
24		イノ																																										
25		ナミ																																										
26		リュウ																																										
27		リュウ																																										
28		リュウ																																										
29		リュウ																																										
30		リュウ																																										
31		リュウ																																										
32		リュウ																																										
33		リュウ																																										
34		リュウ																																										
35		リュウ																																										
36		リュウ																																										
37		リュウ																																										
38		リュウ																																										
39		リュウ																																										
40		リュウ																																										
計			3	1	2	0	1	2	0	0	53	60	97	123	81	80	65	54	273	285	69	64	33	26	45	41	100	82	17	23	15	17	23	20	60	53	9	12	12	6	12	12	3	22

第2節 古墓群地区

本地区においては7基の古墓が検出された。7基は丘陵の西側斜面を南北にほぼ直線状に占地している。(第5図)1号～4号墓は比較的良好な状態で残っていたが、5号・6号墓は墓室の形状を僅かに残しているものの殆ど破壊され、7号墓は墓室天井が崩落し内部の状況を把握することができなかった。

墓の主軸方向^(4E13)については墓口正面を水平ラインとして、同ラインから直角に墓口中央を通るラインを主軸とし、北方向と主軸のなす角度を主軸方向と捉えてみた。

尚、各墓の墓室・墓口等主要な部分の計測値や特徴等については、観察一覧(第15表)にまとめた。比較参照されたい。

以下、各墓の概要について述べる。

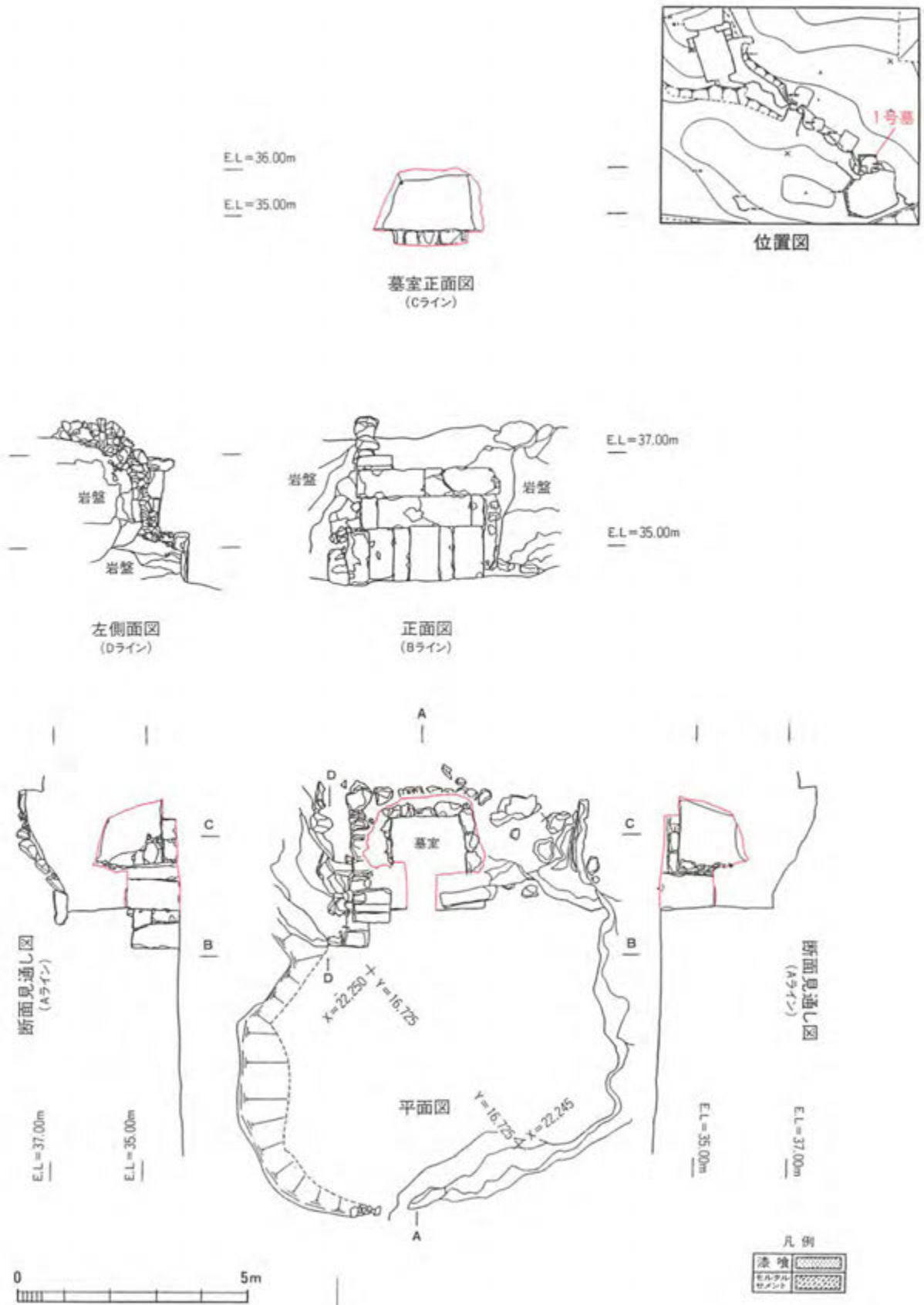
1. 各古墓の概要

1号墓(第19図)

本墓は古墓群7基中最も南端にあり、標高約34～38mの範囲に占地する。墓の主軸方向はN-41°-Eで、墓口はほぼ南西向きに開口する。

内部の状況は、石灰岩岩盤の岩陰を掘り込んで墓室が造られており、平面観はやや形のくずれた長方形、左右壁面は「ハ」の字状に内傾する。天井高は正面壁側で最も高く奥壁に行くに従い低くなる。中央部の床面は平坦な土床である。内部には方形の切石をならべ奥および左右に同レベルで一段の棚を造る。同床面も平坦な土床である。墓口は墓室に対してやや左寄りに位置し、さらに墓室を覆う右側の正面壁が左側に比べ薄いため墓室内は右スペースが若干広がっている。墓口の高さは第IV章で述べたように、床面下層より不発弾が出土し既に同面が破壊されているため本来の高さは不明である。一方、墓口上部に載る石の奥行きを見ると、手前の石は丁度墓口幅に合わせ浅く扶られ、奥の石は扶られていない構造となっている。両者には高さ約6cmの差があることから、少なくとも墓口の手前と奥では高さが異なっていたことが解される。同構造は上部の約6cm低い部分で墓蓋のかかりの機能を持っていたと考えられる。

墓正面の石積みは両サイドが破壊されているものの、主要な部分はかなり残りが良く長方形の丁寧加工された大型の切石を用い、墓口を中心に左右対称となるように布積で整然と積み上げている。一方、同石積みの裏になる墓室内側は、墓口左右と上部に正面と同様大型の切石が使用されている以外、すべて簡単に面取り加工した人頭大の石をあいかた積で積み上げている。正面石積みの左側最上段には庇として彫られた石が一個載っているが、本来は同様の石が横一直線に並んでいたものと考えられる。最下段の左脇には岩盤を囲うように長方形の切石を立て突出部が造られる。墓の最上部、屋根に相当する部分は左側に雑に積み上げられた縁石が一行残るのみで殆ど破壊されている。



第19図 1号墓

墓前庭部は南東から南西にかけて「コ」の字状に石灰岩岩盤に囲われた広場となっている。同部には墓に伴う構造物等は確認されていない。因みに、調査中岩盤の南側隅に戦時中に使用された防空壕と、ここより岩盤に沿って墓の正面まで通路状に掘り込まれた溝が検出されており、前述した不発弾の出土と合わせて本墓が高射砲陣地の一部施設として使用されていたと考えられる。

本墓は墓室の構築方法から見ると掘り込み墓、外観の形態からすると平葺墓となる両者を折衷した変型の掘り込み墓に分類される。

2号墓 (第20図)

本墓は標高約34～37mの範囲に占地する。主軸方向はN-82°-Eで、墓口はほぼ西向きに開口する。

内部の状況は、石灰岩岩盤の岩陰を丁寧に掘り込んで墓室を造る。平面観はほぼ方形を呈する。左右壁面はやや内傾する。天井高は正面壁側が最も高く、奥壁へ向けて低くなる。床面は岩盤を削り全体を平坦にしているが、奥壁右隅に約25×20cm、高さ約12cmの方形に盛り上がる部分が見られる。墓口は墓室に対して若干右寄りに位置する。本墓も1号墓の墓口上部と同様の構造となっており、さらに墓口床面は奥側が上部と相対する位置で約4cm高い段状となっている。同段は位置的に上部のかけり部とほぼ同位置にあることから、本墓口は上下に墓蓋のかけりを設けた構造であったと考えられる。

墓正面は石積みの表面をモルタルで被覆した部分が左右に残る。石積みは庇状になった岩盤の雨垂れ線直下よりやや内側に積まれる。

墓前庭部は岩盤面が広がり、本墓の墓庭とした空間を明瞭に区画する構造物は確認されていない。本墓は掘り込み墓に分類される。

3号墓 (第21図)

標高約34～37mの範囲に2号墓と殆ど同レベルに占地する。主軸方向はN-66°-Eで、墓口は西南西向きに開口する。

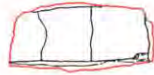
内部は石灰岩岩盤の岩陰を丁寧に掘り込んで墓室を造る。平面観は隅丸の方形に近い形状を呈する。左右壁面はほぼ直に立ち上がり、奥壁が内傾する。天井は屋根形状で中央付近が最も高い。床面は2号墓と同じく岩盤を削り全体を平坦にしている。墓口は墓室に対し若干右寄りに位置する。墓口上部の浅い挟りと墓蓋のかけりを設ける点では1・2号墓と同様であるが、前二者の場合、挟りとかけりは各々別の石が用いられているのに対し、本墓は一個の石に両方が造られた構造となっている。墓口床面は凹凸な岩盤の面で、明瞭な段差等は確認できない。

墓正面は墓口を中心に左側と上部に石積みが僅かに残る。石積みは庇状になった岩盤の雨垂れ線直下より積まれている。1・2号墓と比較して全体に稚拙な造りの墓である。

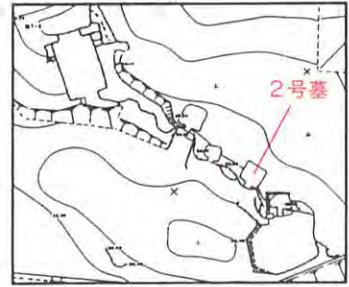
前庭部は2号墓と同様岩盤面で、墓庭を明瞭に区画する構造物は確認されていない。

本墓も掘り込み墓に分類される。

E.L.=36.00m
E.L.=35.00m



墓室正面図
(Cライン)



位置図

E.L.=36.00m
E.L.=35.00m



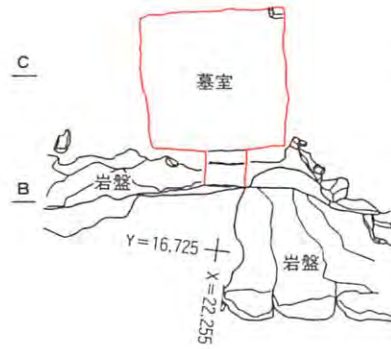
正面図
(Bライン)

断面見通し図
(Aライン)



E.L.=36.00m
E.L.=35.00m

A
x=22,255
+
y=16,730

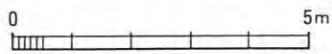


平面図

断面見通し図
(Aライン)



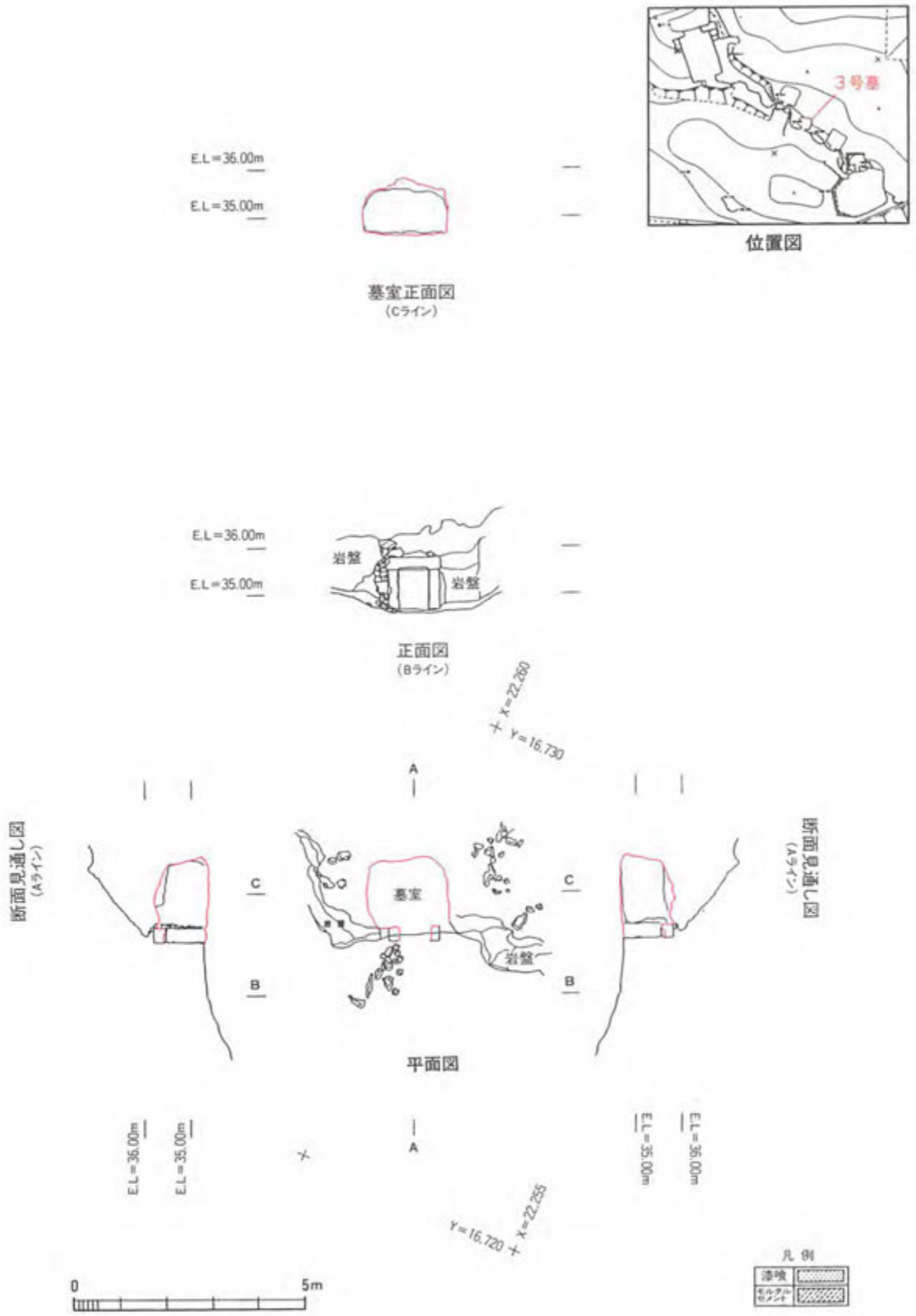
E.L.=36.00m
E.L.=35.00m



凡例

漆喰	
モルタル	
セメント	

第20図 2号墓



第21図 3号墓

4号墓 (第22図)

本古墓群7基中最も保存状態の良好な墓である。標高約34～37mの範囲に占地する。主軸方向はN-70°-Eで、墓口はほぼ西南西向きに開口する。

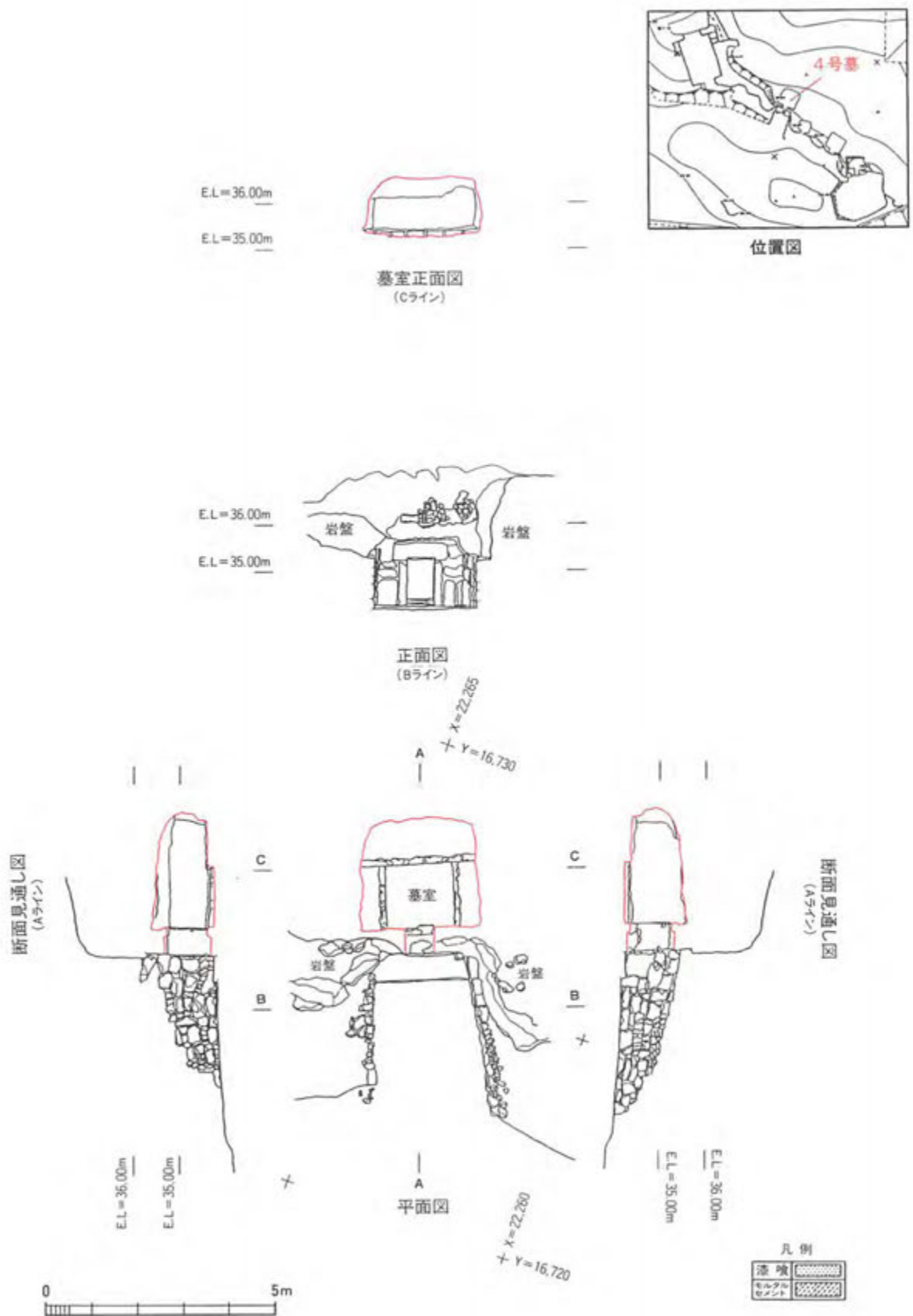
内部は石灰岩岩盤の岩陰を丁寧に掘り込んで墓室を造る。平面観はほぼ方形を呈する。天井は正面壁側でやや高いものの全体的に水平で、天井から奥壁に移行する部分で弧状となる。棚は奥に一段、左右に対面して各一段造られ、高さは奥と左右で約半分程度の段差がある。棚は長方形の切石を並べ表面を漆喰で被覆し、切石間の目地を覆うことで一枚石で造ったように見せている。床面は中央部及び棚共に平坦な土床を基本とし、同面に多数の枝サンゴ片と石灰岩小礫を敷き詰めている。墓口は墓室に対し中央に位置する。墓口の構造は2号墓と同様に上部手前の浅い抉りと、奥上下に設けた墓蓋のかかりからなっている。同口の床面は面取り加工した石敷きで、表面を被覆した漆喰が部分的に残る。本墓は墓口で石灰岩を加工した香炉石が内側へ倒れかけた状態で検出され、さらに墓室内には墓蓋に使用された一枚石が半分に割れた状態で散乱していた。このことから本墓は一枚石を墓蓋とし、さらに同石が外側へ倒れないように押さえると同時に、香炉の機能を兼ねた石を置くことによって墓口を閉塞したことが窺えた。

墓正面は岩盤の雨垂れ線にあたる部分を丁寧に削って水平にし、同部直下やや内側から石積みがなされている。また、雨垂れ線上部の岩盤面は窪みの部分に礫を詰め、表面に漆喰を被覆した部分が残る。本来は岩盤面全体に漆喰が塗られ平坦な面になっていたと考えられる。墓口を中心に正面は長方形に加工された石を布積みで整然と積み上げているが、同石積みの裏になる墓室内側では簡単に面取り加工した人頭大の石を雑なあいかけた積み状に積み上げている。両面共に目地には漆喰が充填されている。

墓前庭部は明瞭な墓庭としての空間を区画する石積みが設けられている。石積みは墓の正面両翼から腕を前方へやや広げたように積まれている。基本的に加工の粗い長方形の石を多く用い、雑石で隙間を埋めるようにあいかけた積みでなされている。正面に近い部分では目地に漆喰が充填されている。裏込めは石灰岩小礫を入れ土で覆っている。石積みは左右共に先端部は崩落しており本来の長さは不明である。ただ右側が比較的残りは良く、少なくとも現況以上の長さはあったことが窺える。高さについては左右共に墓正面に接する部分が最も高く、前方に向け傾斜して漸次低くなる傾向が見られる。特に右側の石積みは正面寄り最上部に積まれる石数個が平坦に収められており、同傾向とともに本来の高さが残る唯一の部分と考えられる。前庭部床面は墓正面に接して一段高くなる壇部と、同部より前方に広がる土床の面からなる。前者は漆喰で表面全体を被覆しており、右奥隅には方形の炉が設けられている。後者は床面全体が若干前方に向けて傾斜している。

なお、本墓正面から右側石積み付近を中心とする前庭部において、多数の人骨を含む蔵骨器が割れて散乱した状態で検出された。これらは戦時中、墓室を防空壕として使用するため内部から出され放置されたものと考えられるが、すべて本墓室に埋葬されたものかは不明である。

本墓は掘り込み墓に分類される。



第22図 4号墓

5号墓 (第23図)

標高約35～37mの範囲に占地する。保存状態が最も悪く、墓正面に積まれていたと見られる切石が前庭部一帯に散乱し、墓室であったと推定される凹みの部分が僅かに確認された。墓口が残存していないため主軸方向・開口方向が不明であるが、隣接する墓との位置関係および墓室奥壁の状況から、ほぼN-60°-Eで西南西向きに開口した墓と推定される。

残存する墓室の状況から、掘り込み墓と推測される。

6号墓 (第23図)

本古墓群の中で最も高い標高約37～39mの範囲に占地する。7号墓前庭部の右側石積みやや後方に位置する。天井および正面部が破壊され、墓室としての空間のみ残存する。主軸方向は、ほぼN-113°-Eで西北西向きに開口した墓と推定される。

墓室の平面観はいびつな長楕円状を呈し、壁面は剝落が著しいが右側壁面を見るとほぼ直に立ち上がっていたように推測される。床面は平坦で岩盤が風化した脆い面である。

墓前庭部は7号墓の石積み上面と共有しており、石積み方向へ傾斜している。

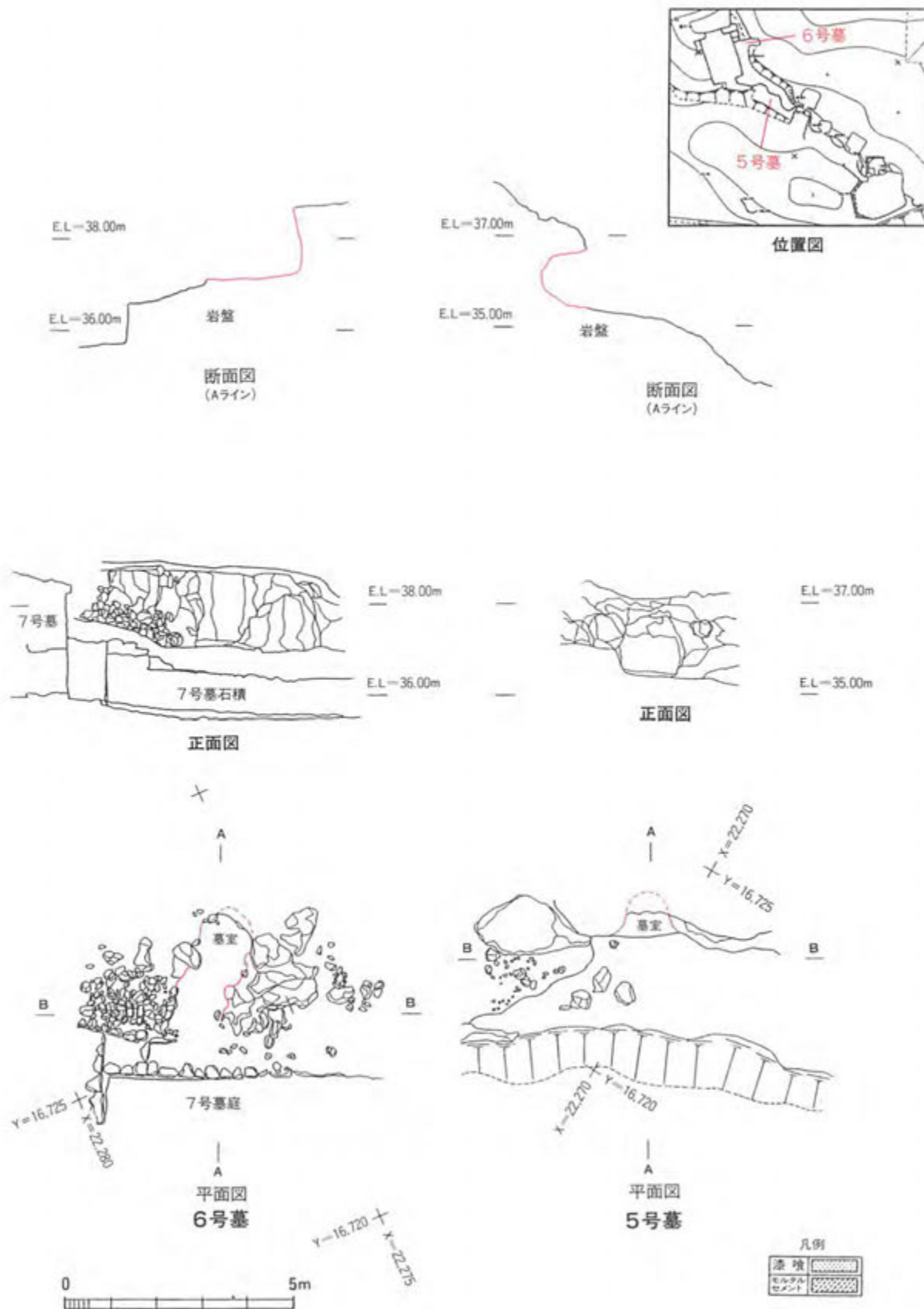
残存する墓室の状況から、掘り込み墓と推測される。

7号墓 (第24図)

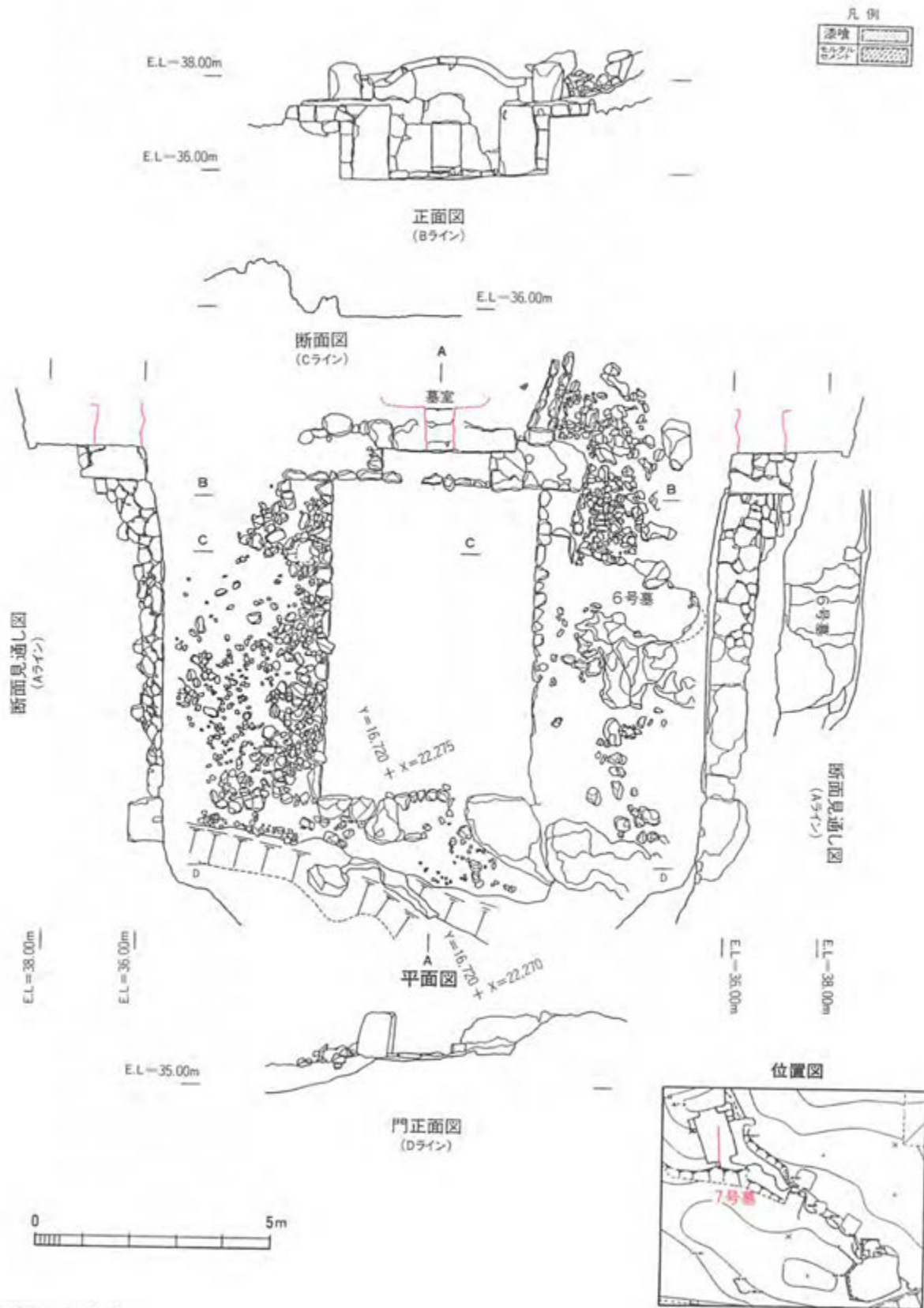
本古墓群の最北端に位置し、墓室および頂部の半分以上が破壊されているが、規模としては本古墓群中最大のものである。標高約35～39mの範囲に占地する。墓の主軸方向はN-24°-Eで、墓口は南南西向きに開口する。前述したように頂部が破壊され、それにより天井部が崩落し墓室も破壊されているため、内部の状況を把握することができない。

墓口の構造は1～4号墓と同様、上部は浅い挟りとかかりの部分からなっている。下部床面は平坦な切石による石敷きであるが、中央の石が抜き取られているため2号墓や4号墓のような段状の構造であったか不明である。

墓正面は部分的に崩れてはいるものの、辛うじて破壊を免れているため外観の形態から亀甲墓であることが確認できる。正面は基本的に墓口から頂部庇までの面と、同面の両翼で方形状に突出する石積みの面からなり、両者共に墓口を中心にほぼ左右対称となるように石を積み上げ造られる。前者は墓口左右および上部を中心に、丁寧に面取り加工した大型の石を積み上げ、上部から右側にかけて漆喰により被覆された面が残る。頂部の庇はアーチ状に形成され右端がやや反っており、左端は破壊されているが同様の形状であったと推測される。庇の両翼には円柱状に加工された石が各一個づつ置かれる。後者は本墓に使用される加工石としては最も大きい長方形の一枚石を正面に立て、同石の脇を人頭大前後の方形に加工した石で布積みによって固める。両翼ともに上部はほぼ畳一枚分の平坦面で、右側石積みの上部に漆喰で被覆された面が一部残る。本来は同面を含め正・側面全体が漆喰で被覆されていたと推測される。漆喰が剥がれた上面から石積み内部を観察すると、裏込めには石灰岩小礫を入れさらに土が充填されている。両突出部に挟まれた床面は石列によって縁取りした一段の壇が造られる。



第23図 5号墓・6号墓



第24図 7号墓

墓の頂部は前述したように、本墓後方一帯が採石等により大きく掘削されたことにより、半分以上が破壊されている。庇付近に僅かに残る部分は、黄色の石灰岩風化土がマウンド状に盛られている。右側に置かれた円柱状の石裏面から石列が二本並行して後方に延びている。同石列は本墓の頂部を取り巻くようにして左側円柱状の石へ接続していたと推測される。石列の右側から6号墓にかけて多数の石灰岩礫が散在しており、同礫の縁を囲うように石列が見られる。本来石列は石を積み上げ壁状になり6号墓と一部共有していた可能性が考えられる。

墓前庭部は石積みと岩盤を削ることで、縦長の長方形に区画する明瞭な墓庭空間を設けている。石積みは墓正面の両翼から並行して前方に延びる。基本的に左右共面取り加工した石をあいかた積みで積み上げているが、右側の石積みは墓正面から約3.3m付近までを石積みとし、それ以降は岩盤を削って造りだした壁面となっている。左側の石積みは前者と比較して上端部が殆ど破壊され、裏込めとして入れられた石灰岩礫が多数散乱している。同石積みで墓正面から約1.5m付近にやや方形状に石を組み、下部を掘り込んだ部分が検出されている。石の内面に一部漆喰が塗られており、俗に袖墓と称される施設の可能性も考えられる。墓庭の入口にあたる正面には中央部に門が設けられており、両翼は石積みと岩盤を利用した壁となっている。門は左右に石が立てられていたと考えられるが、現況では左側だけに面取り加工した石が残っている。同床面は手前と奥に石列で縁取りして墓庭床面と段差をつけている。なお墓庭の床面は石灰岩小礫を含む土床で、墓正面から門に向けて若干傾斜している。門の外側は多数の石灰岩礫と土の混じる急傾斜面となっているが、本来同所には本墓へ至る道を造成し設けていたと考えられる。

第15表 古墓観察一覧

単位：cm

墓番号	1号墓	2号墓	3号墓	4号墓	5号墓	6号墓	7号墓		
挿図番号	19	20	21	22	23	23	24		
分類	掘り込み(平葬)	掘り込み	掘り込み	掘り込み	掘り込み?	掘り込み?	? (亀甲)		
主軸方向	N-41°-E	N-82°-E	N-66°-E	N-70°-E	N-60°-E?	N-113°-E?	N-24°-E		
内 部 の 段 数 ・ 規 模 状 況	墓室規模	奥幅	170	238	150	240			
		横幅	262	240	176	262	130		
		高さ	184	156	118	138		128	
	棚の段数	奥	段数	1			1		
			奥幅	48			102		
			高さ	30			14		
		左	段数	1			1		
			奥幅	60			54		
			高さ	30			6		
	右	段数	1			1			
		奥幅	46			54			
		高さ	30			6			
備考	奥棚より頭骨1点検出 床面は土	床面は岩盤、 床右隅に方形の盛り上がり	床面は岩盤	床面は小礫と 枝サンゴ片敷く			墓室破壊崩落		

墓 番 号		1 号 墓	2 号 墓	3 号 墓	4 号 墓	5 号 墓	6 号 墓	7 号 墓	
墓 口 の 状 況	墓 口 規 模	奥幅	左-102 右-80	60	30	58		82	
		横幅	66	68	63	64		62	
		高さ	122	106	92	102		98	
	開 口 方 向	南西	西	西南西	西南西	西南西?	西北西?	南南西	
	墓室に対する 位置	左寄り	右寄り	右寄り	中央			中央?	
	蓋の か か り	上	有	有	有	有			有
		下		有		有			
備 考	床面破壊攪乱 上部に浅い抉り		上部に浅い抉り	上部に浅い抉り	上部に浅い抉り			床中央破壊	
外 部 （ 正 面 ） の 状 況	両 翼 突 出 部 規 模	左	奥幅	80				83	
			横幅	90				210	
			高さ	106				134	
	右	奥幅						70	
		横幅						214	
		高さ						136	
	壇 の 段 数 ・ 規 模	段数				1			1
		奥幅				58			73
		横幅				200			338
		高さ				10			13
備 考	床面破壊攪乱 頂部に直線状の 庇片		正面石積をモル タルで被覆	全体に稚拙	正面・壇を漆喰 で被覆。壇右 隅に方形の石有			頂部にアーチ状 の庇。庇両翼に 円柱状の石	
外 部 （ 前 庭 ） の 状 況	石 積 規 模	左	長さ			284		675	
			高さ			130		119	
		右	長さ			350		674	
			高さ			126		114	
	門 の 位 置 ・ 規 模	位置							正面中央
		奥幅							105
		横幅							134?
		高さ							95
備 考	床面破壊攪乱	床面は岩盤	床面は岩盤	床面は土				右石積一部は岩 盤壁。左石積 に方形の石組?	

※各計測値は現状の最大値である。

※分類は墓室の構築方法を基本とした。また1号・7号墓は外観の形態名も加えた。

2. 出土遺物

古墓群地区出土の遺物は人工遺物と自然遺物に分けられる。人工遺物は陶磁器を中心に、土器・金属製品・ガラス製品・骨製品等であり、自然遺物は人骨・貝類遺殻・獣骨等である。

陶磁器は出土地点別にその数を一覧表（第16表）に示した。なお、陶磁器については洞穴地区で出土した資料も本項で挿図と観察一覧にまとめて掲載した。人骨については主なものを一覧表（第28・29表）にして示した。本土産陶磁器・貝類遺殻・獣骨については紙面の都合上今回は省略した。

第16表 古墓群地区遺物集計一覧（陶磁器）

出土地点	種類			本土産陶磁器	沖縄産陶器						不明	合計
	青磁	褐釉	青花		施釉	無釉	陶質	円盤状	キセル	窯道具		
1~4号墓清掃	3	1	2	18	15	6	4	1		2		52
1号墓上部清掃			1	5	8	1	4					19
1号墓庭				1					1			2
2号墓庭				2	1	1						4
3号墓庭				7	3							10
4号墓室内	9			1	6		2				1	19
4号墓庭			3	19	25	13	2	1			1	64
4号墓庭左側石積				2	1							3
5号墓埋土					2							2
6号墓室内					1							1
7号墓庭	1	1		9	25	6	5		3		2	52
7号墓庭前斜面					1							1
7号墓北側集塵						2						2
合計	13	2	6	64	88	29	17	2	4	2	4	231

A. 中国産磁器

青磁と青花が得られている。器種は殆ど碗であるが、青花に香炉が一点含まれる。各々の詳細は観察一覧（第17表）を参照されたい。

a. 青磁（第25図1～3：P.L. 23）

形状の窺えるもの3点を示した。1・2は共に外面上位に雷文帯を巡らす直口口縁の碗である。3は内面見込みに印花を施す碗の底部である。

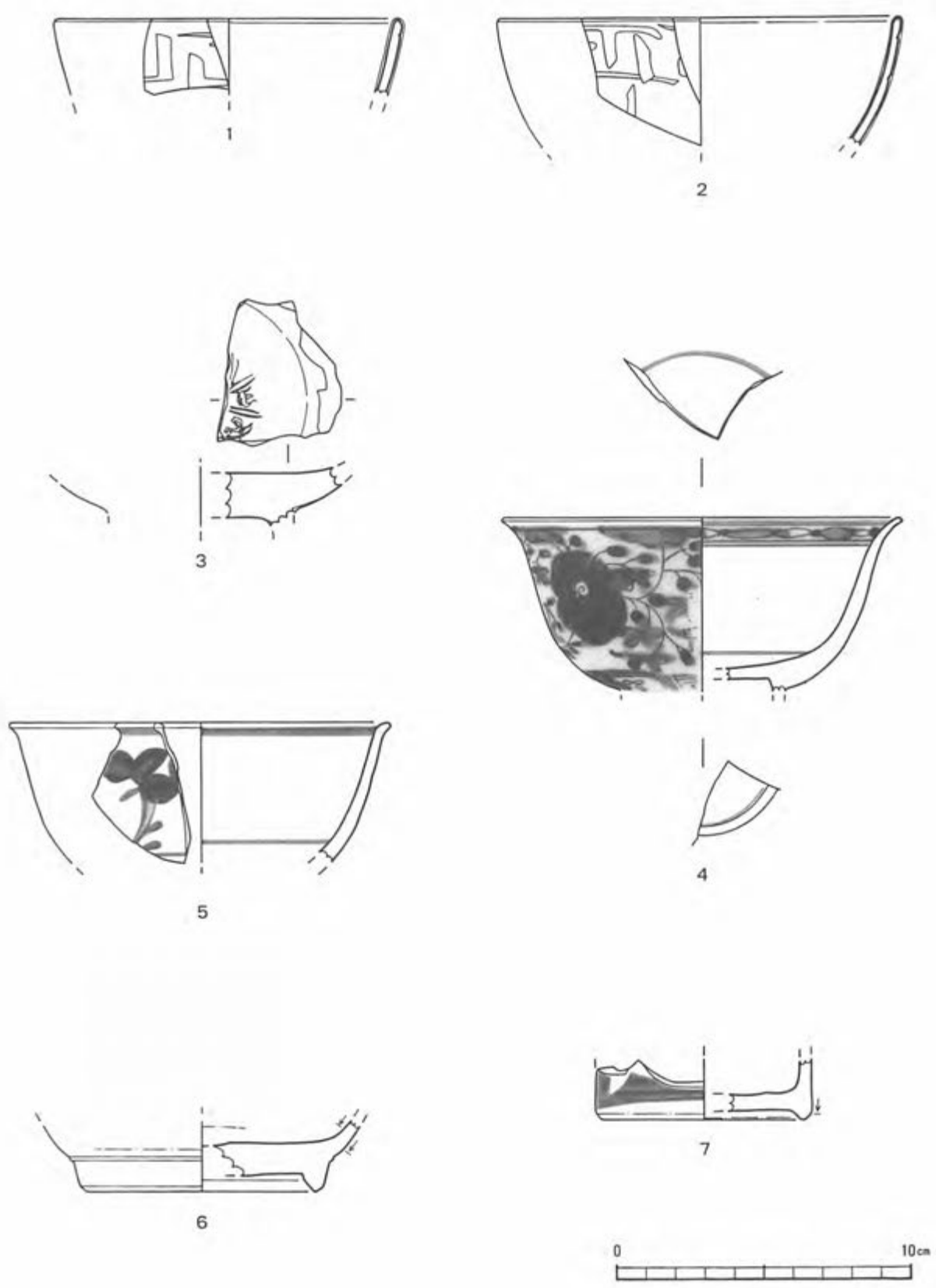
b. 青花（第25図4～7：P.L. 23）

4・5は外反口縁の碗である。7は筒状の器形が想定される香炉の底部である。

第17表 中国産磁器観察一覧

単位 (cm)

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層序	器種	口径 器高 高台	素地	施釉	文様
第25図1 PL23-1	4号墓室内	青磁 雷文帯碗	11.6 — —	淡灰色	内外面に淡緑色の釉を施す。	口縁外面に雷文。
~ 2	~	~	13.8 — —	~	内外面に青緑色の釉を施す。	~
~ 3	洞穴上部	青磁 無銘蓮弁 文碗	— — —	~	高台内面を除く内外面に淡緑色の釉を施す。	見込みに印花文。
~ 4	洞穴上部	青花碗	13.6 — —	灰白色	淡青色の釉で絵付けし、薄い透明釉を全面に施す。	外面に草花文。蓮弁文。 内面に園線・楕円文。
~ 5	洞穴上部	~	13.0 — —	~	~	外面に草花文。内面に園線。
~ 6	洞穴上部	~	— — 8.3	~	外面胴部下位に薄い透明釉を施す。	
~ 7	~	青花香炉	— — 6.8	~	淡青色の釉で絵付けし、壺付けを除く全面にやや厚めの透明釉を施す。	外面に園線。



第25图(PL. 23) 中国産磁器：青磁碗(1~3)・青花碗(4~6)・青花香炉(7)

B. 沖縄産陶器

沖縄産陶器は施釉陶器・無釉陶器・陶質土器の三種に大別される。これらは現在那覇市壺屋において、それぞれジョウヤチ・アラヤチ・アカムン(註15・16)と通称されているものである。以下施釉陶器より概略を記す。なお蔵骨器については本項陶器に含まれるものもあるが、別項を設けて概略を記した。

a. 施釉陶器

器面に釉薬が施されたものである。器種としては碗・皿・鉢・蓋・水注・瓶・乗燭・煙管が得られている。各々の詳細は観察一覧(第18表)に示した。

小碗・碗・皿(第26図：P L. 24)

1・2共に小碗である。1は小振りながら器壁がやや厚手。高台は垂直に立ち上がり筒状で断面方形。2は畳付けを内側へ内傾させた台形状の断面を呈す。3は碗の中ではほぼ均一な厚みで丁寧に成形。高台脇から丸みを持ちながら緩やかに立ち上がる。高台はシャープな削りで逆台形状の断面を呈す。4は高台脇で微妙に屈曲しストレートに立ち上がる。畳付けを平坦に成形した方形の断面を呈す。5～8はジョウヤチと称される碗の典型的資料である。9は皿の資料である。断面が逆台形状の低い高台を作る。

鉢(第27図1：P L. 25)

胴部がやや膨らみを持ちながら立ち上がり、口縁部が外へ折れ曲がる。

蓋・蓋物(第27図2～6：P L. 25)

2は急須の蓋である。3は碗を4は皿を伏せた形状の蓋で共に高台状のつまみを作る。5・6は蓋物で互いに蓋と身で対応する。

水注(第28図1～3：P L. 26)

1は撫で肩の肩部から張りのある胴部を作る小振りの水注である。肩部に把手の耳を付ける。2は短い頸部を作り肩部が張るものである。3は底部脇に脚を付けたものである。

瓶(第28図4～7：P L. 26)

4は頸部から口縁部まで直に立ち上がるやや短頸の瓶である。5は肩部で張りのある丸みを持ち腰部で「く」の字状に角張る瓶で、俗に渡名喜瓶と称されている。6・7は共に肩部が張りのある丸みを持つものである。

乗燭(第28図8：P L. 26)

口縁部の内湾する灯明具の一種である。本来見込み中央に灯芯を支える突起と、下部に脚が付くものと考えられる。

煙管(第28図9・10：P L. 26)

陶器製の煙管である。9は雁首で火皿に比べラウを挿入する肩部が大きく膨らむ。10は吸口で前者と同様にラウを挿入する肩部が大きく膨らむ。両者は出土地点および施釉の状況等からセットになるものと考えられる。

b. 無釉陶器

器面に釉薬を施さず焼き締めたものである。器種は水鉢・播鉢・煙管が得られている。各々の詳細は観察一覧（第19表）に示した。

水鉢（第29図1・2：P.L.27）

1は口縁部が屈曲して肥厚し口唇部を平坦にするもの、2は屈曲せず口唇部を舌状にするものである。

播鉢（第29図3～5：P.L.27）

3・5共に口縁部を外に折り曲げるものであるが、前者は幅が狭く直下に明瞭な稜線を持ち、後者は幅が広く稜線を持たないものである。4は5に比較して底径が小さく胴部が丸みを持たずストレートに開き立ち上がるものである。

煙管（第29図6：P.L.27）

雁首である。施釉の製品に比べ直線的でスマートな形状を呈す。火皿およびラウを挿入する肩部を八角形に面取成形する。

第18表 沖繩産陶器（施釉）観察一覧

単位(cm)

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層序	器種	口径 器底 器高 器径	素地	施釉範囲	釉の状態	特徴
第26図1 PL24-1	1～4号墓 上部清掃	小 碗	— — 3.8	黄白色 微粒子	畳付けを除いて施釉。	高台内は透明釉のみで他は白化粧土+透明釉。 白化粧土の面に多数の貫入。	高台内面に窺削り痕。 高台内中央がやや盛り上がる。
“ 2 “ 2	洞穴上部 M-23Ⅱ層	“	— — 3.8	黄白色 微粒子	畳付け・高台内面を除いて施釉。見込みを蛇の目釉割ぎ取り。	外：胎釉。 内：白化粧土+透明釉。 内面に貫入多数。	畳付けに白土が付着。 高台内中央がやや盛り上がる。
“ 3 “ 3	“ M-20Ⅰ層	碗	— — 5.6	“	畳付け・高台内面を除いて施釉。	透明釉のみ。 細かい貫入多数。	高台内面に窺削り痕（圓線一条）。
“ 4 “ 4	“ M-23Ⅱ層	“	— — 6.4	“	高台を除いて施釉。見込みを蛇の目釉割ぎ取り。	黒色釉。	畳付けに白土が付着。 高台内面に窺削り痕。
“ 5 “ 5	“ M-22Ⅱ層	“	— — 6.4	黄褐色 微粒子	畳付けを除いて施釉。見込みを蛇の目釉割ぎ取り。	白化粧土+透明釉。 施釉全面に貫入。	畳付けに白土が付着。
“ 6 “ 6	表 採	“	— — 5.6	“ 黒色粒子多数	“	“	“ 高台内中央がやや盛り上がる。見込み釉割ぎ取り部に重ね焼痕。
“ 7 “ 7	洞穴上部 N-21Ⅰ層	“	13.0 6.0 6.0	淡褐色 微粒子	“	呉須で草花文。 白化粧土+透明釉。 一部発色悪い。	畳付けに白土が付着。 見込み釉割ぎ取り際に重ね焼痕。
“ 8 “ 8	“ M-23Ⅰ層	“	— — 6.4	黄白色 微粒子	“	呉須と胎釉で花文。 白化粧土+透明釉。 施釉全面に貫入。	“
“ 9 “ 9	1～4号墓 上部清掃	皿	— — 7.1	黄褐色 微粒子	畳付けを除いて施釉。	白化粧土+透明釉。 施釉全面に貫入。	畳付けに白土が付着。
第27図1 PL25-1	7号墓	鉢	22.8 10.2 9.6	黄白色 微粒子 黒色粒子多数	畳付けを除いて施釉。口唇部釉割ぎ取り。見込みを蛇の目釉割ぎ取り。	外：胎釉 内：白化粧土+透明釉 内施釉全体に貫入。	口縁部を逆「L」字状に折り曲げる。畳付けに白土が付着。見込み釉割ぎ取り部に重ね焼痕と呉須の帯付着。
“ 2 “ 2	洞穴上部 M-22Ⅱ層	水注の蓋	7.3 — 6.2	黄褐色 微粒子	上面から側面を施釉で他は白化粧土のみ。	上面に呉須と胎釉で沈線による圓線・格子文上に絵付け。 上面から側面に白化粧土+透明釉。 施釉面全体に貫入。	

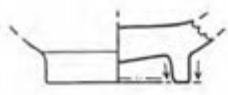
単位 (cm)

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層序	器種	口径 器高 底径	素地 色調	施釉範囲	釉の状況	特徴
第27図3 PL25-3	" N-20 I 層	碗の 蓋	10.6 4.6	淡褐色 微粒子	内面・外面縁より約 1cm 幅上位を除いて 施釉。 内面は白化粧土のみ。	鉛釉。 やや圏線状に濃淡あり。	縁に白土を付着させる。 沈線による圏線が廻る。 外面無釉部分は露釉。
" 4 " 4	" M-23 II 層	鍋の 蓋	— —	灰色 微粒子	内面・外面つまみ部 と甲上位の一部を除 いて施釉。	鉛釉。	内面に多数の砂付着。 つまみ中央面に径約1.8cm の圏線。
" 5 " 5	6号墓室内	蓋物 の蓋	10.0 3.5 7.8		内面縁からかかりは 白化粧のみ、他は全 面施釉。	鉛釉。	6の身に対応。 つまみ上半に細かい粒状の 文様。 甲外面に蓮弁文。
" 6 " 6	6号墓室内	蓋物 の身	9.2 4.6 7.0		口唇から口縁内面・ 畳付けは白化粧のみ、 他は全面施釉。	施釉面全体に貫入。	胴部下半に蓮弁文。
第28図1 PL26-1	5号墓埋土	水 注	3.6 6.0 4.0	灰色 微粒子	口唇から内面・底部 を除いて施釉。	灰釉。 施釉面全体に細かい貫入。	口唇から口縁内面に白土。 肩部に把手のかけ耳を付ける。 底部は釣り出しにより畳付け を内側へ斜めにせり上げる。
" 2 " 2	洞穴上部 K-21 II 層	水 注	7.5 — —	暗灰色 微粒子	口唇から内面を除い て施釉。	灰釉。 施釉面全体に細かい貫入。	口唇から口縁内面に白土。 内面に明瞭なロクロ成形痕。
" 3 " 3	洞穴上部 M-22 I 層	"	— — 5.3	灰白色 微粒子	内面・底部脚の付く 範囲までを除いて施 釉。	"	底部に円錐状の脚。
" 4 " 4	5号墓埋土	瓶	2.2 9.0 4.0	茶褐色 微粒子	底部のみ白化粧土で 他は全面施釉。	白化粧土十透明釉が厚めに施釉さ れるが全体にムラがある。	施釉時の持った指痕が底部 高台部に認められる。
" 5 " 5	7号墓庭	"	3.5 20.8 6.6	"	畳付け・内面を除い て全面施釉。	鉛釉。 腰部の釉が一部未発色。	胴部に沈線による3本の圏 線、腰部の上面端に1本の 圏線を施す。
" 6 " 6	"	"	— — —	黄褐色 微粒子	内面を除いて全面施 釉。	鉛釉。	頸部上下に沈線による圏線 を各1本、肩部に同じ圏線 を1本施す。内面に明瞭な ロクロ成形痕。
" 7 " 7	"	"	— — 6.4	赤褐色 微粒子	内面・高台部から畳 付けを除いて全面施 釉。	鉛釉。 全面に釉が未発色。	肩部から頸部に移行する部 分が若干盛り上がる。 内面にロクロ成形痕。
" 8 " 8	7号墓庭 前 斜 面	乗 燭	5.7 — —	暗灰色 微粒子	全面施釉。	鉛釉。 外面上位の釉が未発色。 外面下位の施釉面に細かい貫入。	
" 9 " 9	7号墓庭	煙 管 (吸口)	0.9 (口部径) 1.6 (胴部径) 2.8 (全長)	黄白色 微粒子	外面のみ施釉。	灰釉。 施釉面全体に細かい貫入。	
" 10 " 10	"	" (雁首)	1.5 (火皿径) 1.6 (胴部径) 3.3 (全長)	"	外面・火皿部内面 のみ施釉。	"	

第19表 沖縄産陶器 (無釉) 観察一覧

単位 (cm)

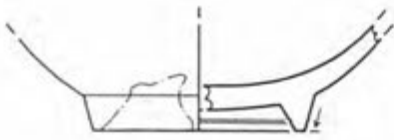
挿図番号 図版番号	出土地点 出土層序	器種	口径 器高 底径	色調	素地	器面状態 (調整等)	特徴
第29図1 PL27-1	洞穴上部 L-23 II 層	水 鉢	24.2 — —	赤褐色 微粒子	外: 淡褐色 内: 赤褐色	内外面共に丁寧な横位の調整痕。	口縁上位に櫛目の波状沈線 を横位に廻す。
" 2 " 2	消 掃	"	23.8 — —	"	外: 黒褐色 淡褐色 内: 黒褐色	"	口縁上位に2本の凹線、下位 にやや幅広い櫛目による波 状沈線を横位に廻す。



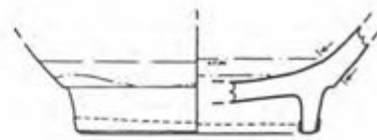
1



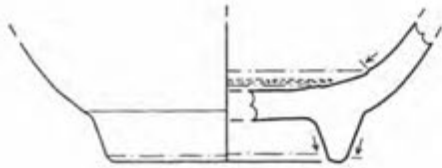
2



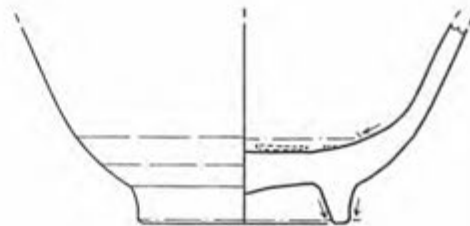
3



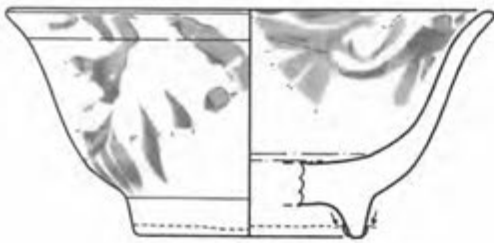
4



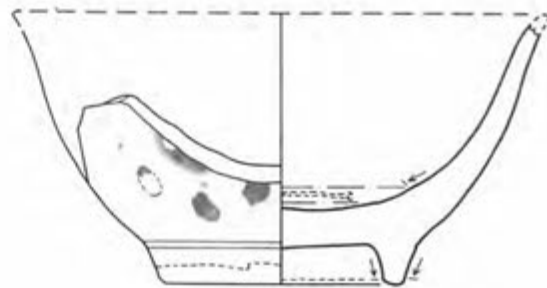
5



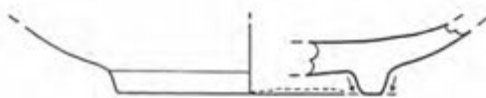
6



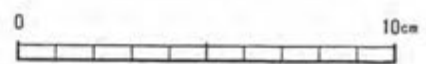
7



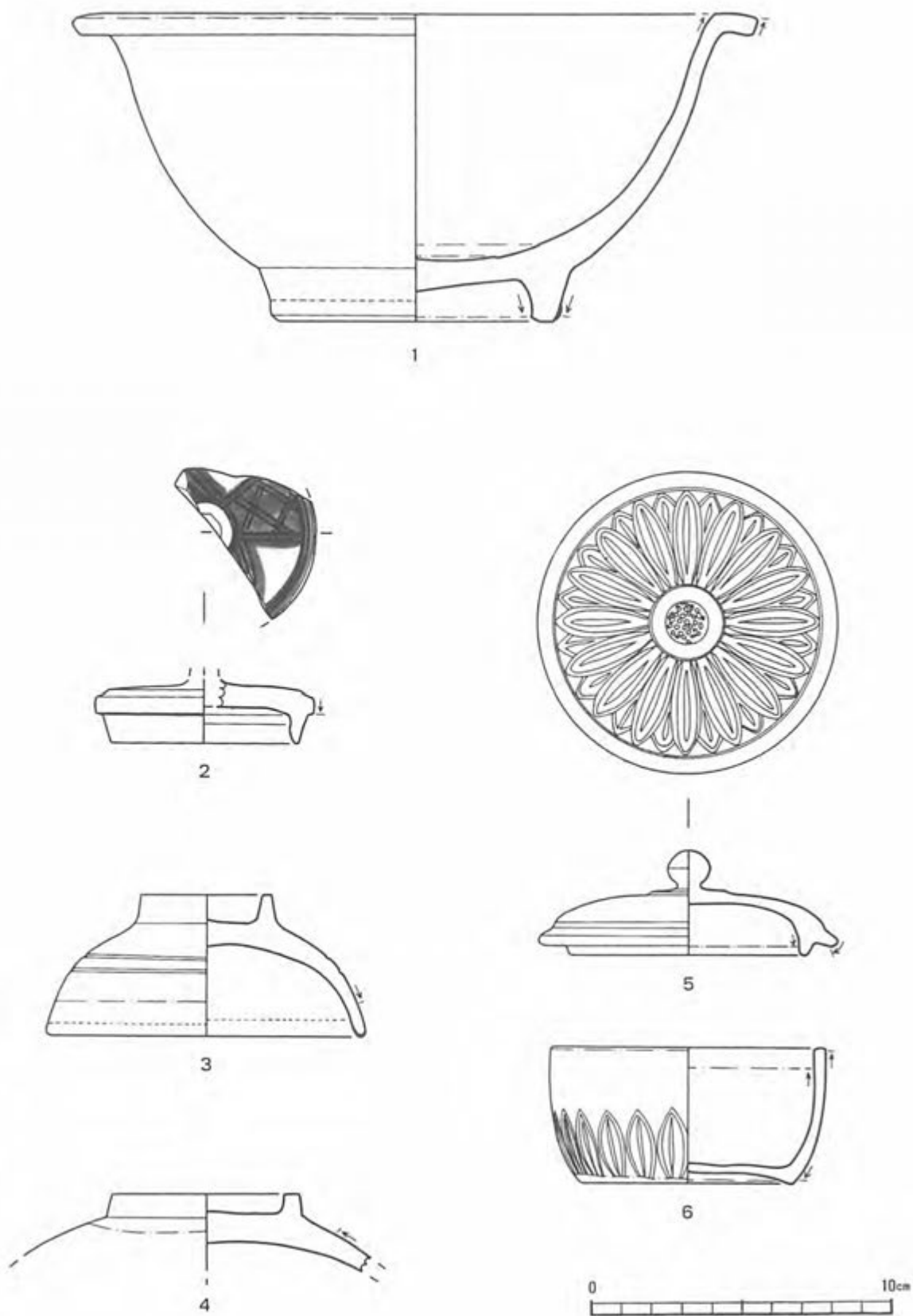
8



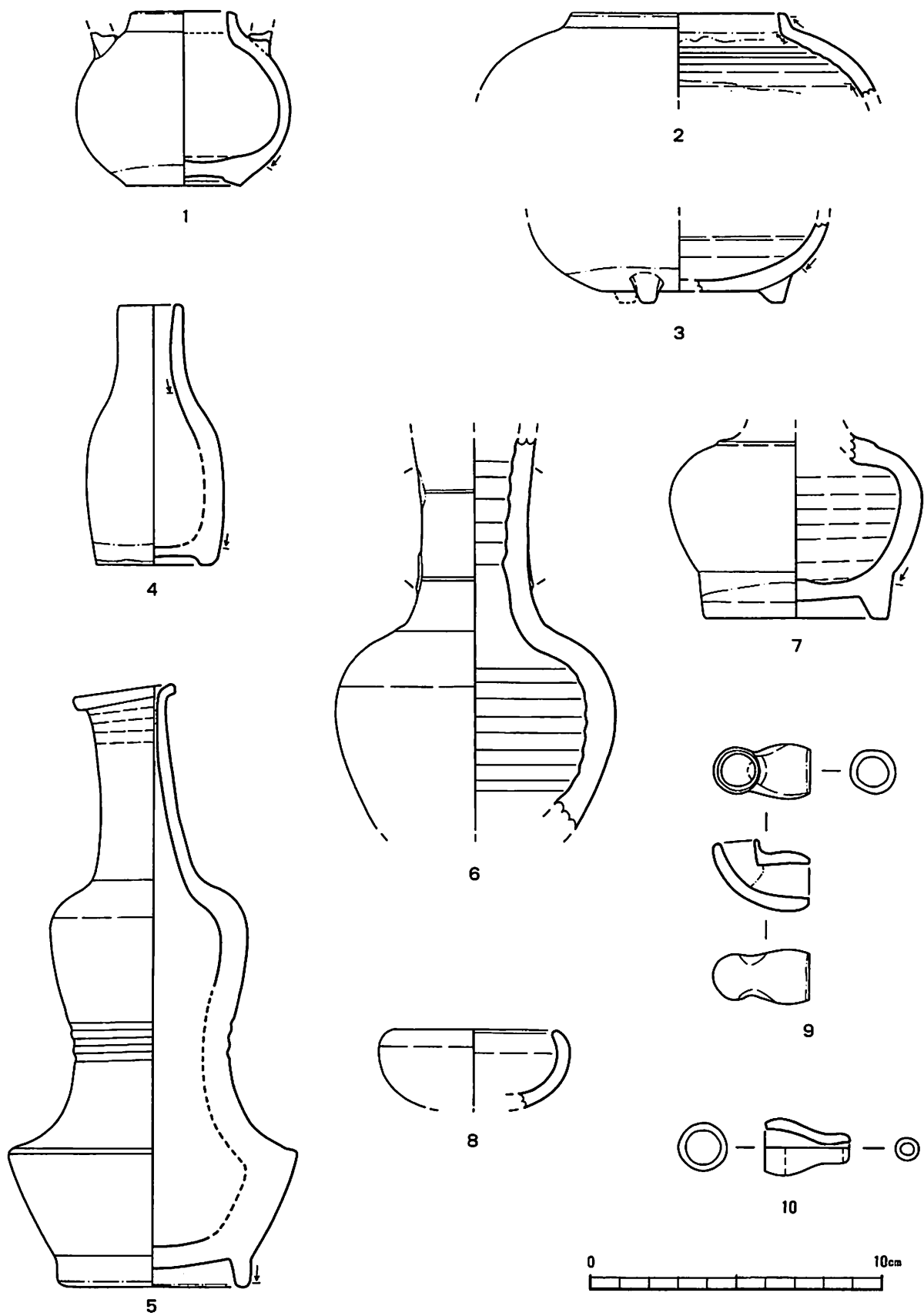
9



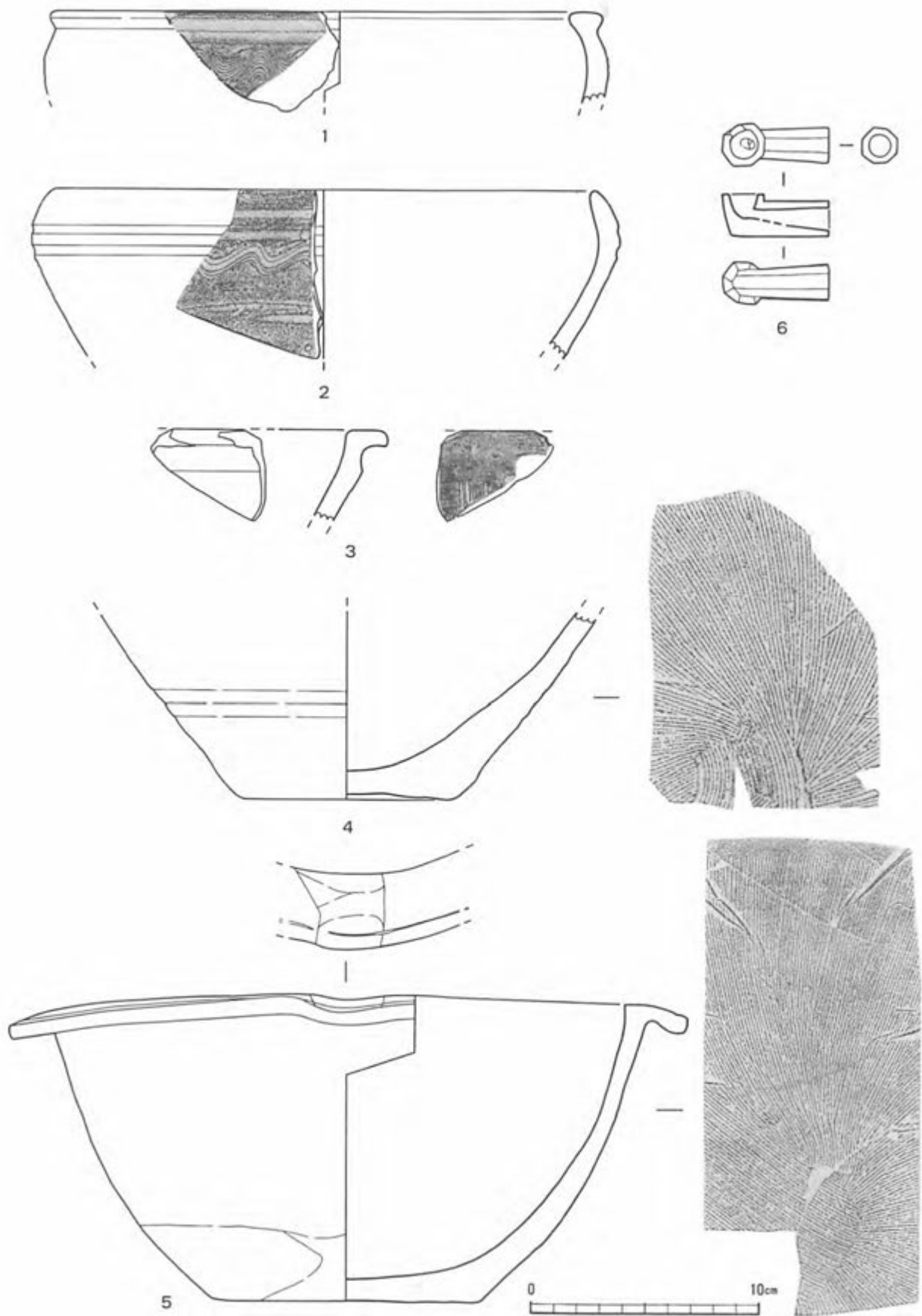
第26図(PL. 24) 沖縄産陶器・施釉：小碗(1・2)・碗(3~8)・皿(9)



第27図(PL. 25) 沖縄産陶器・施釉：鉢(1)・蓋(2~4)・蓋物(5・6)



第28図(PL. 26) 沖縄産陶器・施釉：水注(1~3)・瓶(4~7)・乗燭(8)・煙管(9・10)



第29図(PL. 27) 沖縄産陶器・無釉：水鉢(1・2)・播鉢(3~5)・煙管(6)

単位 (cm)

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層序	器種	口径 器高 器径	素地	色調	器面状態 (調整等)	特徴
第29図3 PL27-3	洞穴上部 M-23Ⅱ層	鉢 鉢	— — —	暗赤褐色 微粒子	外：淡黒色 内：淡褐色	内面に丁寧な横位の調整痕。 外面の調整は雑。	内面に縦位5本の欄目溝。欄目 上位は1.3cm幅で横位から横で 消される。
~ 4 ~ 4	4号墓庭	~	— — 9.0	~ 大粒の石灰 質粒子を含 む。	外：茶褐色 内：赤褐色	外面の調整雑。 多数の気泡痕。外面に輪積の成形痕。 外面釉化して光沢を帯びる。	1単位10本の欄目溝を内面全体 に施す欄目は下から上に左廻り で施される。
~ 5 ~ 5	清 鉢	~	29.7 13.5 11.6	淡 橙 色 微 粒 子	外：暗褐色 淡橙色 内：淡橙色	内外面共に丁寧な調整痕。底部は 陥状工具によって丁寧に調整され る。	1単位12本の細かい欄目溝を内 面全体に施す。口唇部に浅い本 の沈線を通す。口唇部に注目を 1ヶ所設ける。
~ 6 ~ 6	7号墓庭	煙管 (雁首)	1.8 (大口径) 1.6 (胴部径) 4.7 (全長)	淡 褐 色 微 粒 子	外：黒 色 赤褐色 内：淡褐色	全体を丁寧に調整。 一部釉化して光沢を帯びる。	

c. 陶質土器

釉薬を施さない淡橙色系の土器で、焼成は脆弱なものが大半を占める。胎土はよく精選されその殆どに雲母粒子を含んでいる。器種は土瓶（把手の耳）・鉢が得られている。各々の詳細は観察一覧（第20表）に示した。

土瓶（第30図1；P.L.28）

肩部に付く把手の耳である。末広りの台形状を呈し上部に孔を穿つ。

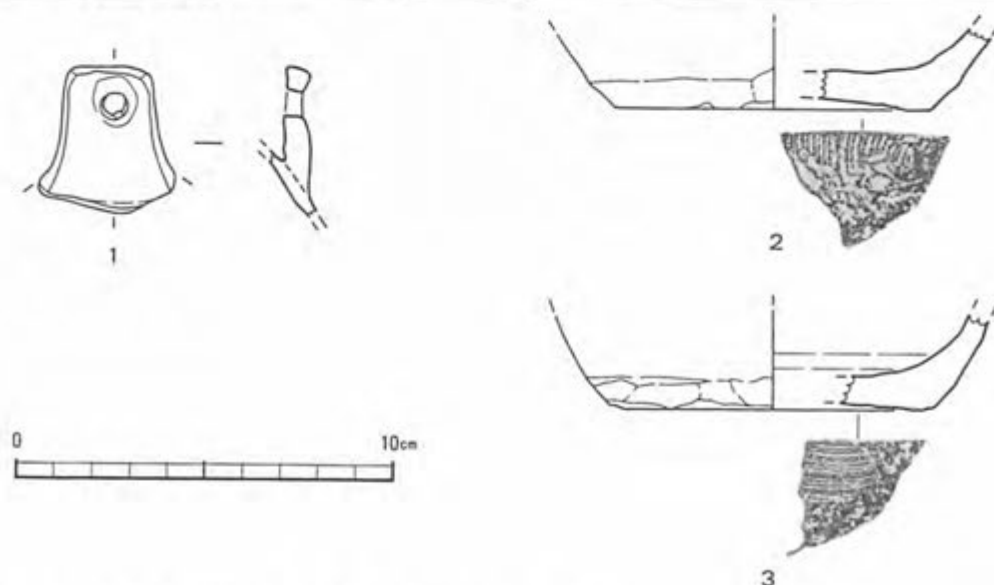
鉢（第30図2・3；P.L.28）

共に鉢底部の資料である。2は丸みを持ちながら、3はほぼストレートに胴部へ立ち上がる。

第20表 沖縄産陶器（陶質）観察一覧

単位 (cm)

挿図番号 図版番号	出土地点 出土層序	器種	口径 器高 器径	素地	色調	特徴
第30図1 PL28-1	洞穴上部 N-22Ⅰ層	土瓶の 耳	— — —	橙 色 微 粒 子 雲母・赤色 粒子含む。	外：橙 色 内： ~	径0.5cmの穴が穿たれる。 根本の胴部片内面にロクロ成形痕。
~ 2 ~ 2	洞穴上部 K-21Ⅱ層	鉢	— — 8.7	~	~	底部に糸切痕。
~ 3 ~ 3	L-23Ⅱ層	~	— — 8.4	~ 石灰質粒子含む。	~	~



第30図(PL.28) 沖縄産陶器・陶質：土瓶(1)・鉢(2・3)

C. 蔵骨器

厨子甕（ジーシガーミ）と称されている蔵骨器である。すべて沖縄産陶器で、出土総数は身及び蓋の破片をそれぞれ接合し1個体として確認できたものが73個、接合できない破片が27個であった。形態から甕形と箱形に分け、さらにそれぞれで細分した。分類した各々の代表的なものを挿図と観察一覧に示し、他は詳細のみを観察一覧に示した。以下、甕形からその分類概念を記す。

1. 甕形 [蓋] (第31・32図：P L. 29・30)

蓋は形態から大きく二つに分けさらにそれぞれ細分した。詳細は観察一覧（第21表）参照。

第Ⅰ群：蓋甲が「ハ」の字状になるもの。

A類：頂部に段を設けないもの。(第31図1・2)

B類：頂部に段を設けるもの。(同図3・4)

C類：頂部に宝珠状のつまみのみを設けるもの。(同図5)

D類：頂部に宝珠状のつまみと段を設けるもの。(同図6・7)

第Ⅱ群：蓋甲がドーム状になるもの

A類：頂部の段が一段のもの。(第32図1～3)

B類：頂部の段が二段のもの。(同図4～11)

C類：頂部の段が三段のもの。(同図12)

2. 甕形 [身] (第33～36図：P L. 31～34)

身は形態から大きく二つに分けさらにそれぞれ細分した。詳細は観察一覧（第23表）参照。

第Ⅰ群：口縁部が玉縁状に肥厚し口唇は丸く仕上げる。ボージャー^(註17)厨子と称しているものである。

A類：口縁部が大きく内湾するもの。(第33図1・2)

B類：口縁部がやや立ち上がり若干頸部を作るもの。(第33図3・第34図1)

C類：口縁部が直に立ち上がり明瞭な頸部を作るもの。(第33図4・第34図2)

第Ⅱ群：口縁部が方形ないし逆三角形状に肥厚し口唇は平坦に仕上げる。マンガ^(註18)ン掛け厨子甕と称されているものである。

A類：口縁部がほぼ直に立ち上がり頸部をつくるもの。(第35図1・2)

B類：口縁部が外反し頸部が「く」の字状に括れるもの。(第36図1)

C類：口縁部が外反し頸部が弧状に括れるもの。(同図2)

3. 箱形 [蓋] (第37図：P L. 35)

蓋は形態から大きく二つに分けた。後述の身に対応し、両者は赤焼御殿型厨子甕^(註19)と称されているものである。詳細は観察一覧（第22表）参照。

A類：寄棟造の屋根型をするもの。(1～3)

B類：寄棟造の屋根型を重層にするもの。(4)

4. 箱形 [身] (第38・39図：P.L. 36・37)

長方形の箱形をした身である。大きく二つに分けた。詳細は観察一覧(第24表)参照。

A類：底部の足が長いもの。(第38図1・第39図1)

B類：底部の足が短いもの。(第38図2・第39図2)

第21表 蔵骨器：甕形「蓋」観察一覧

No.	形	分類	出土地点	法 量 (cm)				銘 書	備 考	挿図 図版
				a	b	c	c'			
1	甕	IA	4号墓庭	7.7	10.2	32.0		乾隆五拾三年□□月□□□□洗骨		31-1 29-1
2	〃	〃	〃	9.4	11.2	33.0		道光貳拾九年己酉七月十六日洗骨 □□□□□□嘉慶一年己三□□		31-2 29-2
3	〃	IB	〃	7.6	7.0	24.7		乾隆三拾三年□□		31-3 29-3
4	〃	〃	2号墓庭	10.2	11.3	35.0				31-4 29-4
5	〃	IC	4号墓庭	10.0	12.7	30.5				31-5 29-5
6	〃	ID	4号・1号墓庭	8.9	14.3	33.0				31-6 29-6
7	〃	〃	4号墓庭	7.8	11.0	29.6			外面に沈線による蓮華文。	31-7 29-7
8	〃	IIA	〃	10.9	15.2	29.0		道光二年三月□ 比嘉□□伯母		32-1 30-1
9	〃	〃	〃	10.3		29.0		骨 大正六年旧四月十一日 一世 石川真津 次男次良 女カミ 三男□ 女マカト ヒツジ年 月十一日死去 昭和十九年七月七日洗骨妻マカト		32-2 30-2
10	〃	〃	2号墓庭	12.4	17.0	30.2		判読不可能	上部を瓦屋根風に作る。 側面に5個穴を穿つ。	32-3 30-3
11	〃	IIB	4号墓庭	12.0	18.4	32.0		嘉慶六年辛酉十月十七日 中村築筑□ □ □□ □□□ □□		32-4 30-4
12	〃	〃	〃	11.9	16.2	32.0		判読不可能		32-5 30-5
13	〃	〃	〃	13.1	15.7	29.0		嘉慶貳 拾年乙亥□月 □□□ □思戸 判読不可能		32-6 30-6
14	〃	〃	4号墓庭 左側集積	12.2	17.2	33.0		光緒八年辛午 正月二十□日寺富之 次男比嘉筑登之親雲上洗骨 童名 次良 洗骨		32-7 30-7
15	〃	〃	4号墓庭	9.7	16.5	31.0		咸豐八年 当間筑登之親雲上女子うし		32-8 30-8
16	〃	〃	4号墓庭	9.5	16.6	31.0		□乾隆四拾五年庚子□七日中村□□ □	側面に獅子頭を3個貼付ける。	32-9 30-9
17	〃	〃	1号・4号墓庭	10.5	10.8	26.0				32-10 30-10
18	〃	〃	4号墓庭	10.2		30.0		正拾貳年未年 正月廿二日死 女カマド世貳歳 判読不可能		32-11 30-11
19	〃	IIC	〃	11.1	15.7	31.0				32-12 30-12
20	〃	II不明	〃			28.6		道光 垣		32-13 30-13
21	〃	ID	3号・4号墓庭	8.5	12.5	30.0				
22	〃	I不明	4号墓庭			31.0				
23	〃	IC	〃	8.5	7.8	29.0				
24	〃	〃	〃	10.3	10.6	31.4				
25	〃	〃	4号・1号墓庭	6.3	10.7	29.0				
26	〃	I不明	7号左側集積 方形石組内			32.0				
27	〃	IIA	4号墓庭	11.5	16.6	30.0				
28	〃	II不明	〃			15.0				

第22表 蔵骨器：箱形「蓋」観察一覧

No	形	分類	出土地点	法 量 (cm)				銘 書	備 考	挿図 図版
				a	b	c	c'			
1	箱	A	4号墓庭	25.5	27.3	49.2	36.0	□□ 乾隆三□□ □□	頂部に2個の龍頭、側面に4個の獅子頭を付ける。表面に直線曲線による絵付け痕あり。	37-1 35-1
2	"	"	"	33.9	27.7	46.2	35.9	乾隆三十三年□□八月四日 □ □□□□	頂部に2個の龍頭、側面に4個の獅子頭を付ける。表面に直線による絵付け痕あり。	37-2 35-2
3	"	"	4号・2号墓庭	25.3	23.5	48.8	34.6	元祖□古□骨庚辰 十月□日□□□□□□ 南□□□□□□□ □	頂部に2個の龍頭、側面に4個の獅子頭を付ける。表面に絵付け痕あり。	37-3 35-3
4	"	B	4号墓庭	23.5	31.6	47.0			頂部に2個の龍頭、上層側面に2個(本来は4個)の獅子頭を付ける。	37-4 35-4
5	"	—	2号・4号墓庭					父大□ □人入□ 同治五□□□□□□□洗骨□□ □母上原ウシ カマト孫	内外面全体に施釉。	

第23表 蔵骨器：甕形「身」観察一覧

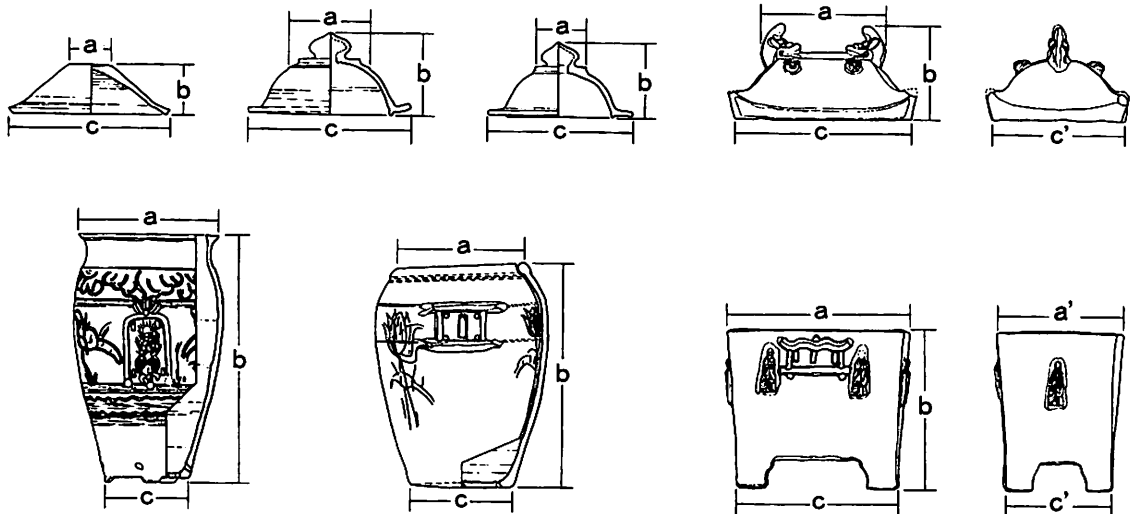
No	形	分類	出土地点	法 量 (cm)					銘 書	文 様 構 成	正面区画(底)の状況		挿図 図版	窯印 挿図
				a	a'	b	c	c'			穴 数	上部の形状		
1	甕	IA	4号墓庭	29.5		49.5	23.7		沈線(圈線)、貼付け(正面区画線)	長方形(1) 円形(2)	直線	33-1 31-1	42-2	
2	"	"	"	11.0		49.5	24.5		"	楕円(3)	"	33-2 31-2		
3	"	"	"	28.5		49.5	20.5		"	長方形(1) 円形(2)	"		42-3	
4	"	IB	1号墓庭	24.4		51.7	20.8		"	長方形(3)	"	33-3 31-3		
5	"	"	4号墓庭	25.0		46.0	20.0		"	長方形(1)	曲線	34-1 32-1		
6	"	"	"	28.0		56.0	22.0		"	長方形(1) 円形(4)	直線			
7	"	"	"	30.0		52.0	22.0		"	不明	不明			
8	"	IC	"	26.3		52.9	21.6		沈線(圈線・蓮華文?) 貼付け(正面区画線)	長方形(1) 円形(4)	直線	33-4 31-4		
9	"	"	"	33.5		64.5	27.0		沈線(圈線)、貼付け(正面区画線)	長方形(1) 円形(2)	曲線	34-2 32-2	42-7	
10	"	"	"	21.7		34.8	17.0		"	長方形(1)	"			
11	"	"	"	28.0					沈線(圈線・葉状文・蓮華文)	不明	不明			
12	"	"	"	28.2		53.2	23.8		沈線(圈線)、貼付け(正面区画線)	長方形(1) 円形(2)	直線		42-6	
13	"	"	"	29.3		57.5	22.0		"	長方形(2?)	"		42-5	
14	"	"	2号墓庭	31.0					沈線(圈線・唐草文?)、貼付け(正面区画線)	不明	"		42-4	
15	"	IIA	4号墓庭	30.8		52.0	26.5		沈線(圈線・波状文)、貼付け(圈線・縦線・蓮華文・仏像2体・正面区画線)	長方形(1) 円形(4)	屋根型	35-1 33-1		
16	"	"	"	29.3		55.6	21.7		沈線(圈線・廻文・葉状文・波状文)、貼付け(正面区画線・丸文)沈線+貼付け(蓮華文)	長方形(3)	曲線	35-2 33-2		
17	"	"	"	26.2		51.3	21.5		沈線(圈線・唐草文?)、貼付け(圈線・蓮華文・花卉文・仏像2体・正面区画線)	"	屋根型			
18	"	"	"	26.6		53.3	23.0		沈線(圈線・波状文)、貼付け(圈線・蓮華文・仏像2体・正面区画線)	長方形(1) 円形(2)	曲線			
19	"	"	"	33.3		65.0	26.0		沈線(圈線・唐草文?)、貼付け(仏像2体・正面区画線)沈線+貼付け(蓮華文)	長方形(3?)	屋根型			
20	"	"	"	34.0				同治六年	沈線(圈線)	不明	不明			
21	"	"	"	36.0				比嘉親雲上□□□ 乃女子□□□	沈線(圈線・葉状文?)	"	"			
22	"	"	2号墓庭	27.8		54.1	21.1		沈線(圈線)、貼付け(圈線・蓮華文・正面区画線)	長方形(1) 円形(2)	"			
23	"	"	4号墓室内	28.0		52.8	23.5		"	"	曲線			

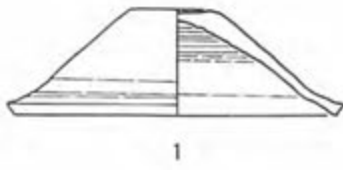
No.	形	分類	出土地点	法 量 (cm)					銘 番	文 様 構 成	正面区画(庇)の状況		挿図 図版	捺印 押図
				a	a'	b	c	c'			穴 数	上部の形状		
24	甕	ⅡB	4号墓室内	36.5		64.1	24.0		光緒八年辛午□□□□洗骨 光緒八□□□骨 (口縁部)	沈線(圈線・葉状文・蓮華文・波状文) 貼付け(正面区画線・丸文)	長方形(3)	曲線	36-1 34-1	
25	〃	〃	4号墓庭	28.7		47.3	21.0			沈線(圈線・葉状文・蓮華文・波状文) 貼付け(圈線・正面区画線)	長方形(3?)	〃		
26	〃	ⅡC	〃	28.0		49.5	17.0			沈線(圈線・葉状文・蓮華文・波状文)貼付け(正面区画線・丸文・花卉文・仏像1体)	長方形(4)	弧状線?	36-2 34-2	
27	〃	〃	〃	15.0						沈線(圈線・波状文?)	不明	不明		
28	〃	〃	〃	27.4						沈線(圈線・葉状文・蓮華文・波状文) 貼付け(正面区画線)	円形(3)	直線		
29	〃	〃	〃	28.0		51.9	20.0			〃	長方形(3)	〃		
30	〃	〃	〃	32.5		63.3	25.8			沈線(圈線・唐草文?)・貼付け(圈線・丸文・正面区画線)	方形(2?)	曲線		
31	〃	〃	〃	35.0						沈線(圈線・鋸歯文・葉状文)	不明	不明		
32	〃	〃	6号墓室内	29.0						沈線(圈線・葉状文)	〃	〃		
33	〃	〃	2号墓庭	34.0						沈線(圈線・葉状文・蓮華文・波状文)	〃	〃		
34	〃	〃	2号・3号墓庭	28.0						沈線(圈線・波状文)	〃	〃		
35	〃	Ⅱ?	4号・3号墓庭				8.0			不明	〃	〃		
36	〃	I?	4号墓室内				19.0							

第24表 蔵骨器：箱形「身」観察一覧

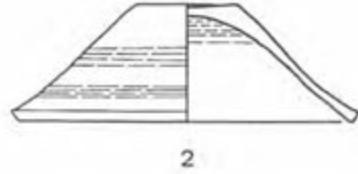
No.	形	分類	出土地点	法 量 (cm)					銘 番	文 様 構 成	正面区画(庇)の状況		挿図 図版
				a	a'	b	c	c'			穴 数	上部の形状	
1	箱	A	4号墓庭	47.7	35.5	45.6	44.5	29.7		貼付け(正面区画線・仏像4体)	長方形(3)	曲線(波状)	38-1 36-1
2	〃	〃	〃	47.5	31.5	42.9	44.2	29.3		〃 絵付け(蓮華文?)	〃	〃	39-1 37-1
3	〃	B	〃	48.0	34.3	41.4	44.6	29.2		貼付け(正面区画線・仏像4体)	〃	曲線?	38-2 36-2
4	〃	〃	〃	47.0	34.2	39.7	46.3	29.0		〃 絵付け(蓮華文? 仏具瓶?)	長方形(1)円 円形(4)	曲線	39-2 37-2

凡 例：法量の記号については下記のとおりである。





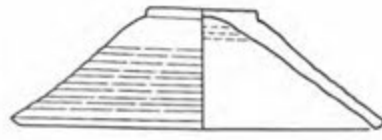
1



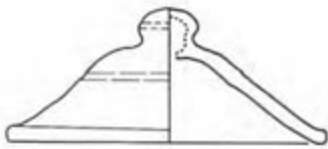
2



3



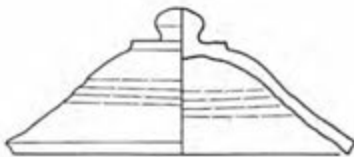
4



5



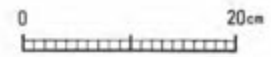
|



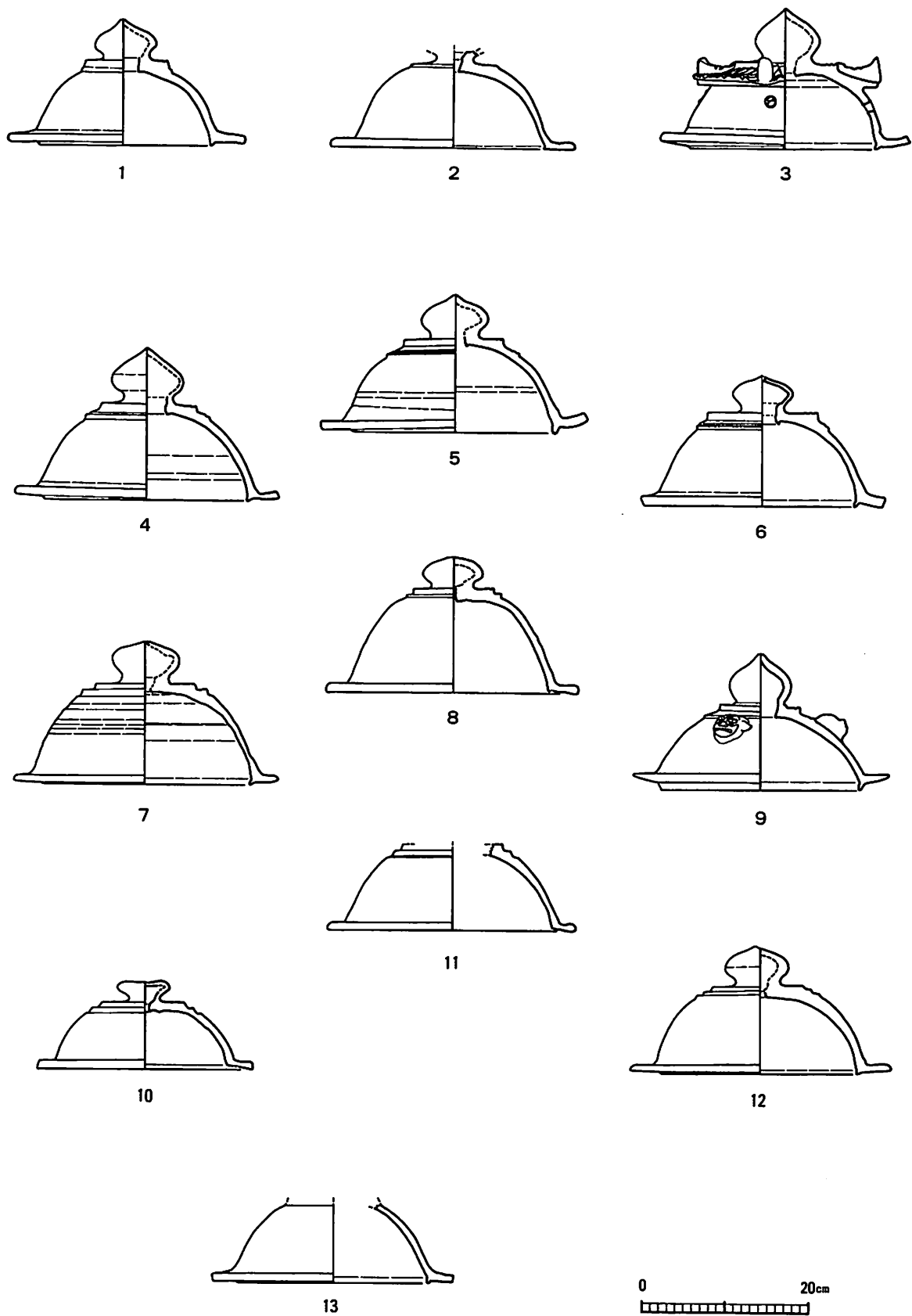
6



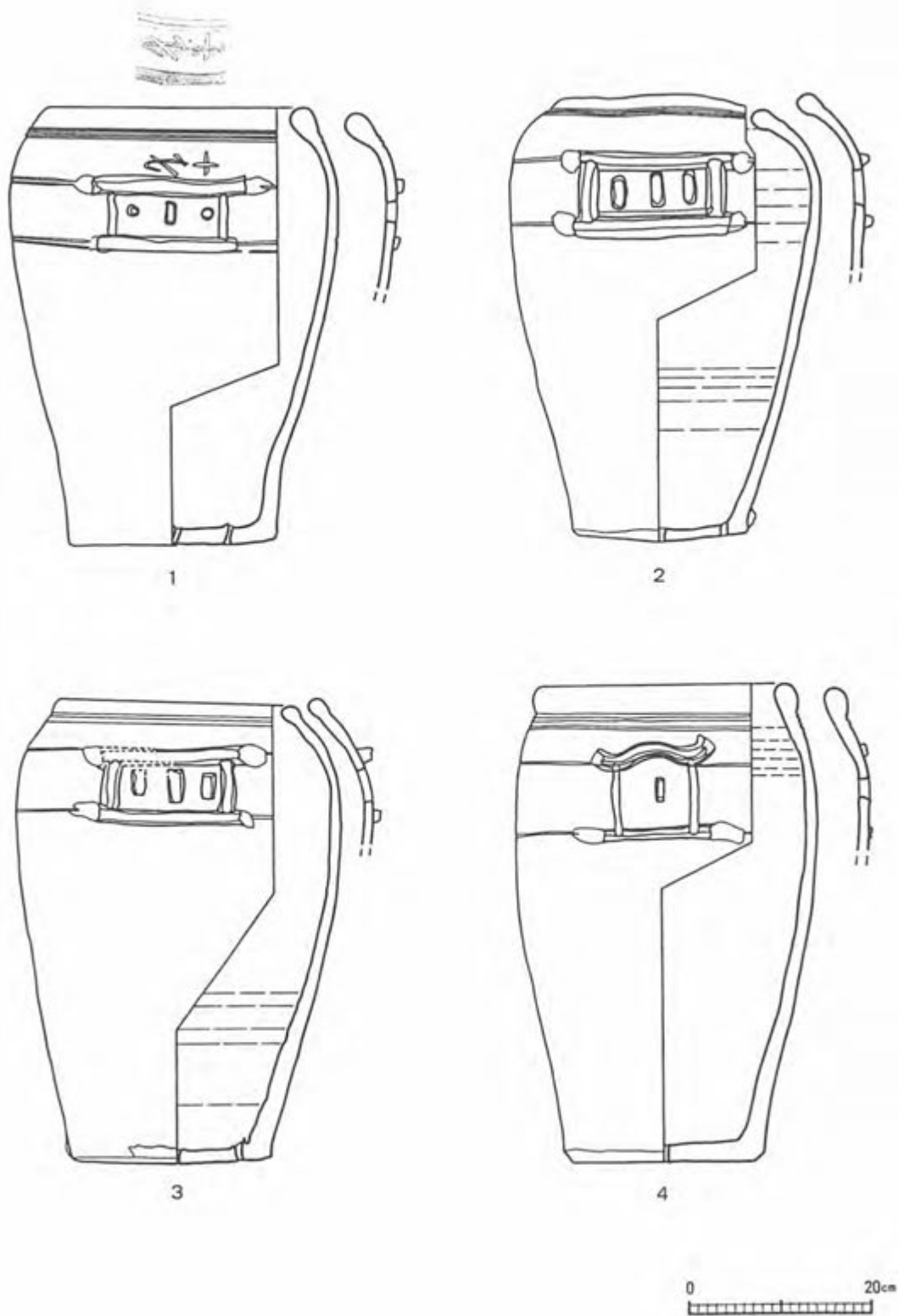
7



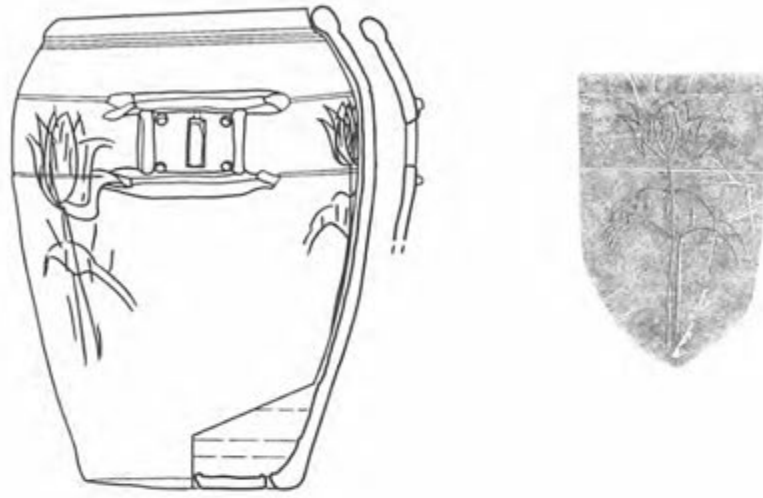
第31圖(PL. 29) 藏骨器：甕形「蓋」第I群(A類1·2, B類3·4, C類5, D類6·7)



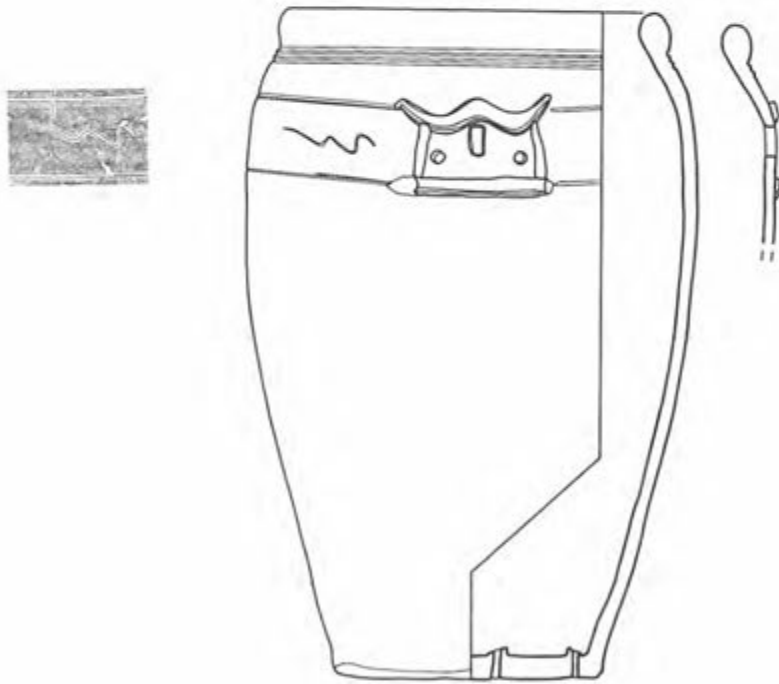
第32図(PL. 30) 藏骨器：甕形「蓋」第Ⅱ群(A類1~3, B類4~11, C類12, 不明13)



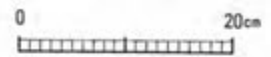
第33図(PL. 31) 蔵骨器：甕形「身」第I群(A類1・2, B類3, C類4)



1



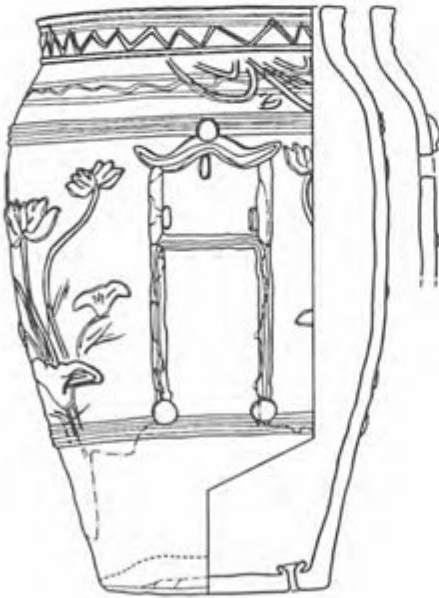
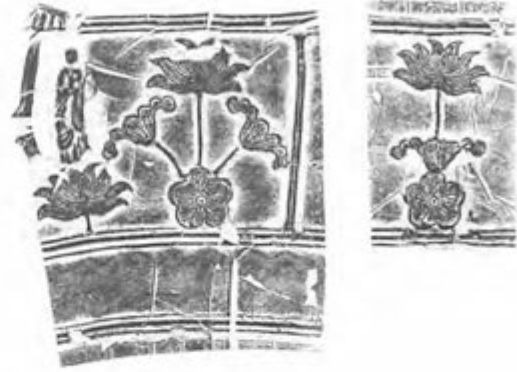
2



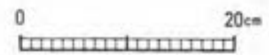
第34図(PL. 32) 蔵骨器：甕形「身」第I群(B類1, C類2)



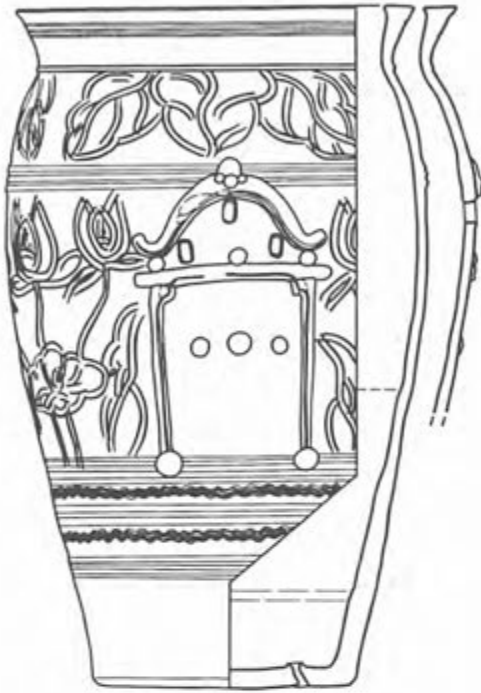
1



2



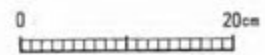
第35図(PL. 33) 藏骨器：甕形「身」第Ⅱ群(A類1・2)



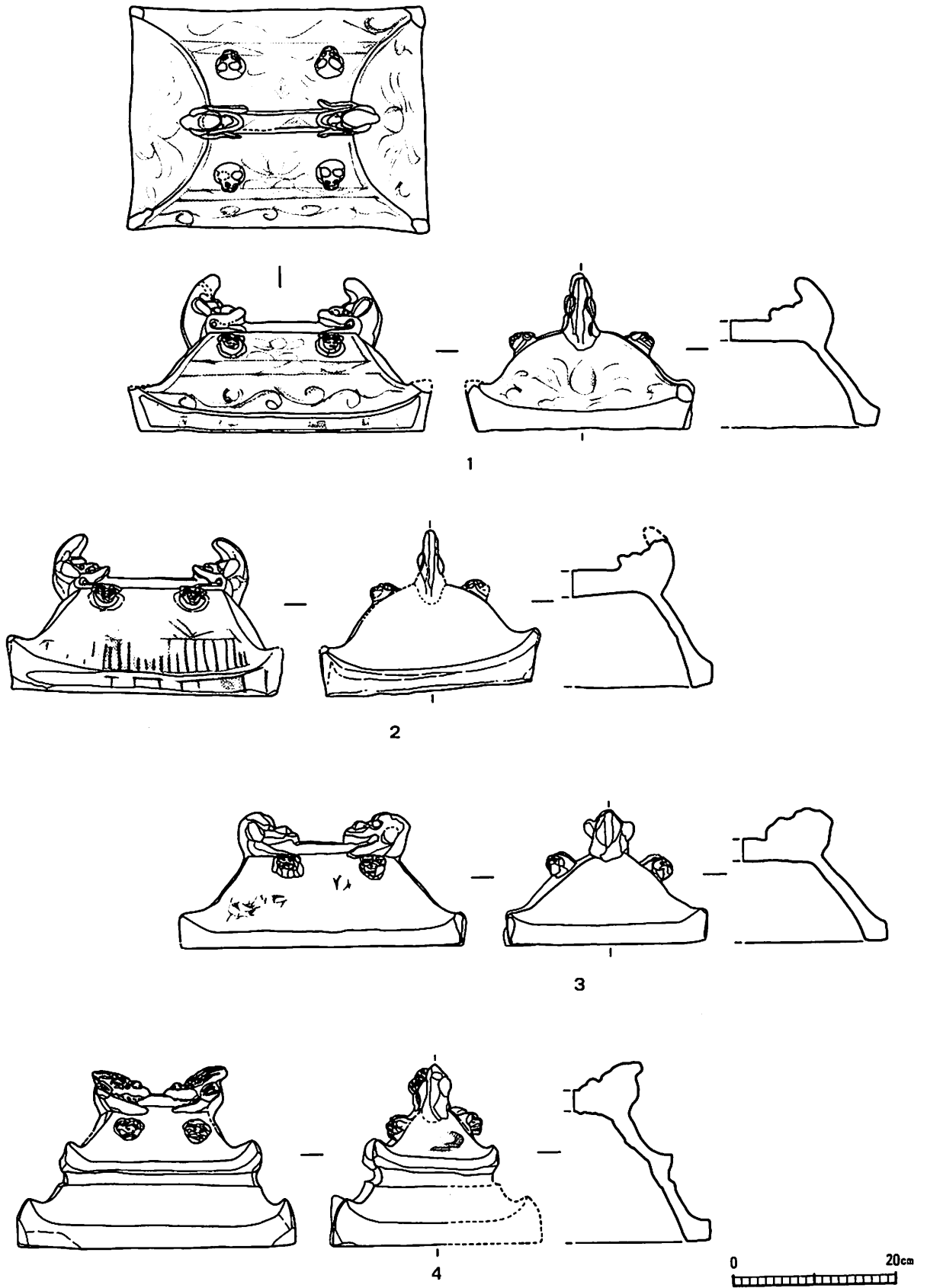
1



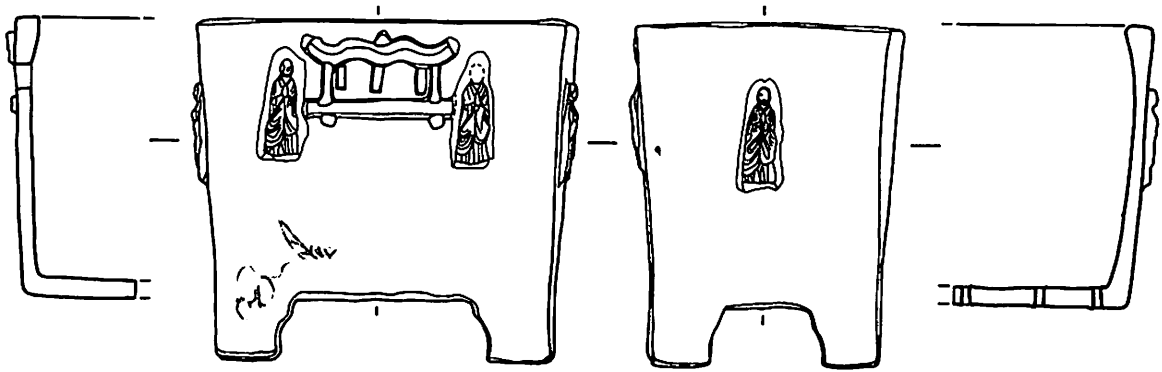
2



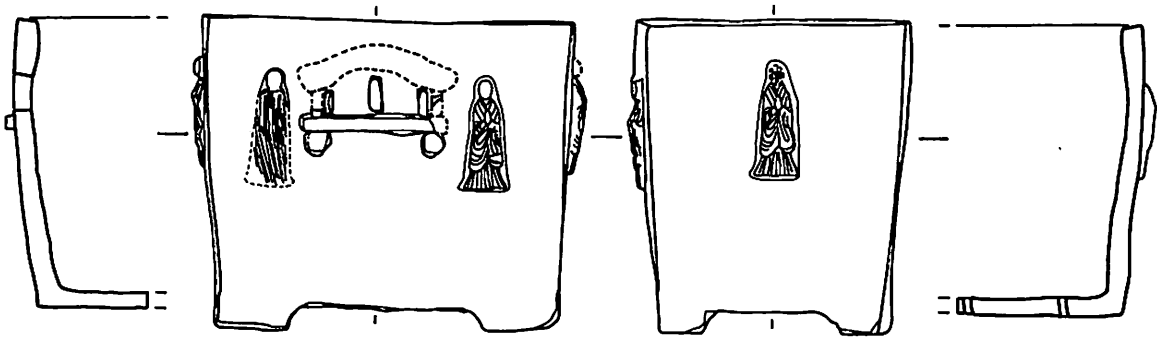
第36図(PL. 34) 藏骨器：甕形「身」第Ⅱ群(B類1, C類2)



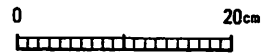
第37圖(PL. 35) 藏骨器：箱形「蓋」(A類1~3, B類4)



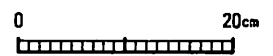
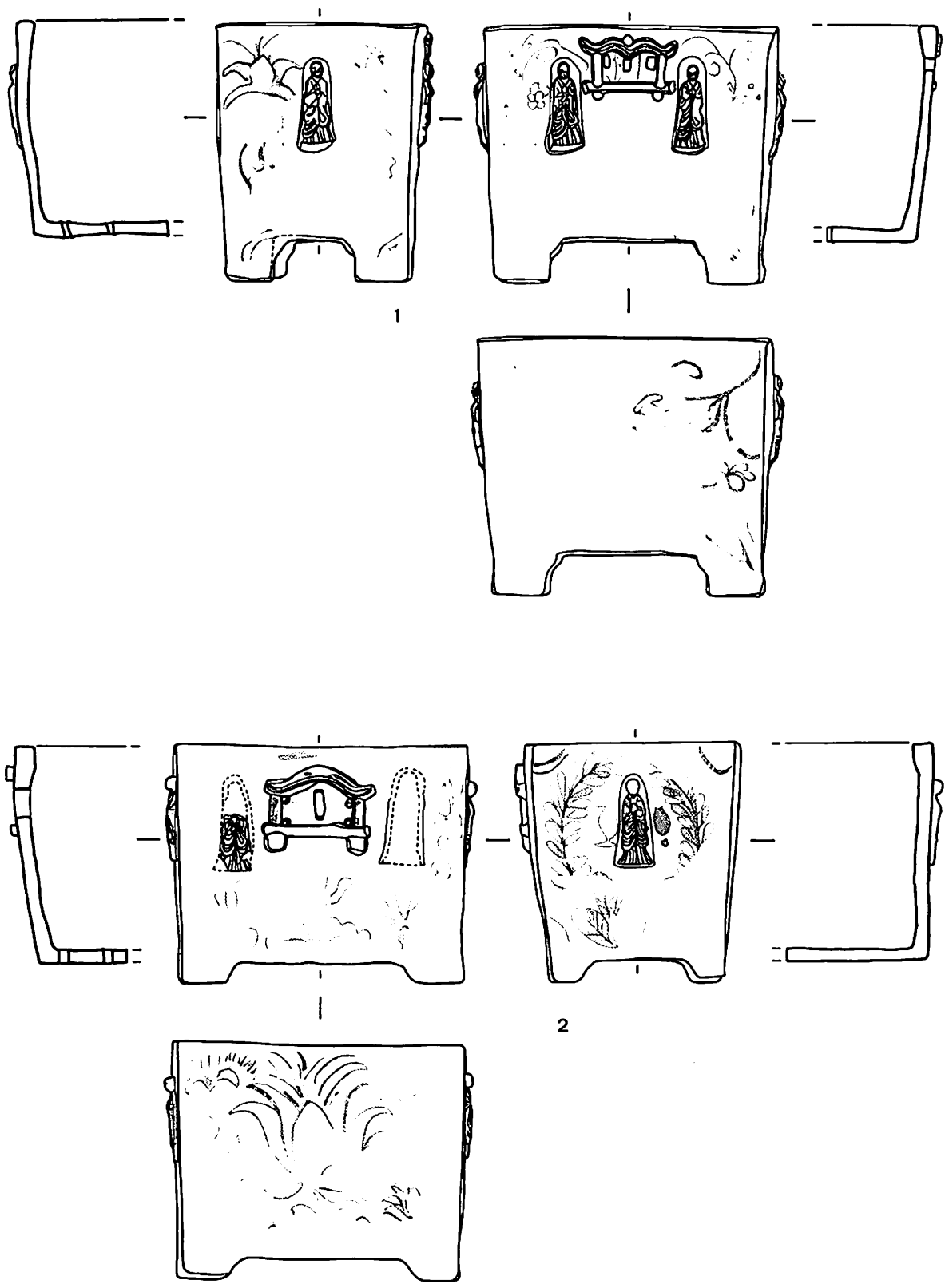
1



2



第38図(PL. 36) 藏骨器：箱形「身」(A類1, B類2)



第39図(PL. 37) 蔵骨器：箱形「身」(A類1, B類2)

D. 転用蔵骨器 (第40・41図: P L. 38・39)

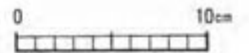
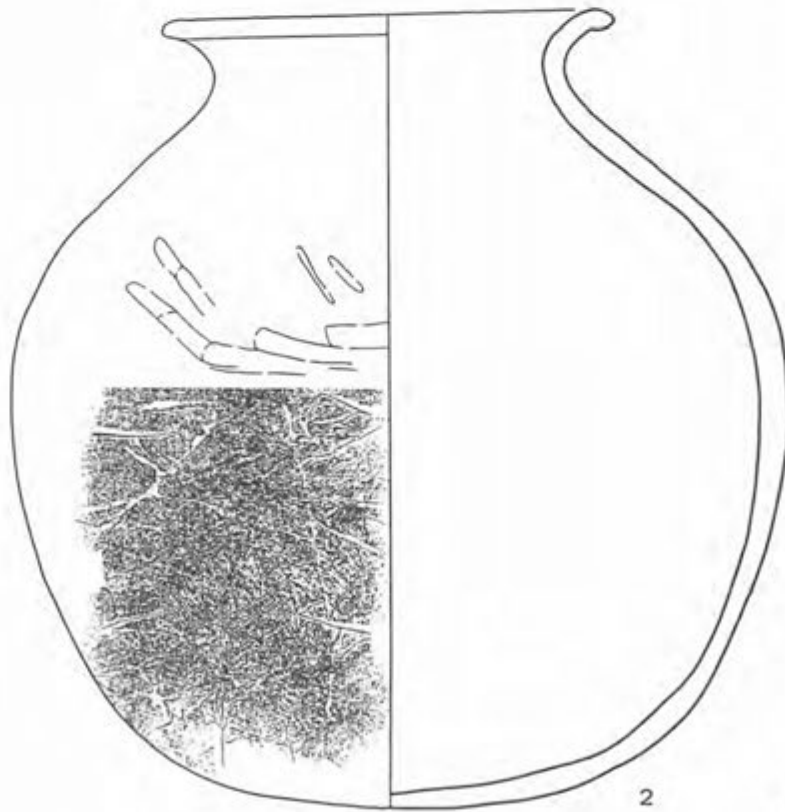
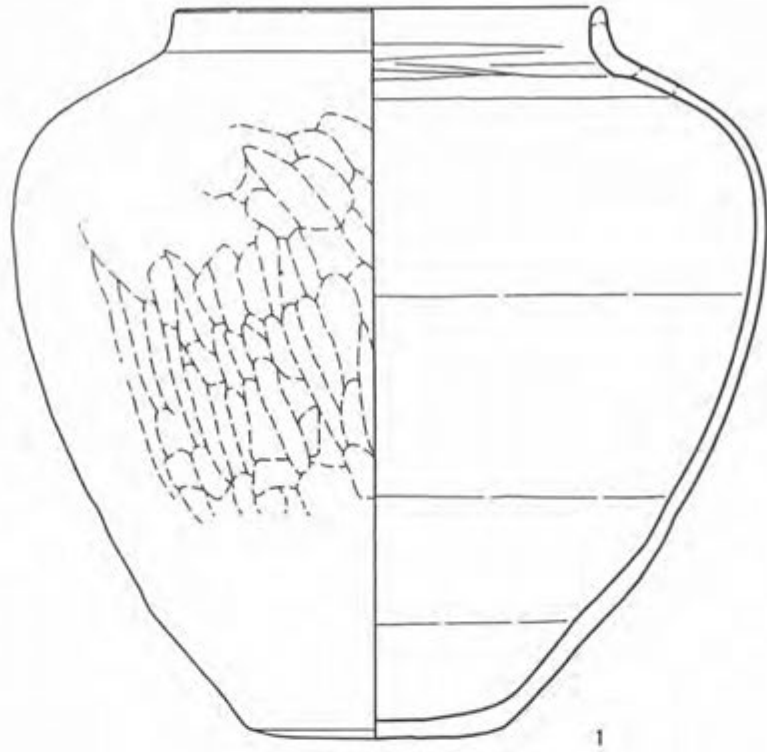
本来の用途から蔵骨器へ転用して利用した壺や甕である。出土総数は10個、このうち5点を挿図と観察一覧(第25表)で示し、他は詳細のみを観察一覧(同表)に示した。

第40図1は短頸で肩部の張る平底の土器壺である。本品は住屋遺跡・城間古墓群・ヒヤジョー毛遺跡出土の資料と類似している。2は口縁部が外反する丸平底の土器壺である。

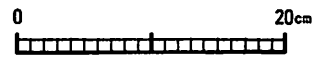
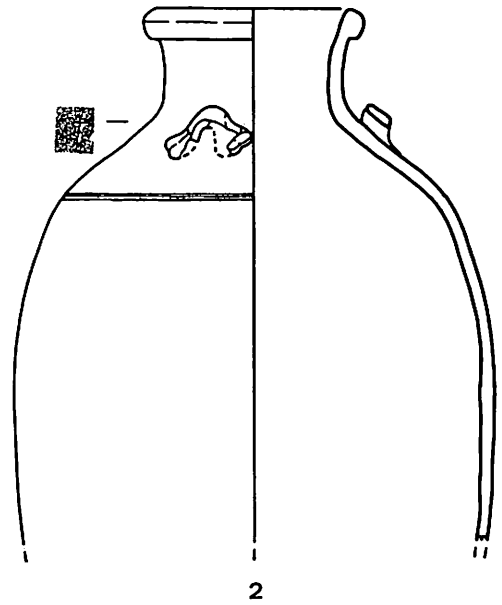
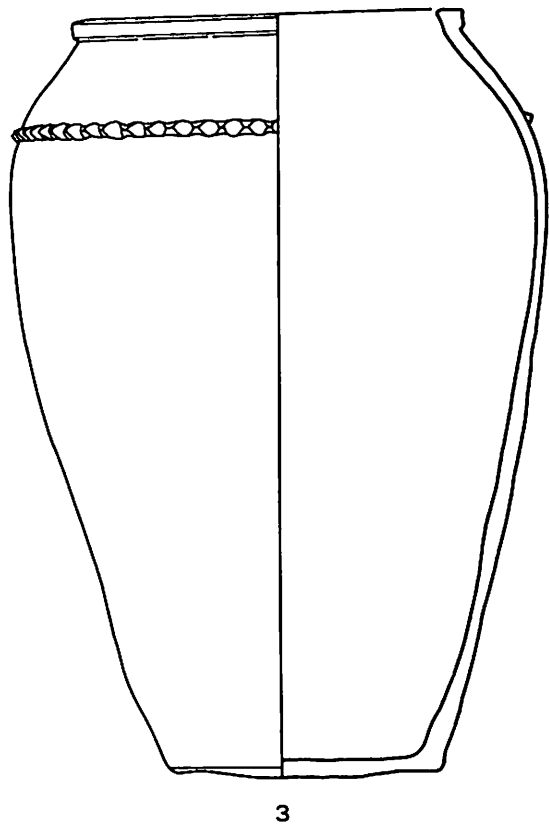
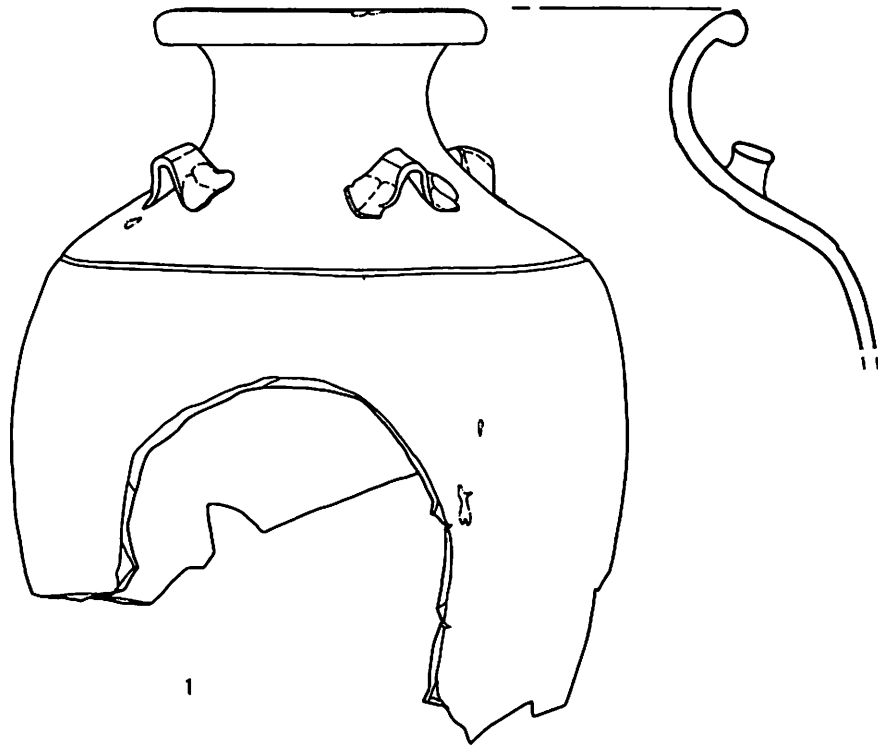
第41図1は口縁部が玉縁状に肥厚し大きく外反する四耳壺である。納骨するために胴部が円形に打ち欠かれている。2は口縁部が玉縁状に肥厚しやや外反する三耳壺である。3は口縁部が方形に肥厚する甕である。

第25表 転用蔵骨器観察一覧

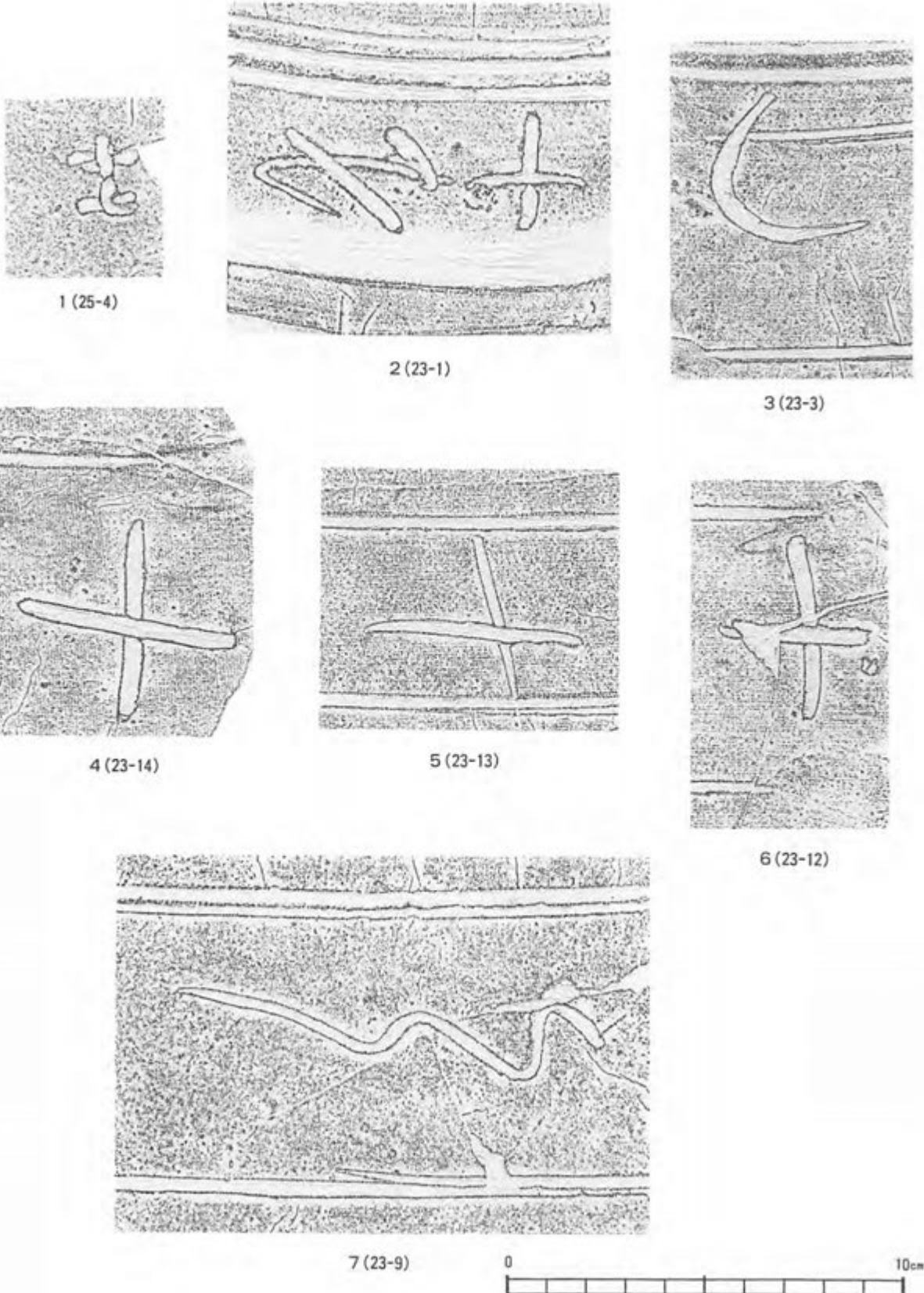
No	形	出土地点	法 量 (cm)					観 察 事 項	挿図 図版	窯印 挿図
			a	a'	b	c	c'			
1	壺	4号墓室内	24.0		39.4	13.8		土器壺。口唇断面が舌状。頸部断面が肥厚する。平底で底部から胴部へ外傾しながら立ち上がり肩部から張る。内面は淡橙色、外面は黒色を呈す。外表面が部分的にアバタ状で、篋状工具による調整痕がみられる。素地に白色粒子・赤色粒子・黒色粒子多数含む。	40-1 38-1	
2	壺	4号墓庭	24.0					土器壺。口縁部が大きく外反。丸平底で胴部はほぼ円形。肩部はナデ屑状。 1に比べ器壁が厚い。内外面共に赤褐色素地に多量の白色粗粒子を含む。外表面に櫛目状の調整痕が部分的にみられる。	40-2 38-2	
3	壺	"	24.0					四耳壺。口縁部が玉縁状に肥厚し大きく外反する。頸部から肩部へなだらかに移行し、胴部上位がやや張る。肩部に沈線による1本の圏線を廻らす。焼成は良好。外面は茶褐色で光沢を帯びる。内面に篋状工具による明瞭な調整痕が多数。	41-1 39-1	
4	壺	3号・4号墓庭	16.0					三耳壺。口縁部が玉縁状に肥厚し、やや外反する。頸部から肩部へなだらかに移行する。胴部はほとんどストレートに立ち上がる。肩部に沈線による圏線が2本廻る。焼成は良好。外面は口縁から胴部上位が黒色、下位は茶褐色で光沢を帯びる。内外面共に丁寧な器面調整が施されている。	41-2 39-2	42-1
5	甕	4号墓室内	27.1		57.9	20.0		ほぼ完形品である。口縁部が方形に肥厚する。口唇は平坦。底部から外へ開きながら胴部へ立ち上がり、肩部で張り、口縁部で窄まる器形を呈す。 肩部に貼付けの絡縄状凸帯を廻らす。 焼成良好。外面は淡褐色でやや光沢を帯びる。	41-3 39-3	
6	壺	4号墓庭				23.0		底部。胴部へほぼストレートに立ち上がる器形。焼成良好。外表面茶褐色で光沢を帯びる。内面に輪積み痕。		
7	壺	"	20.0			19.0		底部。胴部へやや丸みを帯びて立ち上がる器形。内外面共に橙色で光沢なし。 内面にロクロ成形痕。		
8	壺	"				23.0		底部。胴部へほぼストレートに立ち上がる器形。焼成良好。外面茶褐色で光沢を帯びる。内面に篋状工具による器面調整痕。		
9	甕	"	36.5					口縁部が三角形に大きく肥厚する。口唇は平坦。口縁・頸部に沈線による圏線。肩部に沈線による圏線と波状文、貼付けによる凸帯を廻らし、丸文が1個貼付く。焼成は良好で外面は暗褐色でやや光沢を帯びる。外面に漆喰が弧状に付着。		
10	甕	7号北側集磔	25.0					口縁部を逆「L」字状に折り曲げ方形に肥厚させる。口唇は平坦。頸部に沈線による2本の圏線、肩部に貼付けの絡縄状凸帯を廻らす。焼成は良好で全体に光沢のない暗褐色を呈す。		



第40図(PL. 38) 転用蔵骨器：土器壺



第41図(PL. 39) 転用蔵骨器：四耳壺(1)・三耳壺(2)・甕(3)



第42図 蔵骨器窠印 ()内の数字は観察一覧表番号と各No.に対応する。

E. 金属製品

金属製品は銭貨・煙管・かんざし・指輪が得られている。

1. 銭貨 (第43図：P L. 40)

保存状態の良好な資料7点の拓影を掲げた。文字の判読できるものは寛永通寶4点と五銭1点である。各々の詳細は観察一覧(第26表)に示した。

第26表 金属製品：銭貨観察一覧

単位 (cm)

挿図番号 図版番号	出土地点	銭名	径	方孔長さ (縦・横)	書体	読	備考
第43図1 PL40-1	7号墓庭 入口石積内	寛永通寶	2.20	0.7・0.7	楷書	対	表裏面共に研磨される。
" 2 " 2	"	"	2.30	0.6・0.6	"	"	寶の字摩滅。
" 3 " 3	"	"	2.45	"・"	"	"	
" 4 " 4	表 採	"	2.50	"・"	"	"	裏面上に「文」の字。
" 5 " 5	4号墓庭	無文銭	1.90	0.8・0.8	—	—	
" 6 " 6	"	"	2.00	0.7・0.6	—	—	
" 7 " 7	表 採	五 銭	1.90	0.4(円孔)	楷書	—	表に五銭の文字。菊花文。 裏に大日本、大正十一年の文字。花卉文。

2. 指輪 (第44図1～3：P L. 41)

3点得られた。いずれも銅製で厚さが1mmに満たないものである。各々の詳細は観察一覧(第27表)に示した。

第27表 金属製品：指輪観察一覧

挿図番号 図版番号	出土地点	径 (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	備考
第44図1 PL41-1	4号墓庭	1.90	0.35	0.9	全体に錆が著しい。
" 2 " 2	"	1.75	0.40	0.7	"
" 3 " 3	"	1.80	"	0.8	外表面に斜位の刻み。

3. かんざし (第44図4：P L. 41)

下半部の欠損した資料が1点得られた。銅製である。長さ3.5cm、頭部最大幅2.1cm、竿上部径0.4cm・下部径0.2cmである。頭部に装飾として六葉の花弁状の薄い銅板が取り付け。また銅板中央に直径約1.2cmの赤褐色に錆びた範囲が見られ、銅板上にさらに別の装飾が付いていた可能性も考えられる。竿は上部1.7cmまでは六角形、それ以降は円形の断面形を呈する。7号墓庭より出土。



1



2



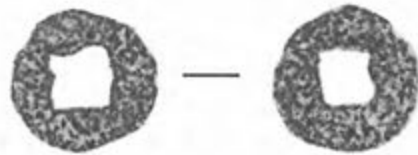
3



4



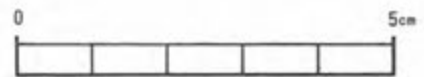
5



6



7



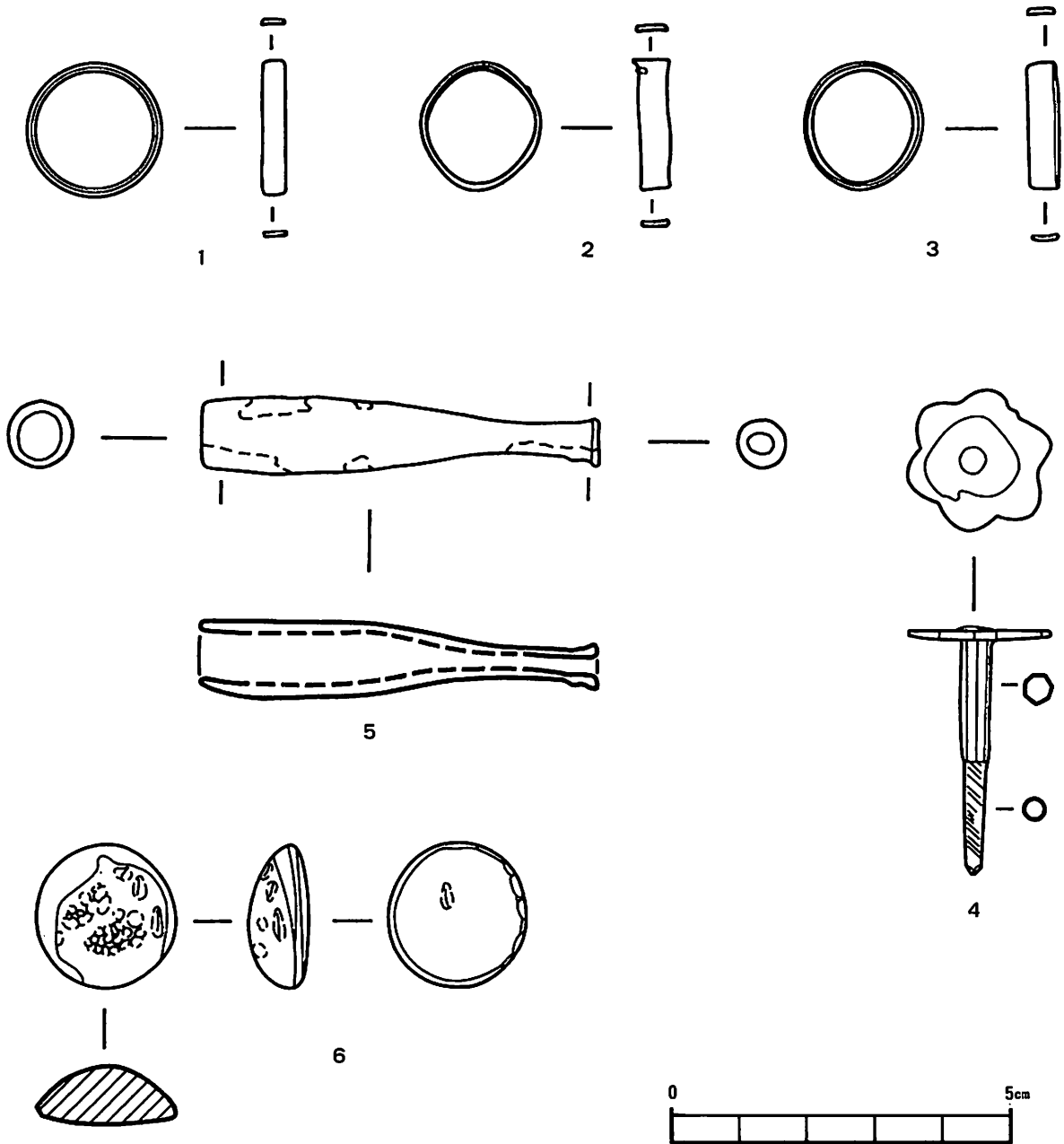
第43図(PL. 40) 金属製品：銭貨

4. 煙管 (第44図5: P L. 41)

銅製の吸口が1点得られた。長さ5.8cm、最大径1.1cm・最小径0.7cm、重量12.5gである。ラウを挿入する肩部がやや膨らみ吸口部に向け細く窄む。吸口部はやや開き気味で端部周縁が細く帯状に盛り上がる。4号墓庭より出土。

F. ガラス製品 (第44図6: P L. 41)

透明のガラス製で断面半月状を呈する。曲面部の表面はあばた状で周縁が淡褐色に曇りくすんでいる。直径2.1cm、厚さ0.9cm、重量4.4gである。7号墓庭より出土。



第44図(PL. 41) 金属製品：指輪(1~3)・かんざし(4)・煙管(5)
ガラス製品：用途不明(6)

第3節 出土人骨

本遺跡の人骨は洞穴地区で大腿骨が1点得られており、同骨以外はすべて古墓群地区より出土したものである。総数は細片が多いため現在のところその実数は不明である。本節では今回出土した人骨の中から比較的保存状態が良好なものを、琉球大学医学部の土肥直美助教授に鑑定を依頼し、その結果を表(第28・29表)としてまとめて頂いた。

第28表 出土人骨構成一覧

出土地点	成人男性	成人女性	不明成人	未成人	幼児	乳児	計
洞窟内左側斜面	1						1
1号墓室内		1					1
4号墓室内			1	1			2
4号墓庭 蔵骨器No2	1	1					2
4号墓庭 蔵骨器No8			2		1	1	4
4号墓庭 蔵骨器No3			1				1
4号墓庭	4	6			1	2	13
計	6	8	4	1	2	3	24

第29表 出土人骨鑑定一覧

出土地点	鑑定の概略	所見	備考
洞窟内左側斜面	大腿骨(左)	筋付着部の発達良好	1体分(男性?)
1号墓室内	頭蓋骨(下顎骨は無し)のみ	眉弓、乳棘突起の発達が弱い	1体分(女性)
4号墓室内	下顎骨片(右側) 永久歯(上顎I1、I2、P1、P2、下顎P2、M2、M3) 椎骨片、肩甲骨片、膝蓋(右)、腓骨(右) 大腿骨遠位骨端部(右)、脛骨近位骨端部(右) 指骨、趾骨	歯槽の閉鎖も見られる 上顎P1が2本ずつ、左I2が2本 骨端の解離したものあり	少なくとも2体分 (内未成人1体)
4号墓庭 蔵骨器No2	男生と推定されるもの: 頭蓋骨片、上腕骨(左右)、橈骨(左右) 尺骨(左)、大腿骨(左右)、脛骨片 女生と推定されるもの: 上腕骨、橈骨、大腿骨(左右) 性別不明の骨片: 頭蓋骨片、下顎骨片、鎖骨片、第1肋骨片 椎体、膝蓋骨1、距骨、四肢骨片	乳棘突起の発達良好 筋付着部の発達良好 筋付着部の発達不良	成人2体分(男女)
4号墓庭 蔵骨器No8	未萌出乳歯(C、上顎m1、m2、下顎m2) 未萌出永久歯(C、上顎M2、下顎M1、M2) 永久歯(上顎M1、M2、下顎M1) 肋骨片(少量)、肩甲骨片(少量) 四肢骨片(少量) 椎体(胸椎の下の方か腰椎)(数個)	上顎M1の咬耗は他より著しい (Brocaの2~3度)	乳児(誕生~6ヶ月) 幼児(3~5才) 成人2体分(老年、成年)
4号墓庭 蔵骨器No3	頭蓋骨片、上腕骨片、大腿骨片 指趾骨、足根骨	保存状態はよくない	成人ほぼ一体分
4号墓庭	頭蓋骨 前頭部 側頭骨(i) 5 側頭骨(左) 4 下顎骨片5(歯槽の吸収に差がある) 顔面破片 永久歯(I1、I2、P1、P2、M1、M2、M3) 胸椎、腰椎(つぶれた椎体あり(老年?)) 鎖骨(i) 2、鎖骨(左) 3 肋骨片(少量)、肩甲骨片、胸骨片 上腕骨(i) 8、(左) 6、(不明) 6 尺骨(i) 8、(左) 4、(不明) 1 橈骨(i) 4、(左) 3、(不明) 2 舟状骨5、月状骨8、小菱骨3 大菱骨5、有鈎骨5 中手骨13、基節骨12、中節骨11、末節骨2 寛骨 大腿骨(右) 8 大腿骨(左) 10 大腿骨(不明) 2 膝蓋(右) 2、膝蓋(左) 4 脛骨(右) 7 脛骨(左) 7 脛骨(不明) 2 腓骨6体以上、距骨(右) 6、(左) 5、(不明) 1 踵骨(右) 2、舟状骨(左) 1、(不明) 1 外側楔状骨3、内側楔状骨(右) 1、(不明) 2 立方骨(左) 2、骨(不明) 1 中足骨29、基節骨9、末節骨3	男性1、女性3 男性1、女性2 男性1、女性2 老年1、熟年3 約4体分 数個体分 咬耗の程度に違いが見られる 少なくとも8体 少なくとも8体 男性1、女性2 男性3、女性5 男性4、女性6 男性3~4、女性4~3 男性3~4、女性4~3	少なくとも成人10体分 (男性4体、女性6体)
	未萌出永久歯(下顎C、M1、M2) 肩甲骨片(鳥口突起)、四肢骨片、指骨	4~5才	幼児1体分
	未萌出乳歯(下顎c、m2、下顎i2、c、m1) 肋骨片、上腕骨(左右)、尺骨(左) 坐骨1、大腿骨(左)、脛骨(左右)	下顎第1臼歯が3本(6ヶ月前後)	幼児2体分

※蔵骨器Noは第23表蔵骨器：変形「身」観察一覧のNoと対応する。

第Ⅵ章 まとめ

本章では、これまで述べてきた発掘調査の成果をいま一度整理しまとめとする。

ガジャンピラ丘陵遺跡は第Ⅰ章で述べたように1974年に発見された遺跡で、1982年には国道331号線の改築工事に伴い丘陵北端部（第3図・赤点線）の調査が実施されその成果が報告されている^(註23)。今回は前述した調査範囲より南東約130mの地点に位置する洞穴の上部と内部（以下洞穴地区と称す）、洞穴の北西斜面に位置する7基の古墓（以下古墓群地区と称す）の調査を実施した。なお、洞穴地区については関係機関と調整を行い調査終了後も現状のまま残し、広く学習の場として活用できるようにガジャンピラ公園内に保存することができた。

さて、今回の調査は第Ⅳ章で述べたように、一遺跡をそれぞれ洞穴地区と古墓群地区の二地区に分けて実施したことから、まとめは各々の地区で整理して述べる。

洞穴地区

洞穴地区は上部と内部の調査を行った。本地区一帯は戦中から戦後にかけて大規模な造成により地表面が削平されており、上部の包含層は全体に薄く辛うじて岩盤の凹地や割れ目に堆積した状況であった。なお、本地区では上部・内部共に遺構として明確なものは検出されていない。

上部は地山を含め4枚の層序からなる。この内第Ⅰ・Ⅱ層は客土と著しく攪乱を受けた近・現代の遺物を混入する層からなり、僅かにN-21~24グリッドの一部凹地に土器と貝類遺殻のみを包含した第Ⅲ層が認められた。しかし本層より得られた土器は時期の異なるものが混在した状態で、これらは沖縄新石器時代前Ⅴ期に相当する宇佐浜式土器やくびれ平底に代表される沖縄新石器時代後期に相当するものであった。また、両者の出土量には大きな差は認められなかった。（第3表）

内部では左側斜面部で3枚、中央平坦部（A~Cトレンチ）で地山を含め6枚の層序を確認した。包含層は第Ⅰ~Ⅲ層までで、両部の各包含層は互に対応するものである。出土した土器の量は上部に比べ圧倒的に多く、出土総数の約80%近くを占めている。さらに有文土器の殆どが内部において出土している。第Ⅰ層では土器とともに沖縄産陶器が混入して得られている。第Ⅱ・Ⅲ層では共に多数の土器・貝類遺殻と数点の石器が得られている。

内部から出土した遺物の状況を、第Ⅰ~Ⅲ層が比較的良好に確認できる左側斜面部と中央平坦部（Aトレンチ）で層序別に示してみた。（第41図）これによると、土器は第Ⅰ~Ⅲ層全体に亘って時期の異なるものが混在して得られている。これは攪乱を受けた各層が順次内部に流れ込み堆積したことを示していると同時に、各層での単一文化層は形成されていないものと解された。この点で内部における各層中および各層間での明確な時間軸の把握は困難であった。ただ、前述したように第Ⅰ層については土器と共に沖縄産陶器が共伴し出土していることから、同層と第Ⅱ層以下では内部に堆積した時期に明らかな時間差があるものと考えられる。また、第Ⅰ~Ⅲ層中における沖縄新石器時代前Ⅳ~Ⅴ期と同後期に相当する土器の出土量の割合をみると（第3表）第Ⅰ層では両者に大き

な差がないのに対し、第Ⅱ層では約68%、第Ⅲ層に至っては約77%が前者で占められている。特に第Ⅲ層に関してはその傾向が顕著に認められ、さらにこれらの土器は型式でみると室川式土器が量的に最も多く得られている。

以上の結果から、本地区では上部・内部共に単一の文化層からなるプライマリーな包含層は残存せず、二次堆積によるものと解釈される。このため、先にも述べたように本地区の明確な時間軸を層序によって把握することは困難であったが、得られた資料から少なくとも本地区の上限として捉えることのできる時期は沖縄新石器時代前Ⅳ期末と考えられる。本地区の洞穴は、1981年に実施された市内遺跡詳細分布調査で沖縄新石器時代後期の土器が採集されていたが、今回の調査で時期を若干遡る新たな資料が得られた点で注目される。

ところで、本地区では多数の土器と共に貝製品や骨製品(第18図)も得られている。この内貝製品(同図1)と骨製品(同図3)の資料は渡喜仁浜原貝塚の出土資料と類似している。特に後者は大きさがやや異なるものの装飾加工の状況は殆ど同じである。同貝塚の資料は網針(アグイ)又は刺突的要素をもつ道具の先端部として報告されている。本地区の資料が類似する形状のものであれば頭部の部分に当たる可能性が考えられると同時に、本骨製品の全形を推定する点で興味深い資料と思われる。今後の資料の追加を待ちたい。

古墓群地区

第2節でも述べたように本地区では7基の古墓が検出された。この内、天井部が崩落し墓室の観察ができなかった7号墓を除く残る6基は、墓室の構築方法から見て掘り込み墓であった。ただ、1号墓と7号墓については外観の形態からすると平葺墓と亀甲墓に分類されるものである。

本地区の墓は構造・規模共に様々である。これらを各部分で比較したものを一覧表にまとめてみた。(第15表)この中で興味深い点は墓口の規模である。民俗事例では造墓の際に「唐定規」と称される特殊な定規が使用され、特に墓口の幅に対しては同定規を使用した一定の寸法、所謂墓口の幅として理想的な寸法が意識されていたと言われている。本地区5基の墓口の計測値を見ると、奥幅と高さについては大小ばらつきがあるのに対し横幅はすべて60cm内に収まる傾向が認められる。これらの値が「唐定規」を使用したものか、また理想とする墓口の幅と同じものであるか明確ではない。ただ、今回対象とした5基の墓口では奥幅や高さとは別に横幅については一定の寸法を意識した可能性は考えられる。今後は他の古墓群における計測データの蓄積・検討を行い、さらに定規に関しては地域によって若干異なるものの存在が述べられており、これらを含めた使用例の検討を行うことが必要である。

今回の調査で、4号墓の墓室床面に枝サンゴ片と石灰岩小礫を敷き詰めた状況が確認されている。このような状況は本市では、安里神無良川古墓群・天久西原古墓群・ナイクブ古墓群においても数基検出されているようであるが、他の地域での類例は寡聞或は未報告のためか不明である。何れにしても、本地区では4号墓のみに認められる特異な事例である。これは本墓の墓室及び墓庭の下層が吸水性の悪いシルト質泥岩層で形成されており、調査期間中も雨天後は他の墓周辺の乾きが速い

のに対し、本墓周辺は暫く水が染み出てくる状況にあることから特に墓室内部については防湿・排水を目的としてこれらを敷き詰めた可能性が考えられる。一方、サンゴを墓に使用することについて時代は異なるが、読谷村木綿原遺跡の箱式石棺中にサンゴジャリを敷き詰めた例や九州の古墳で石棺床にサンゴの細片を敷く例から、これらに何らかの呪力的な要素が含まれている可能性があるのではないかとの考え方がある^(RE30)。本地区の4号墓もサンゴを敷き詰める点では類似しており、これを前者と直接結びつけることは現時点では困難であるが、今後時期の差異含め本墓のような類例資料の増加を待ってより詳細な検討が必要と思われる。

出土遺物で興味深い資料として、専用の蔵骨器とは別に他の容器を転用して使用したものが得られている。これらは、土器壺や陶製の口径が大きな甕、胴部を楕円形状に打ち欠いた壺などである。この内土器壺が2点得られており、1点(第40図1)はこれまで県内の墓から出土している短頸で底部が平底の「宮古式土器」と称される器形の土器壺に類似するものと思われる。一方、残る1点(同図2)は胴部から底部まで全体に丸味のある器形を呈し、口縁部が大きく外反し底部は丸平底の土器壺で前者とは全く器形が異なっている。同資料が出土した例は那覇市では本地区が初めてであり、県内の他の墓から出土している土器壺には現時点で類例品が認められない。ただ、転用品としてではなく本来の用途として、例えば何らかの貯蔵用具として使用されたものであれば墓以外の遺跡から出土している可能性があり、今後これらを含め類例資料の増加を待って検討を行いたい。

転用蔵骨器の出土については、『ヒヤジョー毛遺跡』の報文で「石製や陶製の蔵骨器が出現する前の蔵骨法と考えられる^(RE31)。」と述べられているように、本地区においても同様の蔵骨法が行われていた可能性を示していると考えられる。しかし、今回調査した7基の墓は内・外部共に戦中から戦後にかけて攪乱を受け出土した蔵骨器が原位置を保っていないこと、既に破壊されてしまった多数の墓が7基以外にも本来は周辺一帯に形成されていたと考えられ、これらから移転した可能性も考えられるためその時期や墓の特定に至っては困難である。

今回の調査により出土した蔵骨器の蓋や身には、銘書(方言でミガチ)が確認できるものがある。(第21~23表) これらの中で最も古いものは「乾隆三拾三年」と書かれた年号で、これを本地区における墓の上限とすることはできないまでも、少なくとも18世紀後半以降には墓が使用されていたと考えられる。また、下限については1946(昭和21)年に一帯が米軍に接收されていることから、その後は墓として使用できなかった可能性が考えられる。因みに、蓋の資料で「昭和十九年七月七日洗骨……」の銘書が判読できるものがあり、接收直前までは明らかに使用されていたことが窺える。使用していた人々については判読可能な銘書のみでは情報量が少ないため、現時点では不明である。今後、文献資料の収集・活用、聞き取り調査などにより詳細な検討を行う必要がある。

以上、今回の調査成果について概述したが、ガジャンピラ丘陵遺跡についてはまだ多数の検討されるべき課題が残されている。これらは本遺跡の成果のみで完結されるものではなく、周辺遺跡との関連や他の類似する遺跡との比較検討がなされて初めて語ることのできるものである。今後は考古学における学際的研究はもとより、解剖学・文献史学・民俗学等の関連諸科学との連携にも留意した総合的な検討・研究を行う必要がある。

場所 層	左側斜面		Aトレンチ	
	第Ⅰ群	第Ⅱ群	第Ⅰ群	第Ⅱ群
I 層				
II 層				
III 層				

第45図 洞穴内(左側斜面・Aトレンチ)層序別出土遺物図

- 註1. 上原 静・太田宏好他『那覇市の遺跡—詳細分布調査報告書』那覇市教育委員会 1982
2. 『文化財要覧』沖縄県教育委員会 1974
3. 註1に同じ。
4. 上原 静・太田宏好他『ガジャンピラ丘陵遺跡』那覇市教育委員会 1983
5. 金城治雄「各区域の概況」『那覇市史資料篇第2巻中の7 那覇の民俗』那覇市企画部市史編集室 1979
6. 註1に同じ。
7. 高宮廣衛「那覇市の考古資料」『那覇市史資料篇第1巻1』那覇市企画部市史編集室 1968
8. 註1に同じ。
9. 土器の分類は、高宮廣衛「南島考古雑録(1)」『南島考古』No.11 沖縄考古学会 1991の沖縄諸島の暫定編年を参考にした。
10. 新田重清他『渡喜仁浜原貝塚』今帰仁村教育委員会 1977
11. 註10に同じ。
12. 貝類遺殻の分類は、以下の文献を参考にした。
- 吉良哲明『原色日本貝類図鑑』保育社 1985改訂
 - 波部忠重『続原色日本貝類図鑑』保育社 1984
 - 岡本一志他『沖縄海中生物図鑑』第4・5巻 新星図書出版 1988
 - 白井祥平『原色沖縄海中生物生態図鑑』沖縄教育出版 1983
 - 肥後俊一・後藤芳央『日本及び周辺地域産軟体動物総目録』(株)エル貝類出版局 1993
13. 各墓の主軸の捉え方は、下地安広・照屋 孝・上原 静『チヂフチャー古墓群調査報告書』浦添市教育委員会 1985を参考にした。
14. 平敷令治「墓」『那覇市歴史地図—文化遺産悉皆調査報告書』那覇市教育委員会 1986
15. 島 弘・内間 靖・玉城安明・島袋春美他『壺屋古窯群Ⅰ』那覇市教育委員会 1992
16. 内間 靖『壺屋古窯群Ⅱ』那覇市教育委員会 1995
17. 上江洲 均『沖縄の暮らしと民具』慶友社 1982
18. 註16に同じ。
19. 註16に同じ。
20. 金武正紀他『住屋遺跡(俗称・尻間)発掘調査報告』平良市教育委員会 1983
21. 下地安広・松川 章他『城間古墓群』浦添市教育委員会 1990
22. 金武正紀・城間千栄子『ヒヤジョー毛遺跡』那覇市教育委員会 1994
23. 註4に同じ。
24. 註1に同じ。
25. 註10に同じ。
26. 又吉真三「住」『那覇市史資料篇第2巻中の7 那覇の民俗』那覇市企画部市史編集室 1979
27. 渡邊欣雄『風水気の景観地理学』人文書院 1994
28. 註26に同じ。
29. 仲宗根 啓・古塚達朗『安里神無良川古墓群』那覇市教育委員会 1995
30. 三島 格「サンゴと貝 南島葬制覚書(南島資料5)」『南島考古』No.5 沖縄考古学会 1977
31. 註22に同じ。

【参考文献】

- 高宮廣衛『先史古代の沖縄』 第一書房 1991
- 高宮廣衛『沖縄縄文土器研究序説』 第一書房 1993
- 高宮廣衛『沖縄の先史遺跡と文化』 第一書房 1994
- 高宮廣衛他『室川貝塚 範囲確認調査報告書』 沖縄市教育委員会 1979
- 金武正紀他『恩納村熱田第2貝塚発掘調査報告書』 沖縄県教育委員会 1979
- 安里嗣淳他『伊是名貝塚 緊急発掘調査報告書』 伊是名村教育委員会 1979
- 当真嗣一他『大原 久米島大原貝塚群発掘調査報告』 沖縄県教育委員会 1980
- 岸本義彦他『久里原貝塚 範囲確認調査報告書』 伊平屋村教育委員会 1981
- 岸本義彦他『古座間味貝塚 範囲確認調査報告』 沖縄県教育委員会 1982
- 岸本義彦他『地荒原貝塚 苦増原遺跡』 具志川市教育委員会 1983
- 金武正紀他『シヌグ堂遺跡—第1・2・3次発掘調査報告—』 沖縄県教育委員会 1985
- 大城 慧他『地荒原貝塚—個人住宅建築工事に係る発掘調査—』 具志川市教育委員会 1986
- 岸本義彦他『宇佐浜遺跡 発掘調査報告』 沖縄県教育委員会 1989
- 盛本 勲他『清水貝塚 発掘調査報告』 具志川村教育委員会 1989
- 仲宗根求他『吹出原遺跡 個人住宅建築に伴う緊急発掘調査報告書』 読谷村教育委員会 1990
- 名嘉真宜勝・恵原義盛『沖縄・奄美の葬送・墓制』 明玄書房 1979
- 酒井卯作『琉球列島における死霊祭祀の構造』 第一書房 1987
- 沖縄地域史協議会編『シンポジウム 南島の墓 沖縄の葬制・墓制』 沖縄出版 1989
- 座間味政光他『古我地原内古墓—沖縄自動車道（石川～那覇間）建設工事に伴う緊急発掘調査報告書(7)—』 沖縄県教育委員会 1987
- 知名定順他『宜野座村乃文化財(6)—クジチ墓・クジチ原遺跡発掘調査報告書—』 宜野座村教育委員会 1988
- 呉屋義勝他『奥間ノ口墓 一般国道58号牧港立体事業に係る緊急発掘調査報告書』 宜野湾市教育委員会 1996
- 山城安生他『上勢頭古墓群—嘉手納(7)貯油施設建設工事に伴う文化財発掘調査報告—』 北谷町教育委員会 1996

圖 版



PL. 1 遺跡周辺の空中写真（1993年撮影）赤丸部分が調査地区〈上が北〉



PL. 2 遺跡遠景・近景 1: 三重グスクよりガジャンピラ丘陵を望む〈北東から〉
 2: 金城方向より遺跡を望む 〈南西から〉
 3: " 〈北西から〉



洞穴入口及び上部近景〈南西から〉



上部発掘調査状況〈東から〉



上部完掘状況〈北東から〉



層序観察畦設定状況〈東から〉



22ライン畦北西壁面(N-24)〈南東から〉



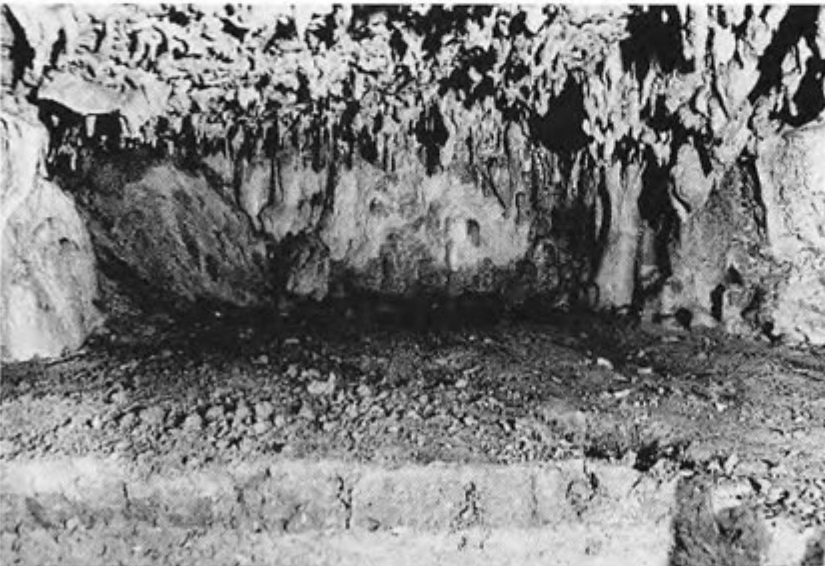
24ライン畦北西壁面(N-24)〈南東から〉



内部発掘調査状況<南西から>



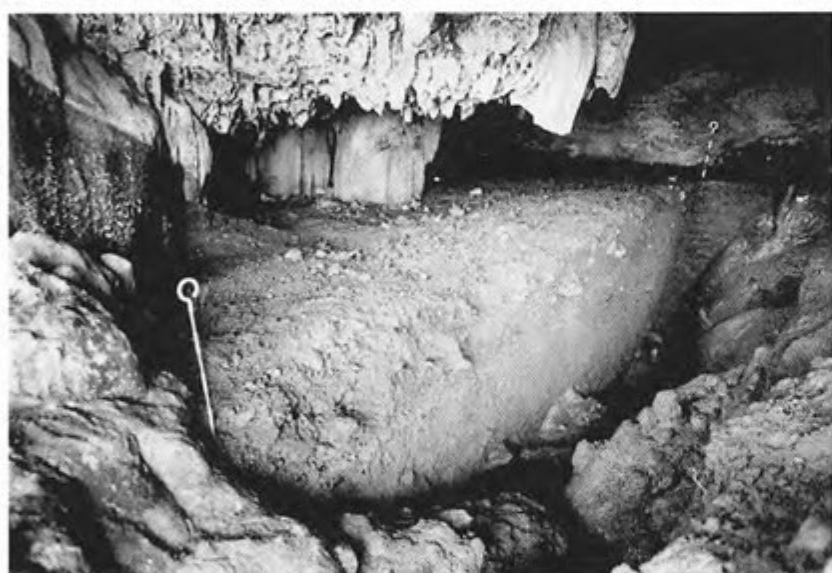
内部(入口付近)の状況<南西から>



内部(最奥部)の状況<南から>



左側斜面北西壁面〈南東から〉



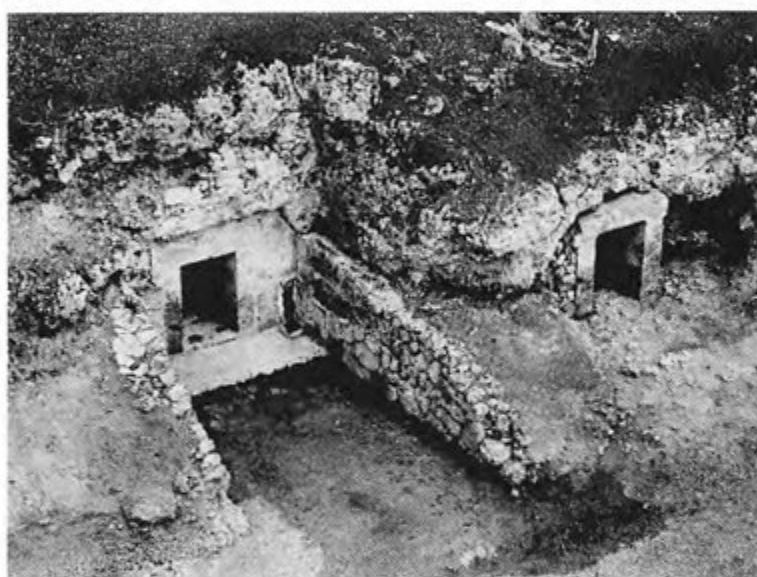
中央平坦部(試掘トレンチ北壁面)〈南西から〉



中央平坦部(Aトレンチ東壁面)〈西から〉



1号墓(右)・2号墓(左)〈西から〉



3号墓(右)・4号墓(左)〈西から〉



6号墓(右)・7号墓(左)〈西から〉

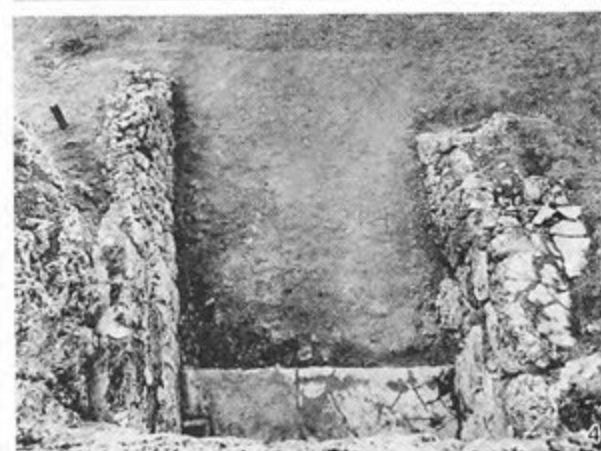


PL. 8 各古墓の状況(1号墓)

1: 1号墓正面 2: 1号墓左側面と墓庭
3: 1号墓右側面 4: 1号墓室内



PL. 9 各古墓の状況(2・3・4号墓) 1: 2号墓(右), 3号墓(中), 4号墓(左)
 2: 2号墓正面 4: 3号墓正面
 3: 2号墓室内 5: 3号墓室内



PL. 10 各古墓の状況(4号墓) 1:4号墓正面
 2:4号墓庭左側石積 3:4号墓庭右側石積
 4:4号墓庭 5:4号墓室内(枝サンゴ、礎敷の状況)



7号墓正面と墓庭正面の門



7号墓頂部



7号墓庭



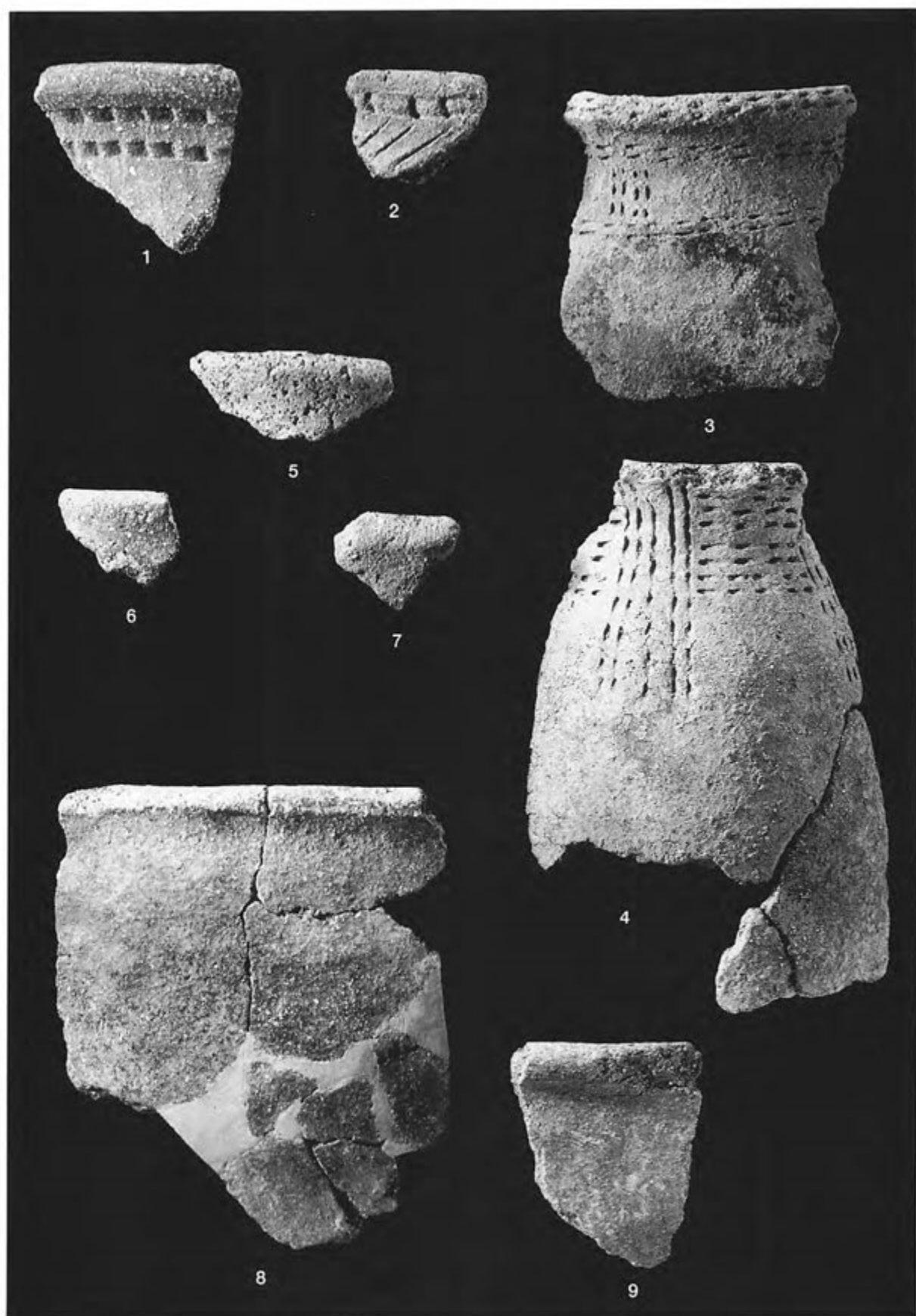
PL. 12 各古墓の状況(5・6・7号墓) 1:7号墓庭左側石積 2:7号墓右側石積(石積上は6号墓)
 3:7号墓右側石積内の方形石組 4:5号墓正面
 5:6号墓正面



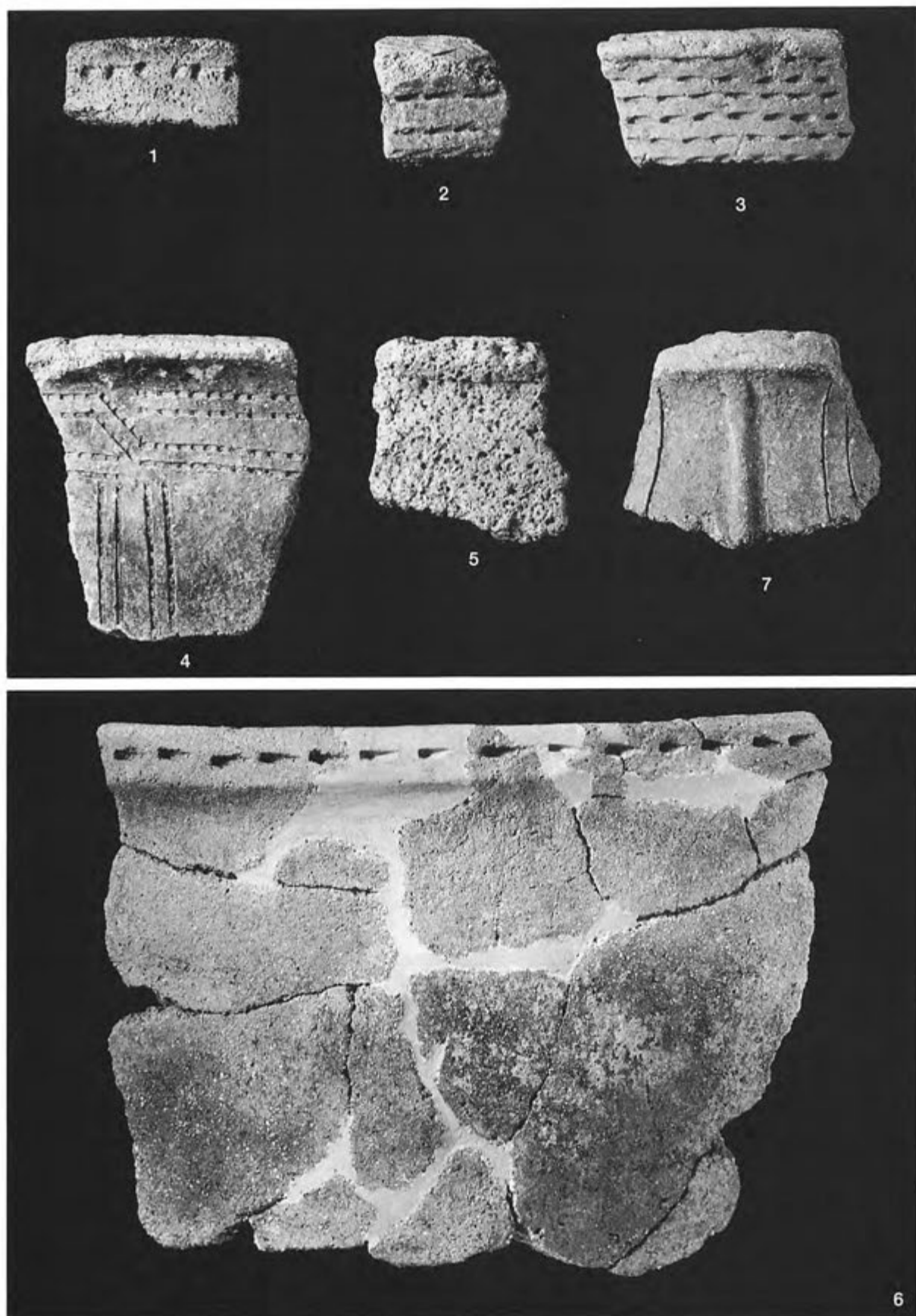
PL. 13(第9図) 土器：第I群A類



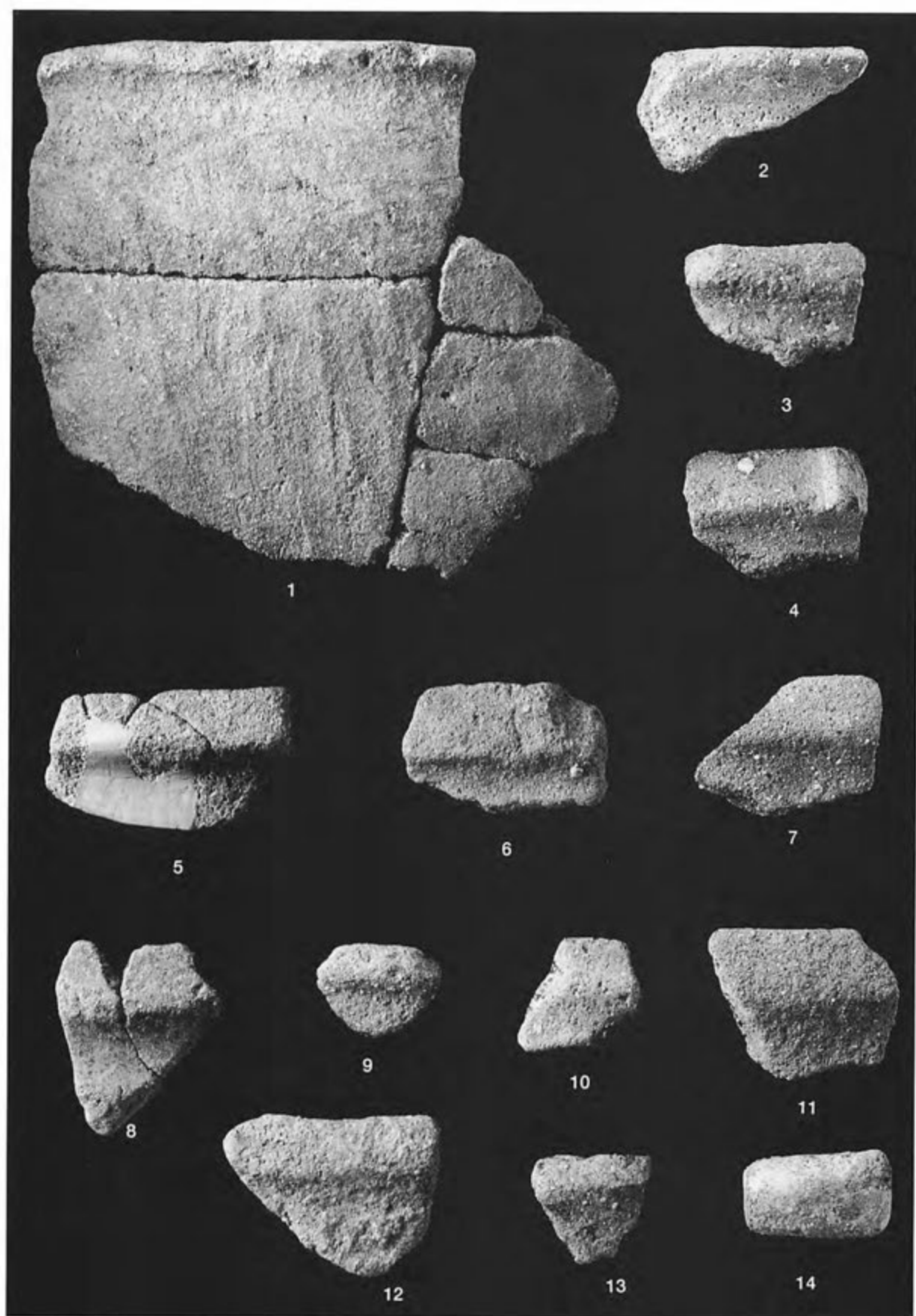
PL. 14(第10図) 土器：第I群B類



PL. 15(第11図) 土器：第I群C類



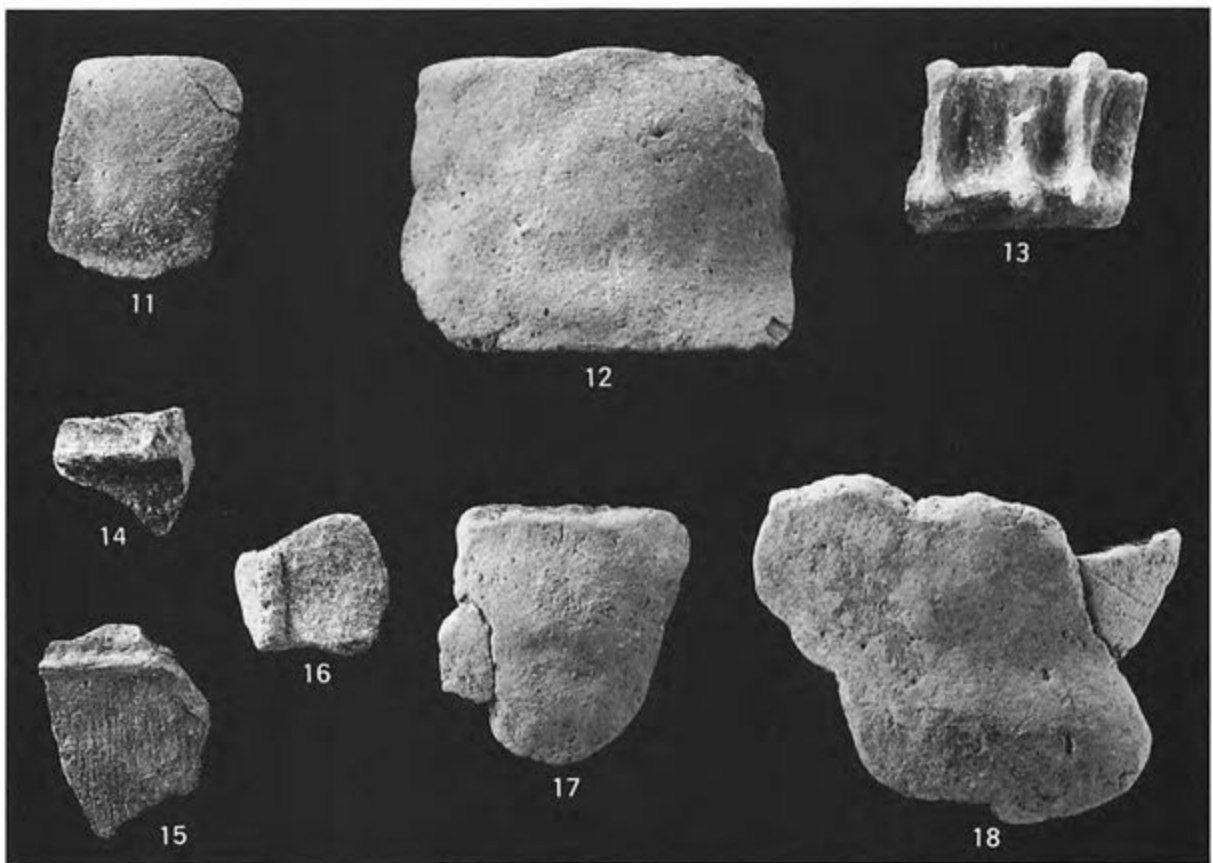
PL. 16(第12図) 土器：第I群D類



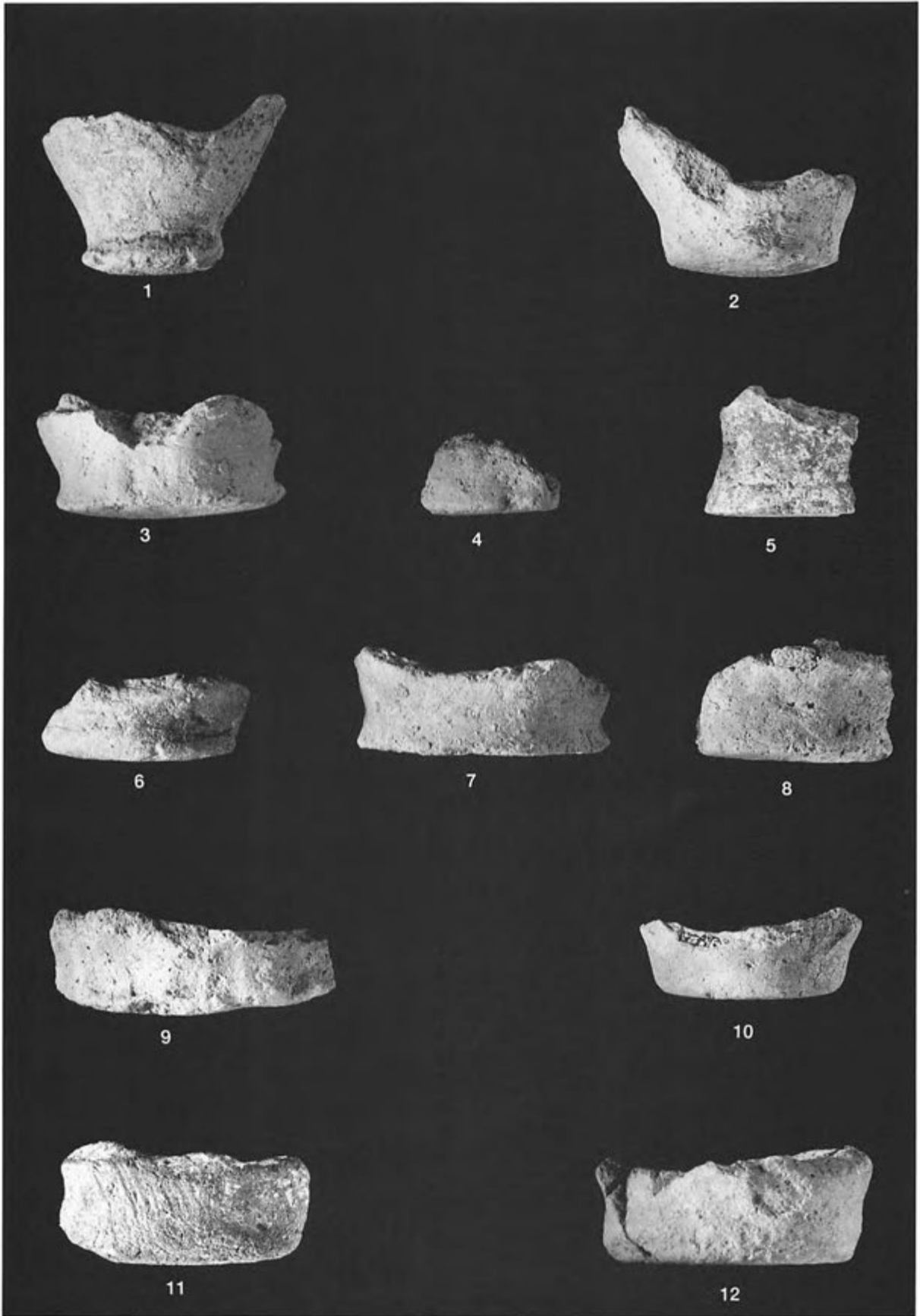
PL. 17(第13図) 土器：第I群D類



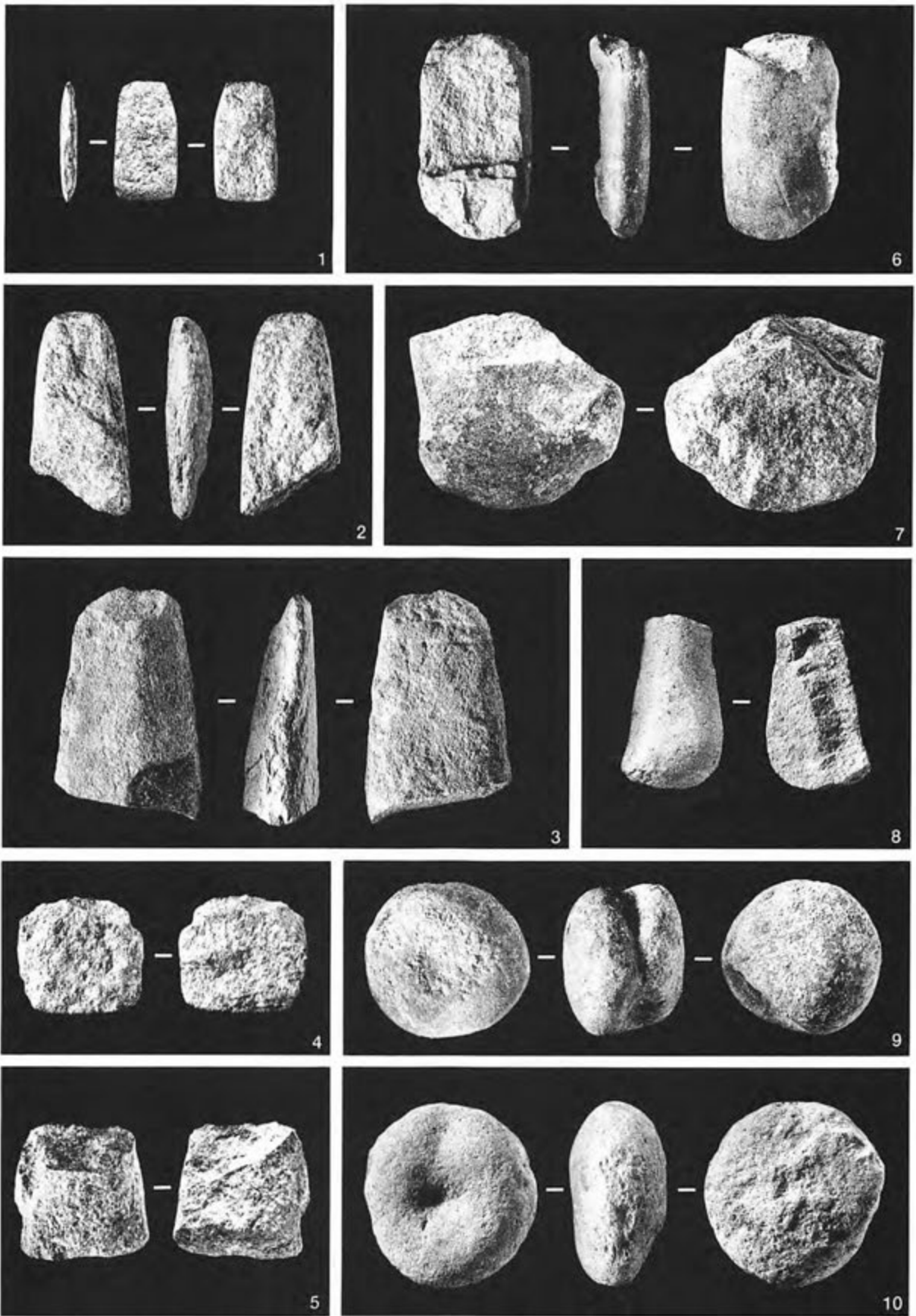
PL. 18(第14図) 土器：第I群胴部(1)・底部(第1種2~5, 第2種6・7, 第3種8)



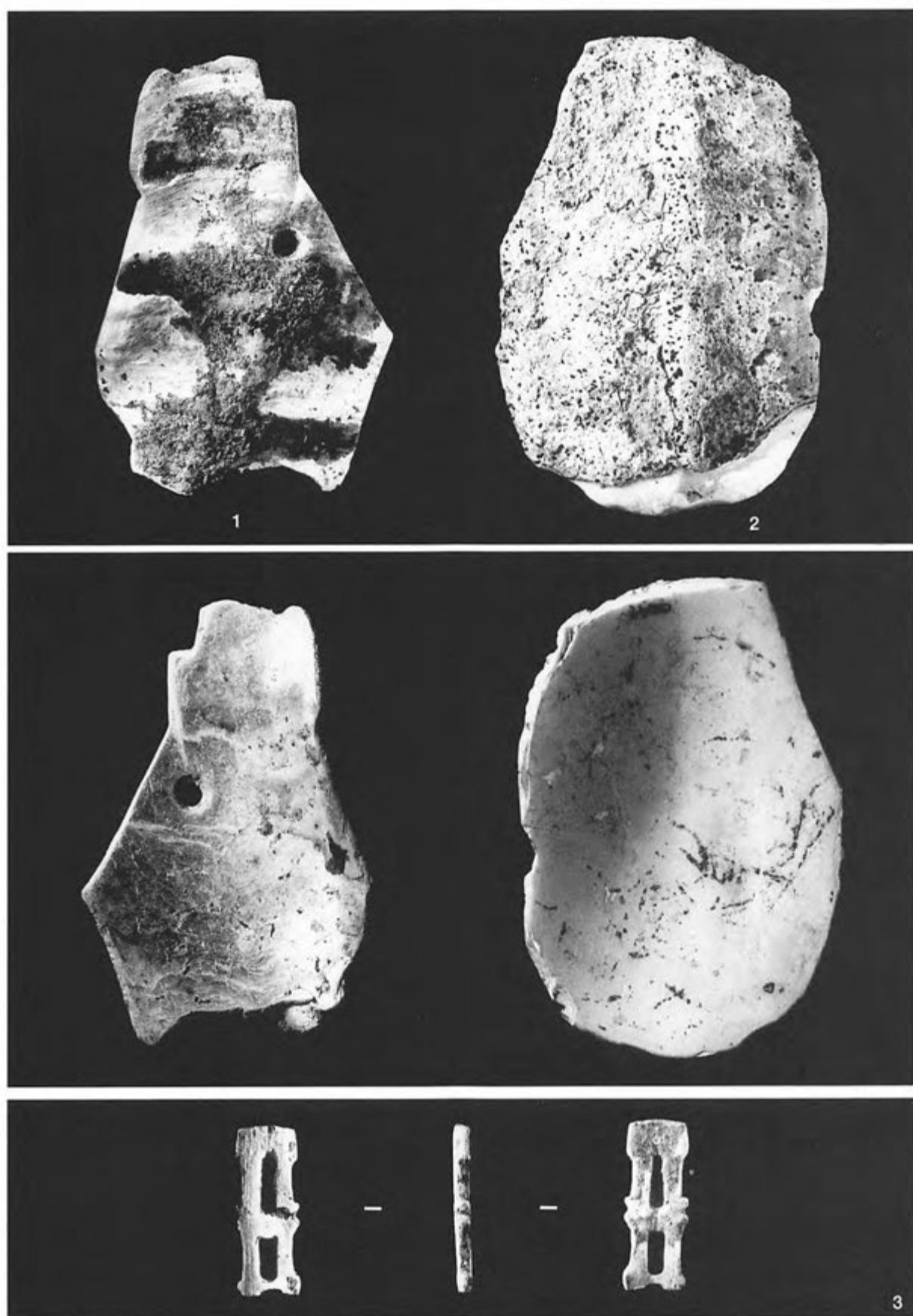
PL. 19(第15図) 土器：第Ⅱ群A類(第1種1~3, 第2種4~9, 第3種10)
B類(11~13)・胸部(14~18)



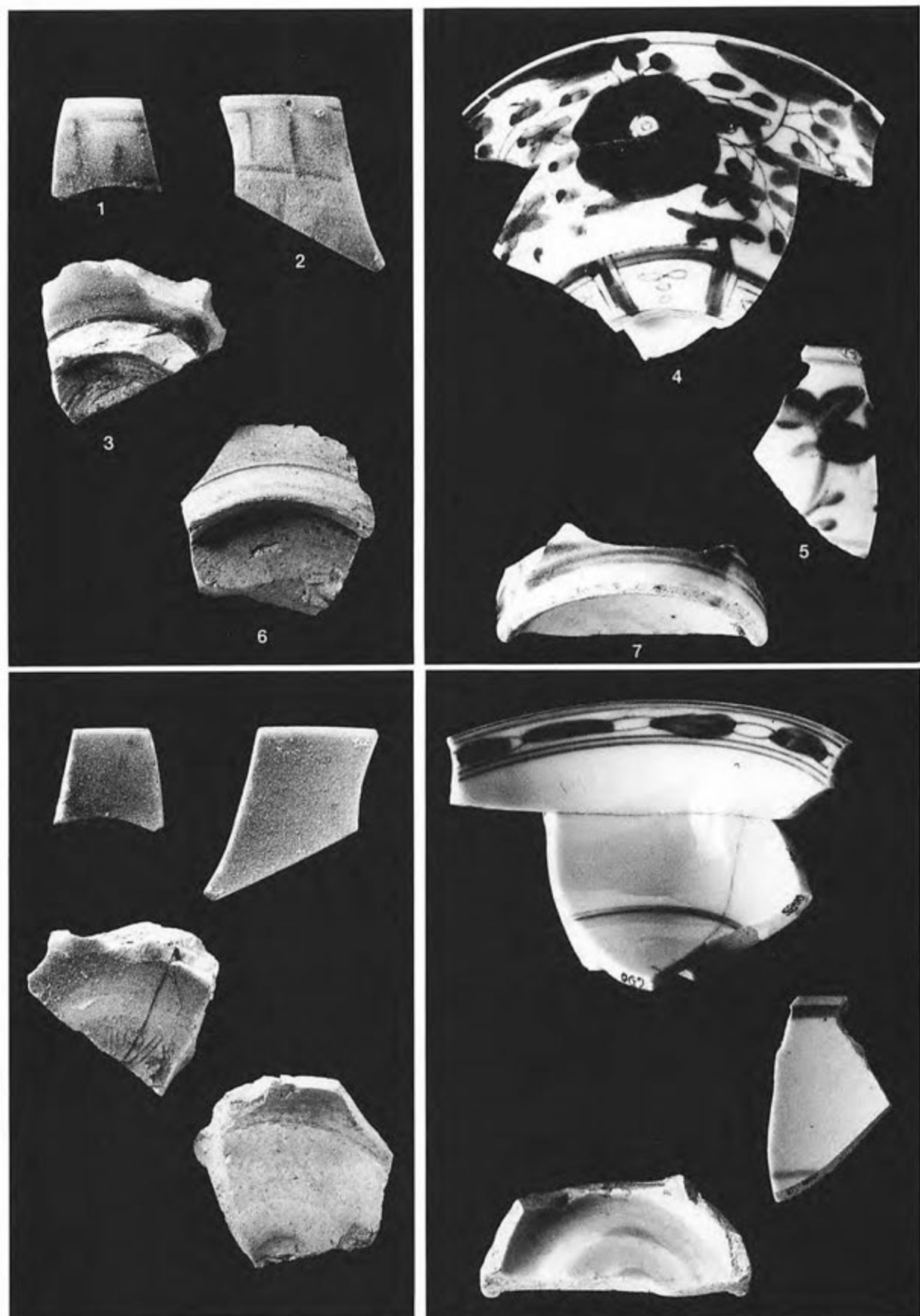
PL. 20(第16図) 土器：第Ⅱ群底部(第1種1・2, 第2種3~5, 第3種6~9, 第4種10~12)



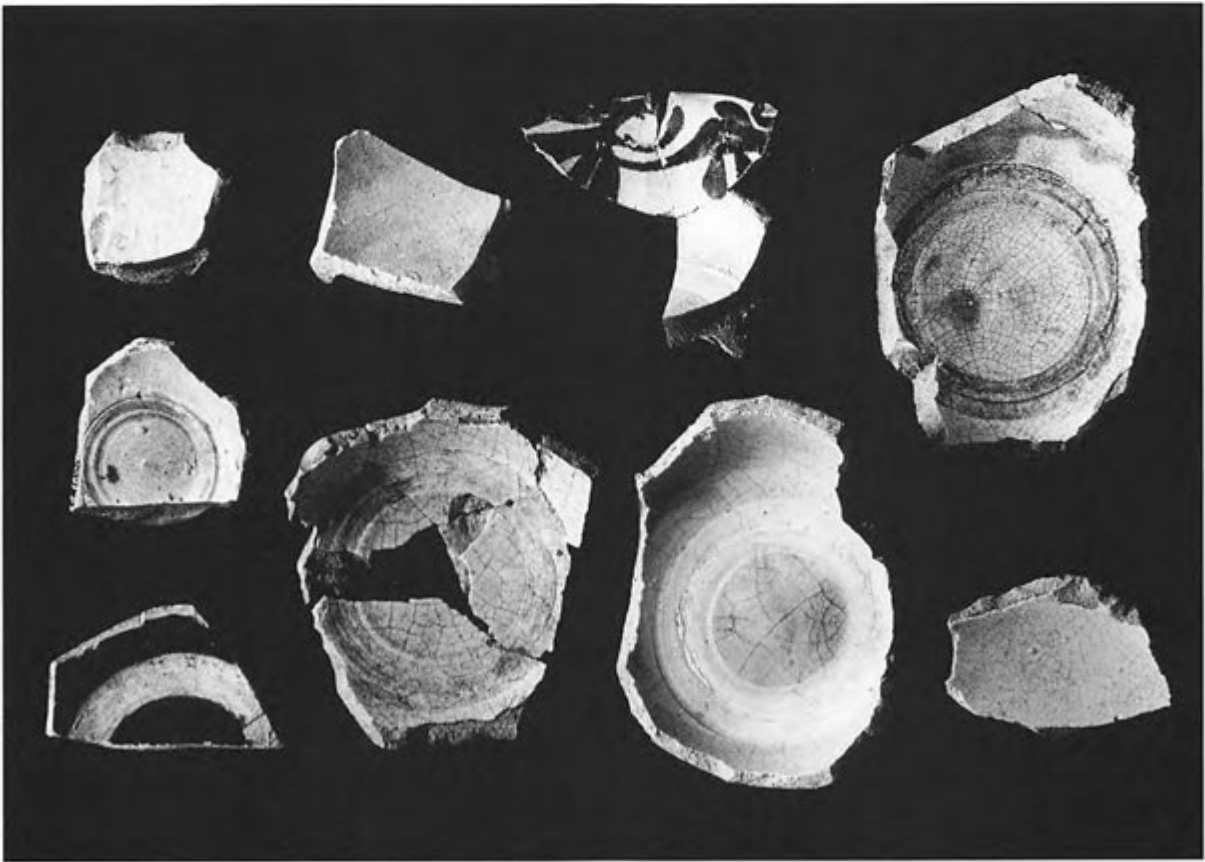
PL. 21(第17図) 石器：石斧(1~5)・敲石(6・7・9・10)・不明(8)



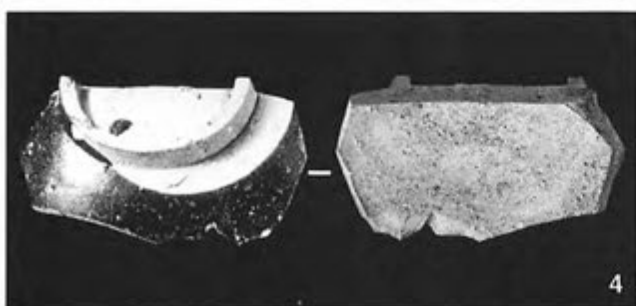
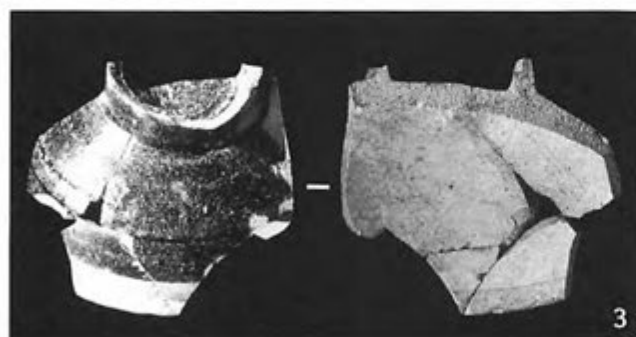
PL. 22(第18図) 貝製品(1・2)、骨製品(3)



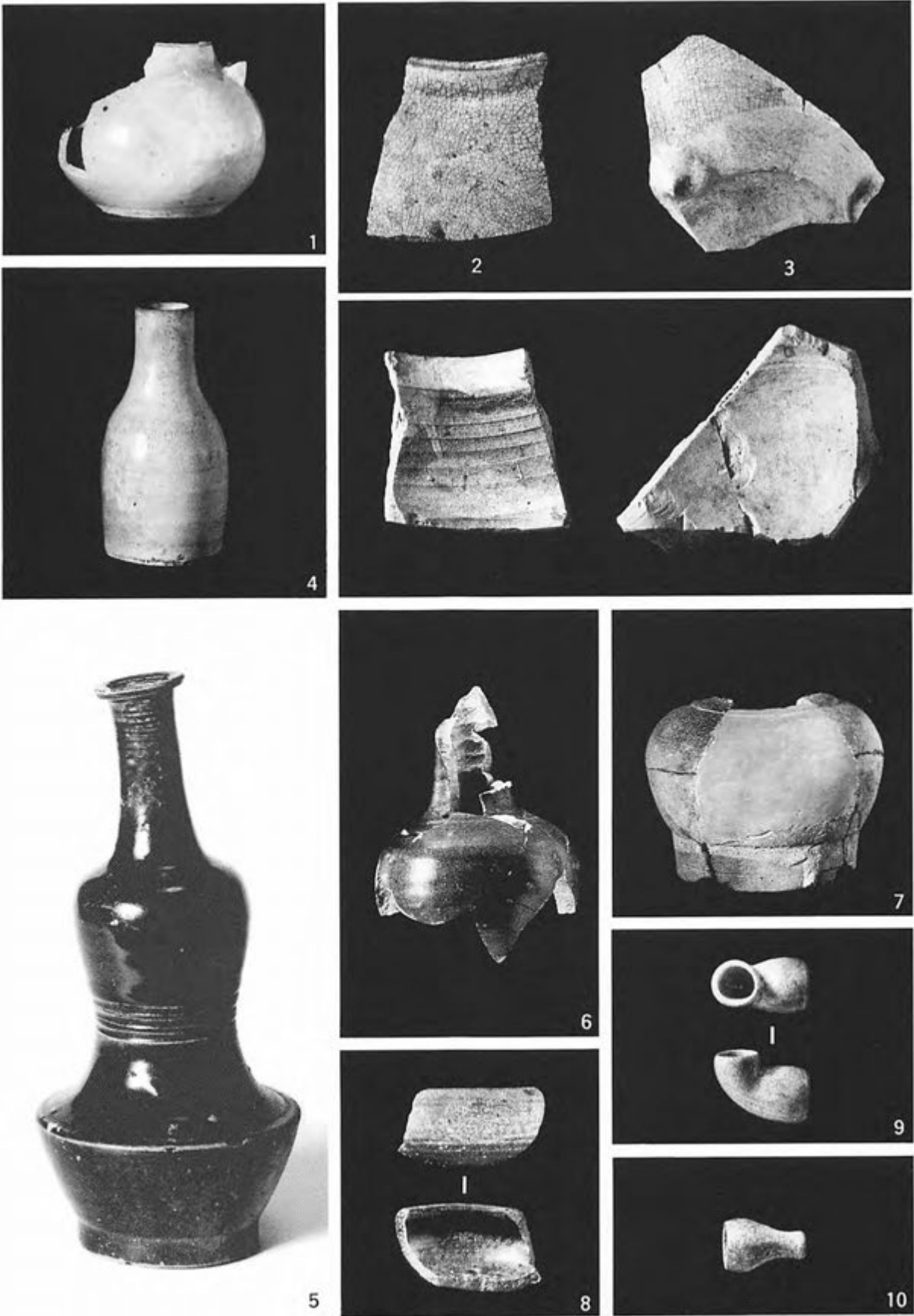
PL. 23(第25図) 中国産磁器：青磁碗(1～3)・青花碗(4～6)・青花香炉(7)



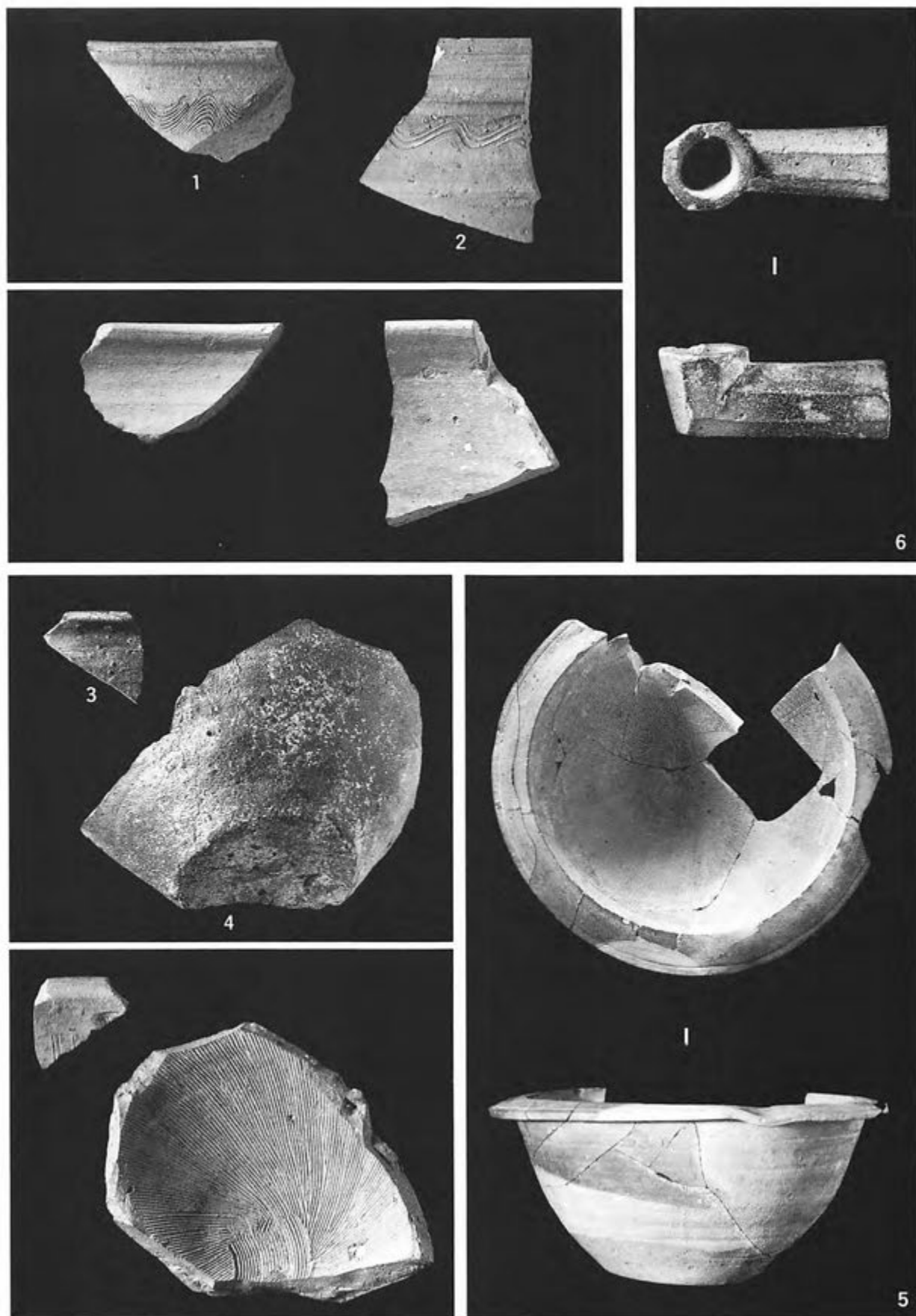
PL. 24(第26図) 沖縄産陶器・施釉：小碗(1・2)・碗(3~8)・皿(9)



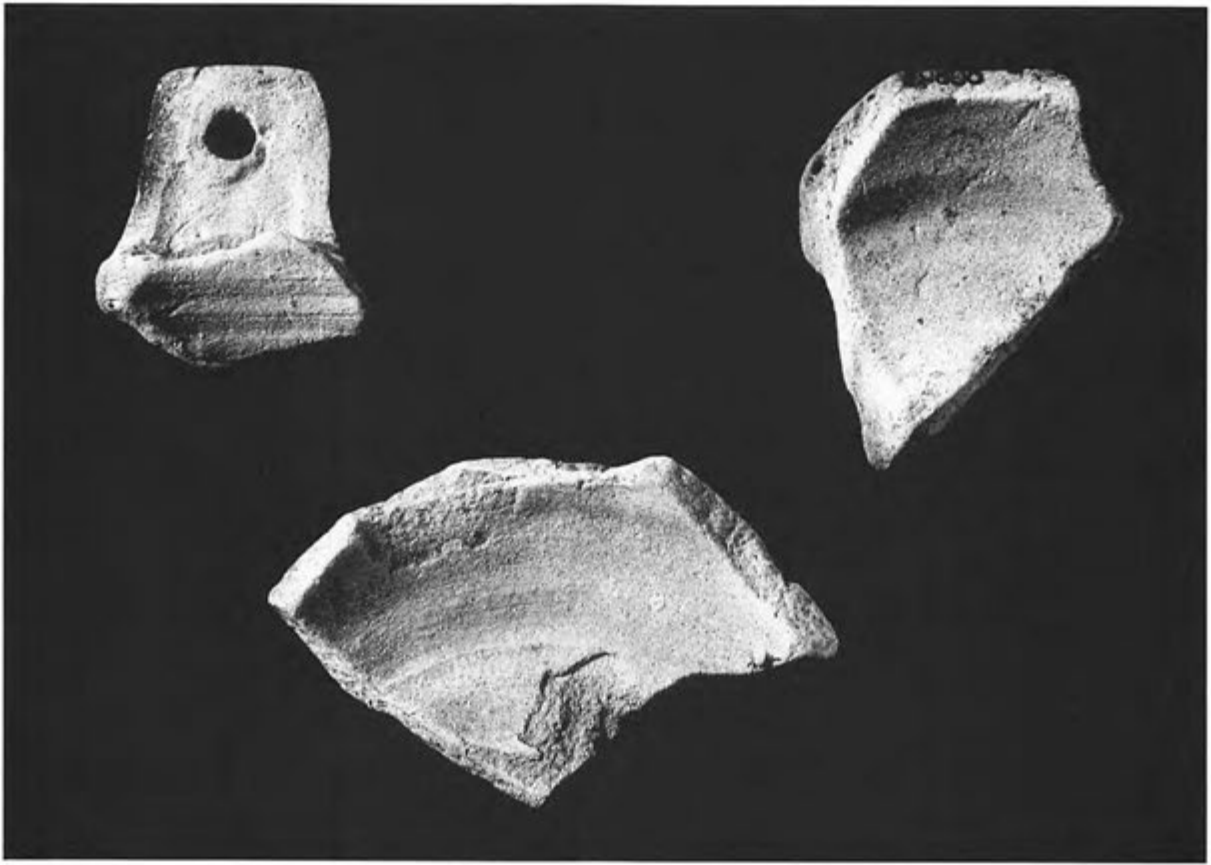
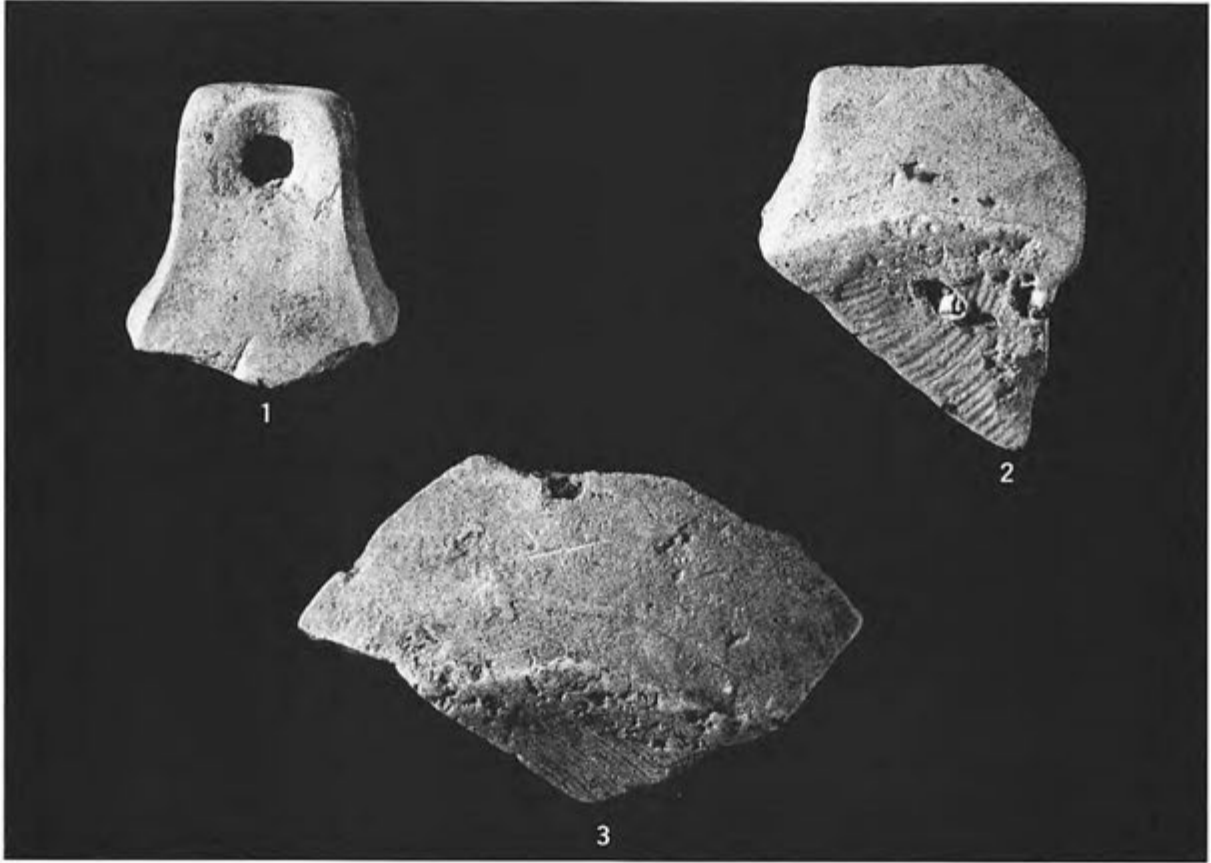
PL. 25(第27図) 沖縄産陶器・施釉：鉢(1)・蓋(2~4)・蓋物(5・6)



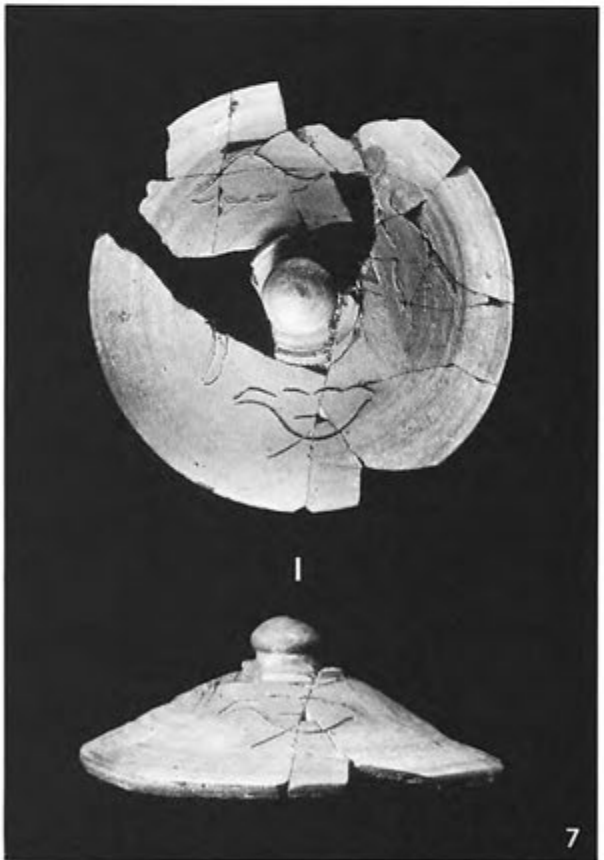
PL. 26(第28図) 沖縄産陶器・施釉：水注(1~3)・瓶(4~7)・秉燭(8)・煙管(9・10)



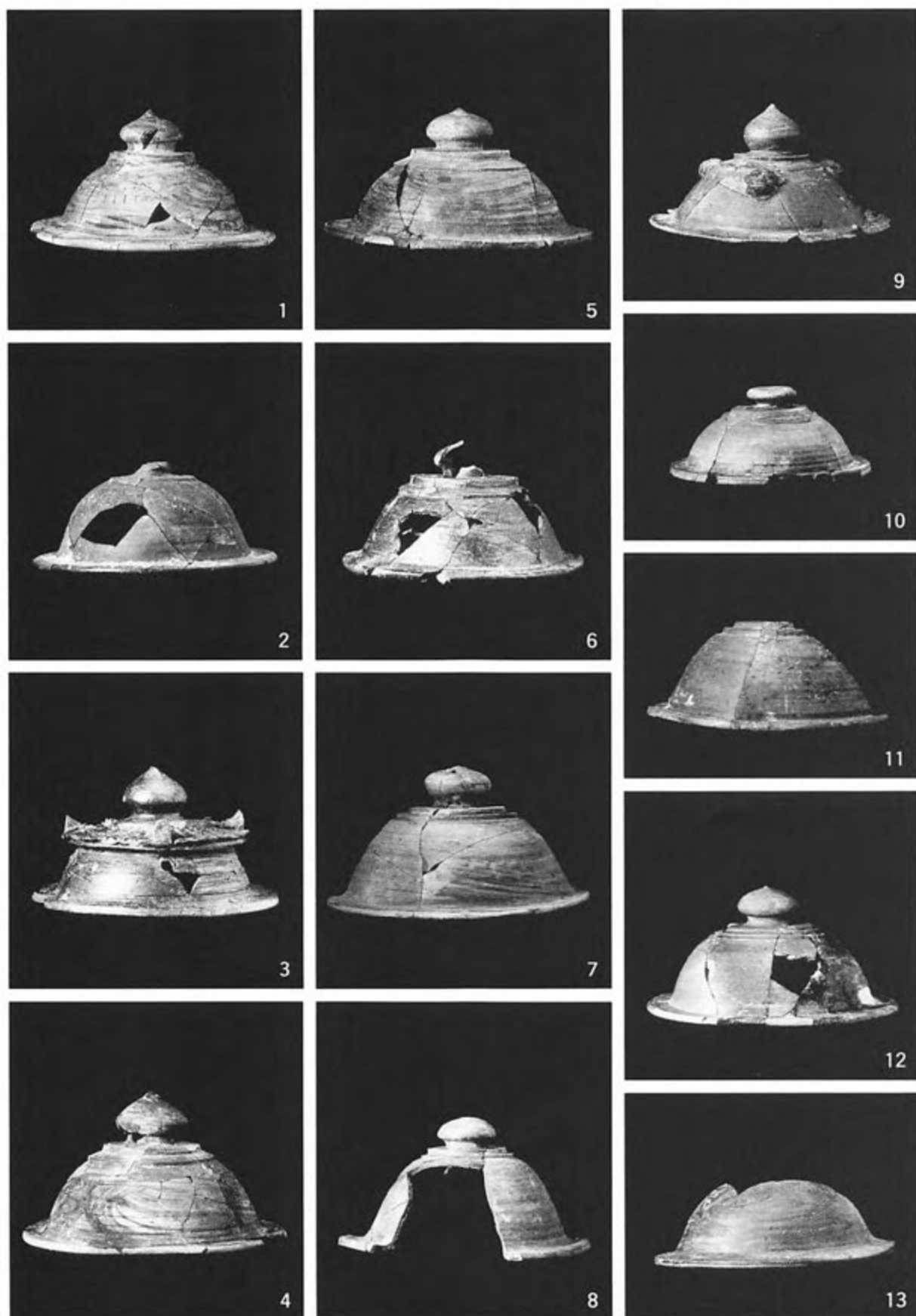
PL. 27(第29図) 沖縄産陶器・無釉：水鉢(1・2)・挿鉢(3~5)・煙管(6)



PL. 28(第30図) 沖縄産陶器・陶質：土瓶(1)・鉢(2・3)



PL. 29(第31図) 藏骨器：甕形「蓋」第I群(A類1・2, B類3・4, C類5, D類6・7)



PL. 30(第32図) 藏骨器：甕形「蓋」第Ⅱ群(A類1~3, B類4~11, C類12, 不明13)



PL. 31(第33図) 蔵骨器：甕形「身」第I群(A類1・2, B類3, C類4)



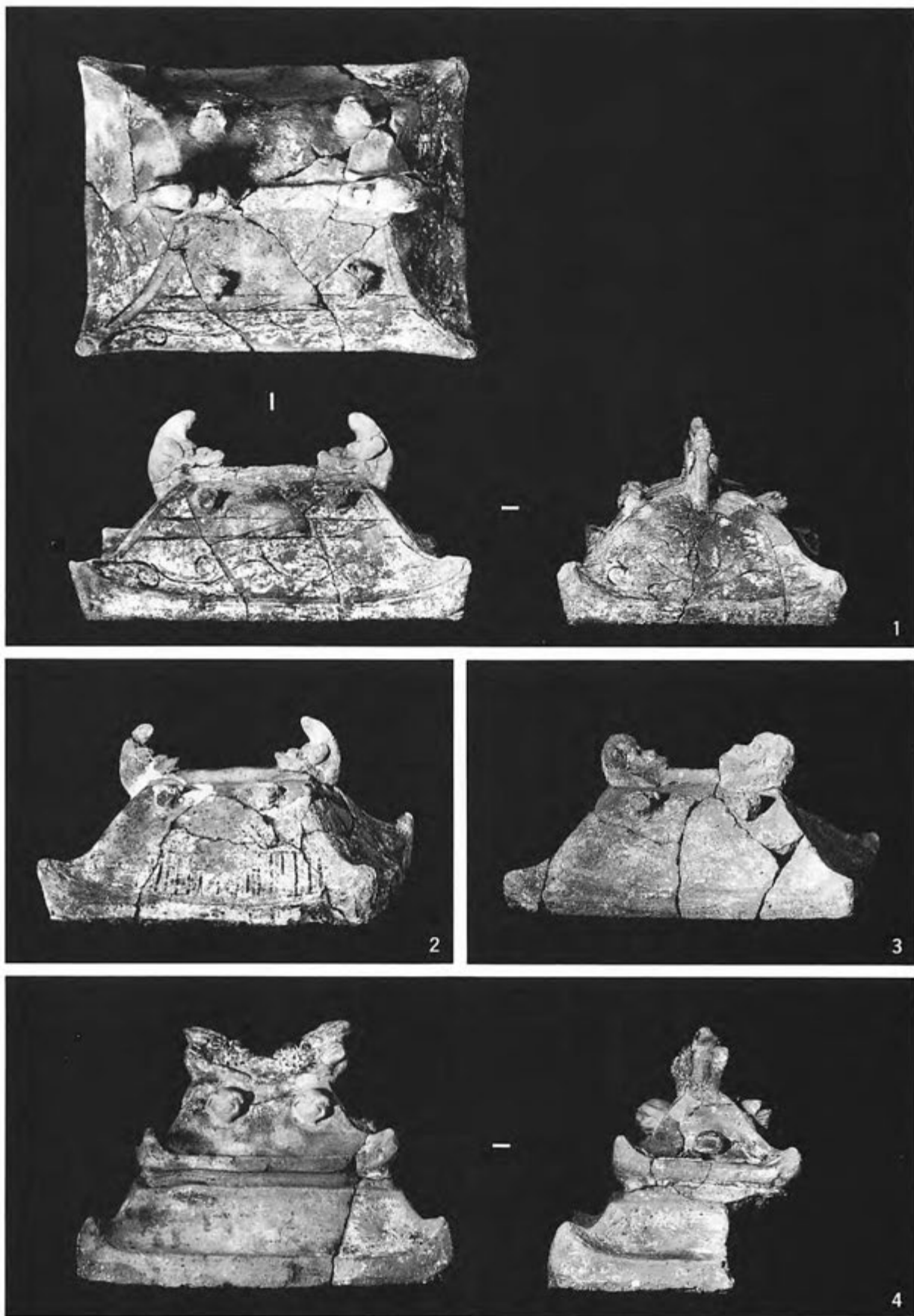
PL. 32(第34図) 藏骨器：甕形「身」第I群(B類1, C類2)



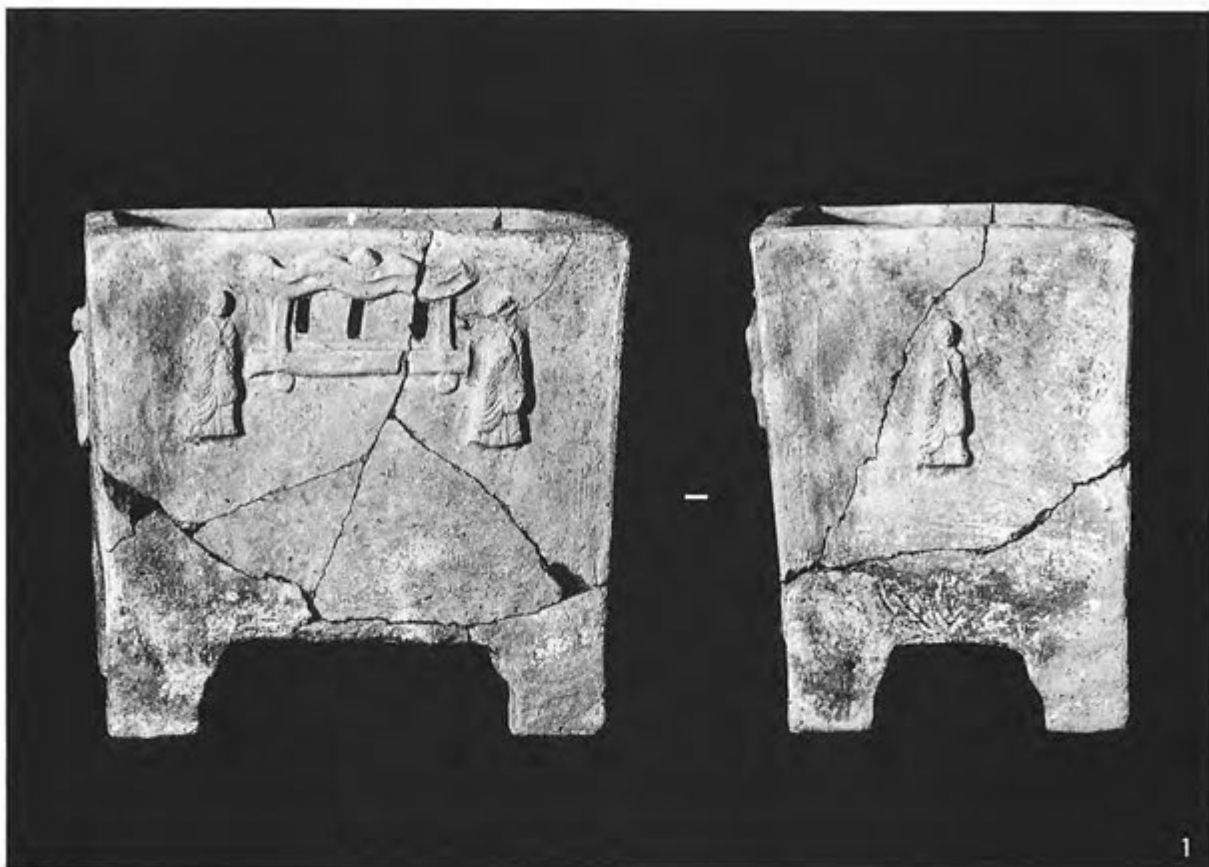
PL. 33(第35図) 藏骨器：甕形「身」第Ⅱ群(A類1・2)



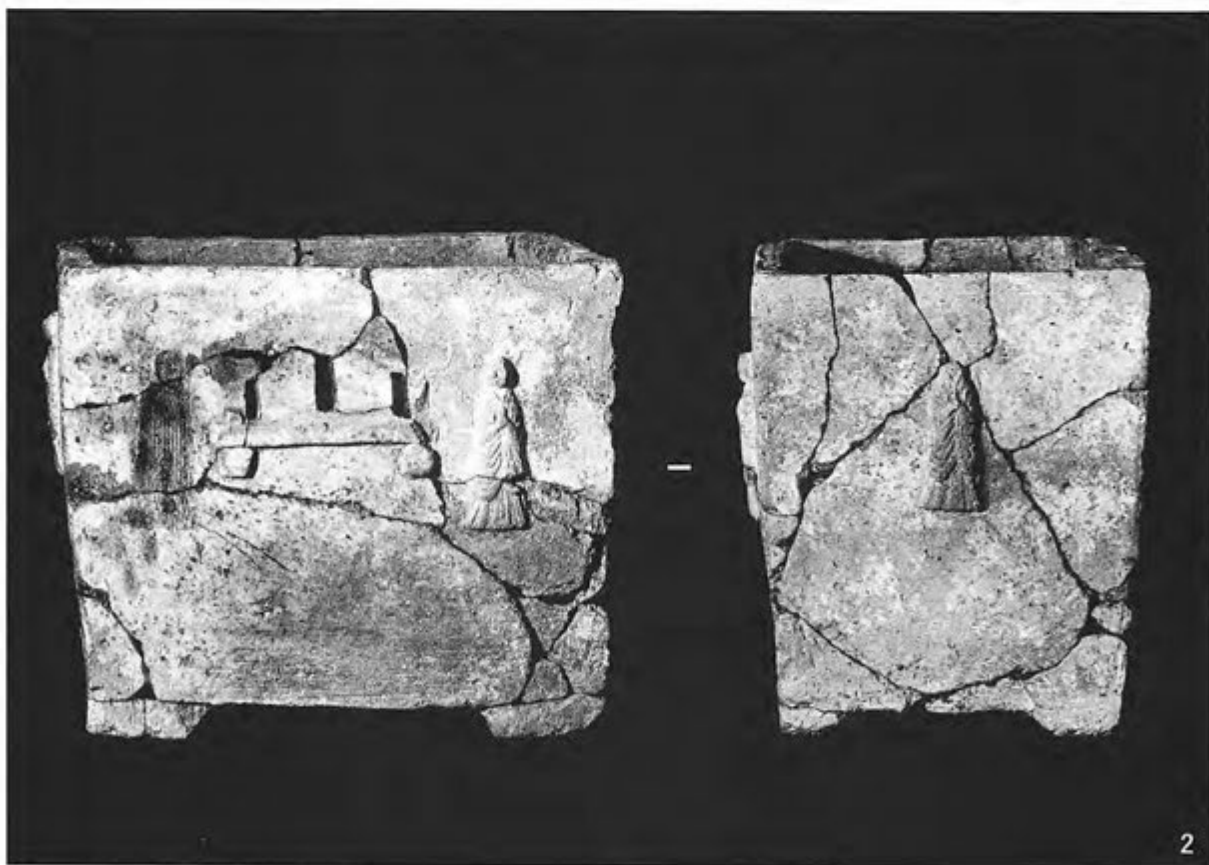
PL. 34(第36図) 藏骨器：甕形「身」第Ⅱ群(B類1, C類2)



PL. 35(第37図) 藏骨器：箱形「蓋」(A類1~3, B類4)

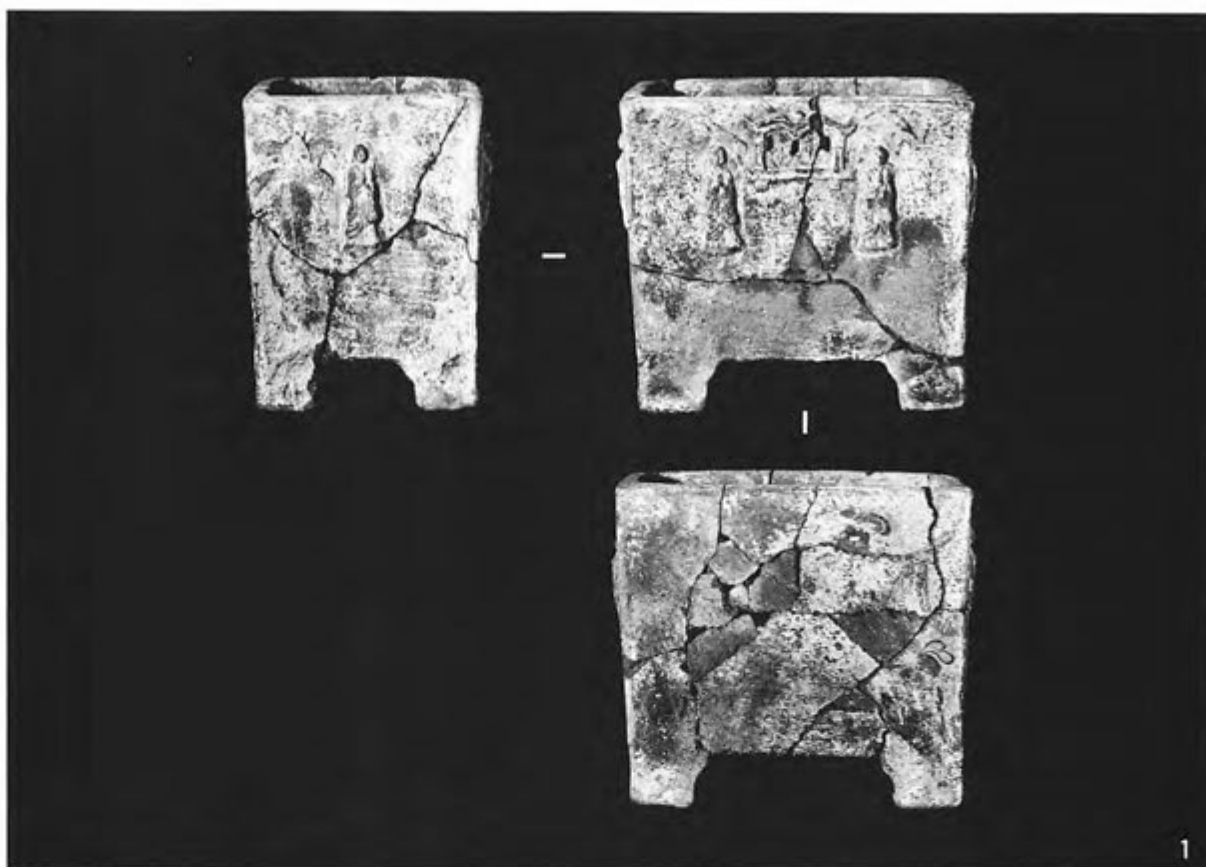


1



2

PL. 36(第38図) 藏骨器：箱形「身」(A類1, B類2)



1



2

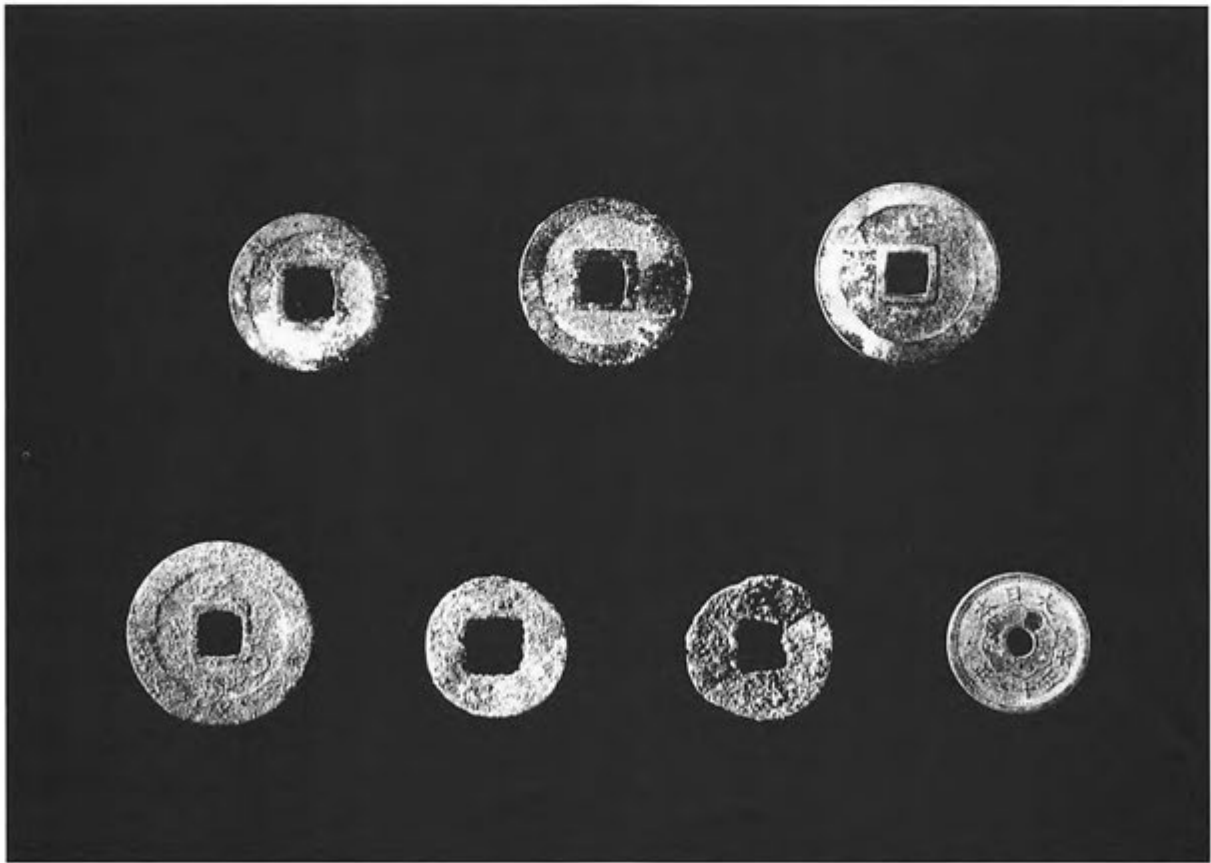
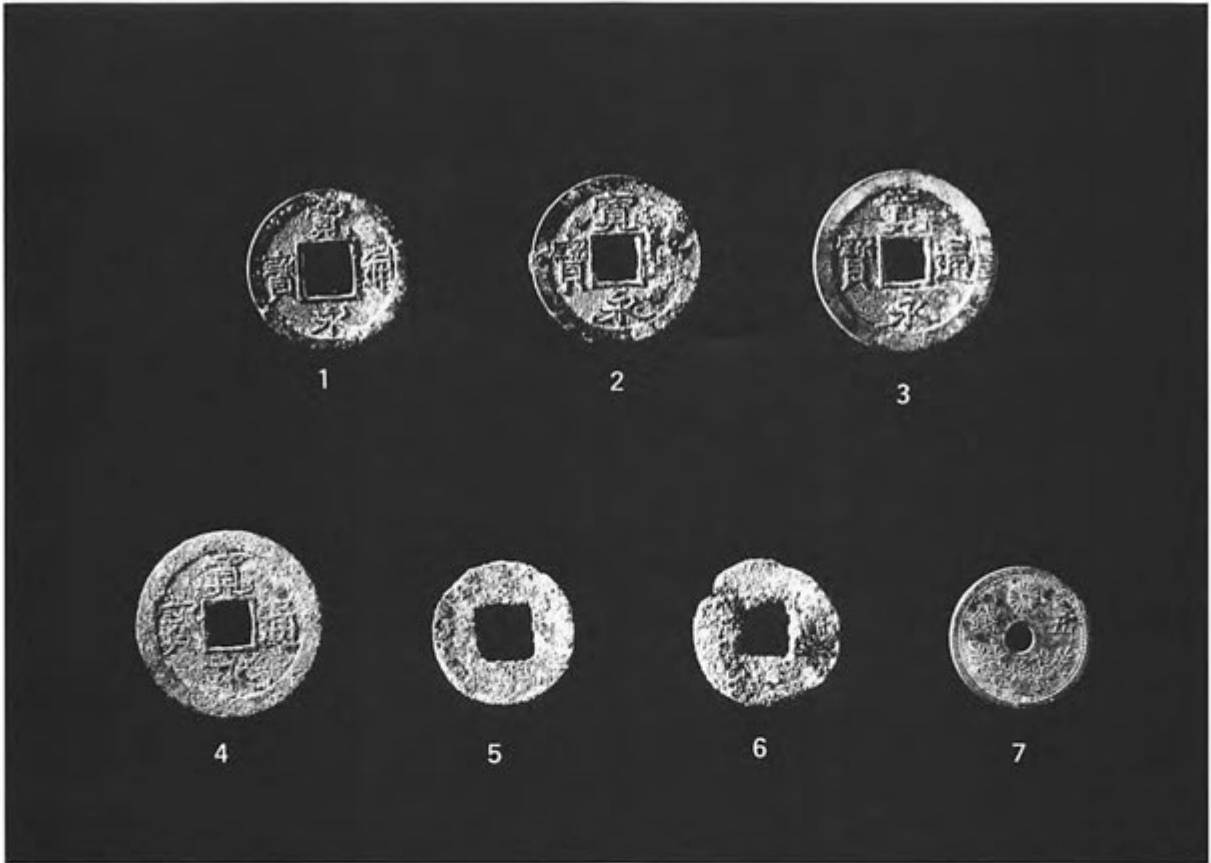
PL. 37(第39図) 藏骨器：箱形「身」(A類1, B類2)



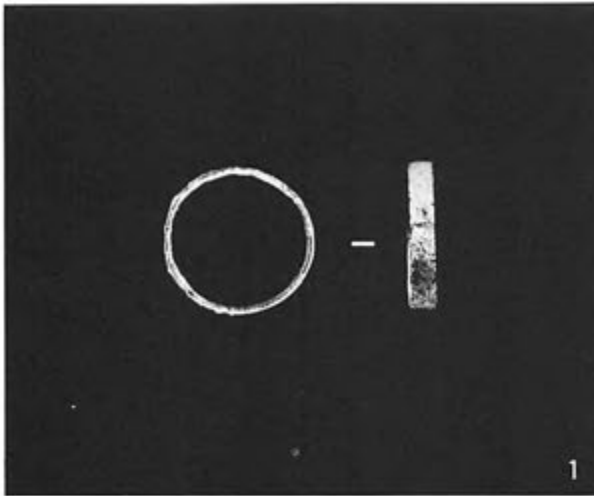
PL. 38(第40図) 転用蔵骨器：土器壺



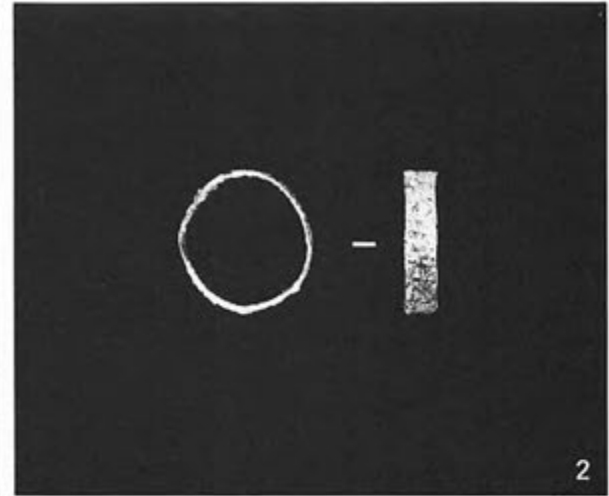
PL. 39(第41図) 転用蔵骨器：四耳壺(1)・三耳壺(2)・甕(3)



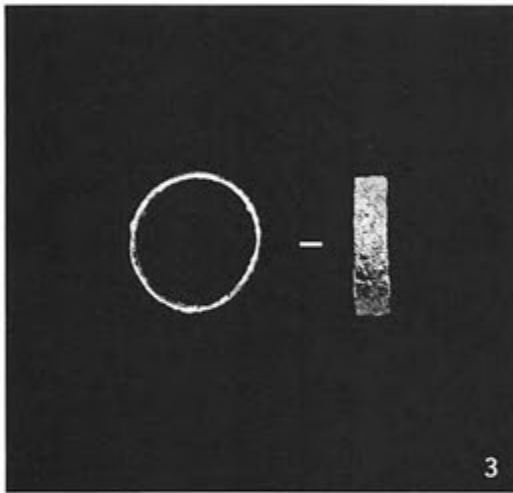
PL. 40(第43図) 金属製品：銭貨



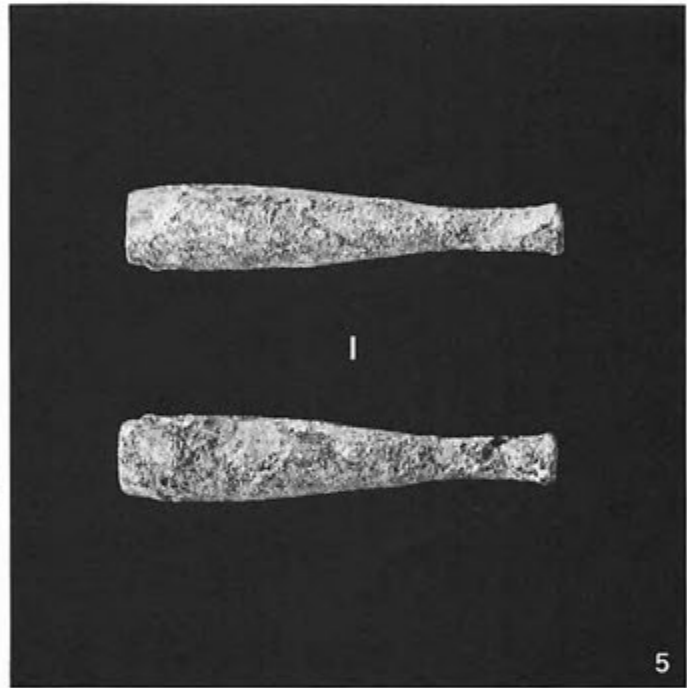
1



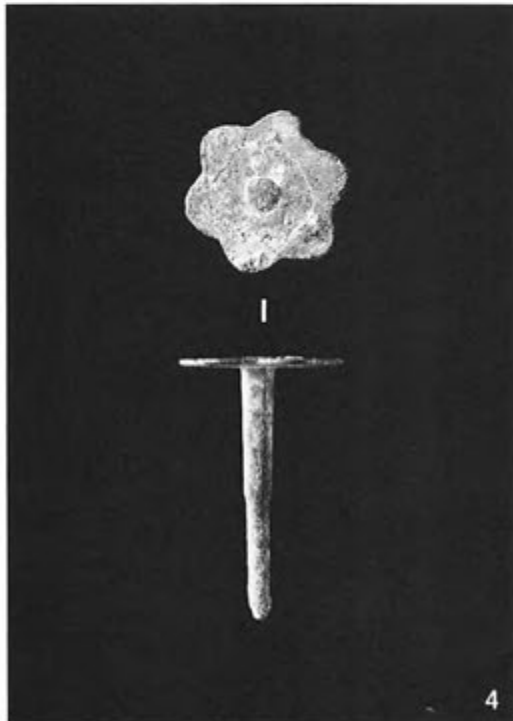
2



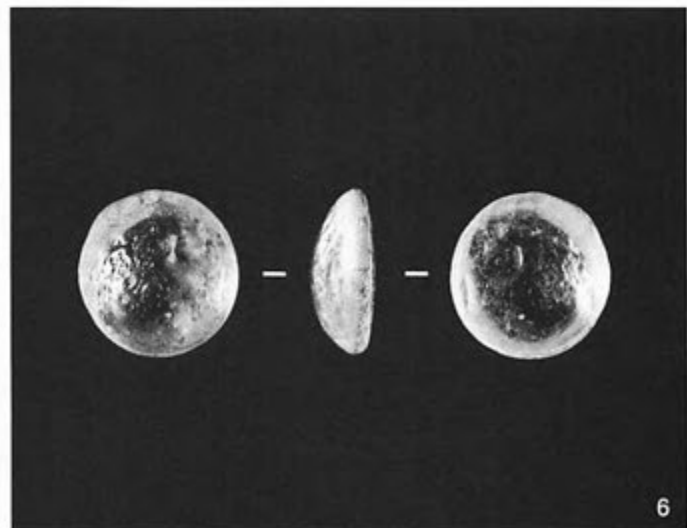
3



5



4



6

PL. 41(第44図) 金属製品：指輪(1~3)・かんざし(4)・煙管(5)
ガラス製品：用途不明(6)

那覇市文化財調査報告書第36集

ガジャンピラ丘陵遺跡

— 小禄金城土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告 —

発行 1997年3月
那覇市教育委員会
〒900 沖縄県那覇市樋川2-8-8

編集 那覇市教育委員会文化課
TEL 098-853-5775

印刷 株式会社 近代美術
〒901-11 沖縄県南風原町字兼城206
TEL 098-889-4113
